

な

内藤香石 (ないとう・こうせき/1908～1986年)

山梨県生れ。立大卒。石井双石にまなび、2度中国へ留学し文字学を研究。戦後、毎日書道展運営委員、日展審査員などをつとめる。日本刻字協会の設立にくわわり、のち会長。著作に「印章世界史」など。1986年没、78歳。篆刻家

内藤秀因 (ないとう・しゅういん/1890～1987年)

山形県生れ。山形県師範学校本科第一部卒。1919年東京美術学校図画師範科中退。石川寅治、石井柏亭に師事。27～29年渡欧、留学、アマン・ジャンに師事。サロン・ドートンヌ入選。国立科学博物館の16面200メートルにわたる大壁画の制作。日本水彩画会会員のち理事長、顧問。52年示現会会員。東京で没、96歳。92年庄内町内藤秀因水彩画記念館が開館。水彩画家

内藤伸 (ないとう・しん/1882～1967年)

島根県生れ。東京美術学校卒。高村光雲に師事する。帝展審査委員をつとめ、1927年帝国美術院会員。31年日本木彫会を創立、主宰。一刀ごとに気合いをこめる「気刀彫」の彫法を創案。1967年没、84歳。作品に「山上」「獅子」「光明皇后」など。彫刻家

内藤 衷 (ないとう・たい/1900～1988年)

東京生まれ。府立第三中学校中退。本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。1924年星薬科大学の大壁画制作に参加。26年第7回帝展に初入選、以後9、10、15回展に出品。36年昭和11年文展に出品。37年第1回新文展に出品、以後、2、4回展に出品。44年戦時特別展に無鑑査出品。春台美術会会員。46年光風会会員。日展評議員。千葉県美術会創設委員。88年1月3日千葉県で没、享年87歳。(佐)洋画家

内藤鳴雪 (ないとう・めいせつ/1847～1926年)

1847年生れ。俳人であり教育家で、「ホトギス」の選者。少年時代に子規に漢詩の指導、子規の創作活動を最も早くから見ている。鳴雪は生涯、子規のよき理解者。鳴雪がいなければ子規の活動がどうなったかわからないともいわれる。鳴雪は下村為山の従兄にあたり、絵も達者で、ユーモアのある画賛を多く残す。ペンネームの「鳴雪」は「世事はなりゆきにまかせ」から得たもので、別号の「老梅居」は「狼狽している」から出ているという。「翁」の敬称で呼ばれ、子規派の長老として重きをなした。1926年没、79歳。俳画

内藤瑤子 (ないとう・ようこ/1985年～)

神奈川県生れ。2000年私立公文国際学園高等部入学、美術教師伊藤潤に学ぶ。長谷川利行、鬮光、恩地孝四郎などの作品に興味。中途退学。ギャラリー街路樹で個展。湯島・羽黒洞個展。04年羽黒洞の契約作家。湯島・羽黒洞中心に個展で発表。洋画家、版画家

名井万亀 (ない・まき/1896～1975年)

広島市生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1926年渡仏、サロン・ドートンヌに出品。33年帰国後個展、257点展示。37年二科展に出品。45年二科会会員。46年退会。45年原爆で作品焼失。読売アンデパンダン展、現代美術展に出品。75年没。79、80歳。洋画家

名井万亀 II (ない・まき/1896～1976年)

広島市生れ。広島第一中学校卒。本郷洋画研究所で岡田三郎助からデッサンを学ぶ。26年渡欧、サロン・ドートンヌ、アンデパンダン展に出品。33年帰国。36年日本美術協会で大規模な個展開催。37年第24回二科展に出品。45年二科会会員となるが、46年日展参加をめぐり退会。48年読売アンデパンダン展を中心に活動。他に現代日本美術展などの出品。49年資生堂ギャラリーで個展。76年9月1日東京で没、享年79、80歳。(佐)洋画家

永井一正 (ながい・かずまさ/1929年～)

大阪生れ。1951年東京芸術大学彫刻科中退。日本代表グラフィック・デザイナー。60年日本デザインセンター創立参加。エッチングによる版画制作に挑戦。現在日本デザインセンター最高顧問、日本グラフィック・デザイナー協会理事、AGI会員、東京ADC会員、日本デザインコミッティ理事長、日本文化デザイン・フォーラム会員。作品収蔵＝東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、ニューヨーク近代美術館、ドイツ国立抽象美術館等多数。グラフィック、デザインセンター創立、版画

中井克巳 (なかい・かつみ/1927～2013年)

大阪生れ。1953～59年独立美術展出品。58～64年独立美術若手7人「鉄鷄会」結成出品。59年シェル美術賞3等賞、関西総合展読売新聞社賞、62年丸善美術賞佳作賞。64年訪欧、65年ヴェネツィア、カヴァッリーノ画廊個展。68年プレミオ・ピアツェッタ展1等賞、70年アンビツィオーニ・モデラーテ賞、73年ミラノ・トリエンナーレ銀賞。二枚重ねの構造をもつその作品は表のパネルを開けると、花開くように鮮やかな色と形をくりひろげ、また立体化する。独特の造形はイタリア美術界で高く評価。30年ほどミラノに在

住し、96年枚方市のアトリエを拠点。2004年にはイタリア文化会館・京都で「Katsumi Nakai 'aperto' 展」が開催。2013年没、86歳。洋画家

中井金三 (なかい・きんぞう/1883~1969年)

鳥取県生れ。1897年に上京、日本中学を卒、1905年翌年東京美術学校西洋画科に入学、黒田清輝に師事、10年同校卒。倉吉中学の図画教師となり、卒業後に指導した前田寛治をはじめ、多くの教え子を美術系の学校に進学させた。20年「砂丘社」結成、鳥取の近代的文化運動の中核活動。21年から倉吉高等女学校兼務。1969年没、85歳。洋画家、美教

中井金三 II (なかい・きんぞう/1883~1969年)

鳥取県生れ。1904年白馬会研究所に学ぶ。07年第11回白馬会展に出品。10年東京美術学校西洋画科本科卒、学内に残るよう勧められたが家業倒産のため帰郷。13年から倉吉中学に勤める。指導した前田寛治ほか多くの教え子を美術系の学校へ進学させた。20年砂丘社を結成。21年倉吉高等女学校教諭も兼務する。自宅の庭で栽培したバラを題材に多くの作品を制作し、「バラの画家」と呼ばれた。69年没、享年86歳。(佐)洋画家、美教

永井信一 (ながい・しんいち/1925~2017年)

神戸市生れ。京城帝国大学予科在学中に敗戦を迎え、引揚後、旧制松本高等学校理科甲類に編入。1948年東北帝国大学文学部東洋芸術史学科卒、東北帝国大学助手、49年女子美術大学芸術学部講師、助教授、教授を歴任。89~91年女子美術大学付属高等学校・中学校長。91年沖縄県立芸術大学教授に就任し、1999年に沖縄県立芸術大学を退職。2017年没、91歳。美術史家、美術評論家

永井東三郎 (ながい・とうざぶろう/1914年~)

京都府生れ。1935年帝国美術大学に学ぶ。前衛美術グループ「表現」に第5回、第8回に出品。37年独立美術展に出品。39年美術文化協会の結成に参加。会員として機関誌「美術文化」の編集。戦時統制で廃刊。京都に戻り家業を継ぐ。洋画家、版画

永井 宏 (ながい・ひろし/1911~1971年)

神戸生れ。1937年帝国美術学校本科西洋画科卒。独立美術協会会友。JAN創立に参加、30年退会。無所属。丸善画廊で個展開催。1971年没、60歳。洋画家

中井平三郎 (なかい・へいざぶろう/1897~1943年)

和歌山県生れ。1918年関西美術院でデッサンを学ぶ。20年上京、川端画学校などに通う。この頃リー

ドの「エッチング」で銅版画を知る。24年京都に帰り、太田喜二郎に師事。36年文展鑑査展入選。京都エッチング協会を組織してエッチング普及に尽力。40年日本エッチング作家協会設立、評議員。43年没、46歳。版画家

永井桃子 (ながい・ももこ/1976年~)

東京生れ。1998年女子美術大学洋画専攻卒(優秀賞)、同大学院修了(00年)。89年初めて銅版画を制作。92年東北電力「夢見る子供童話賞」絵本部門大賞、受賞作品『ウサギの畑』は講談社より出版。2000年スカイドアアートプレイス青山で油彩による初個展。01年トーキョーワンダーウォール賞。01、04、05、06年ときの忘れもので個展。06年損保ジャパン美術財団選抜奨励展出品。アートフェア《Art Singapore2008》に出品。版画家、絵本

長永治良(不屈) (ながえ・じろう・ふくつ/1893~1961年)

京都生れ。西田画塾や高田鶴州の住込み書生、帯地図案を学んだ。西陣の高級帯地の図案制作を業とした。版画の発表は、1930年京都工芸美術展特賞。31、32年京都工芸美術展に入選、特選。34年入選、選匠賞。菊池契月の主宰する菊池塾にも学んだ。32年国際オリンピック大会芸術競技(ロサンゼルス)出品し、褒状。全市学童創作版画展の審査員を麻田辨次・浅野竹二と務めた。33年京都創作版画会展に出品。35年日本版画協会展に出品。1961年没、67歳。図案家、版画家

長岡国人 (ながおか・くにと/1940年~)

長野県生れ。多摩美術大学デザイン科で学ぶ。1966年西ベルリン移住、67~73年ベルリン国立アカデミーでデザイン、版画を学ぶ。ベルリン美術大学で絵画と銅版画を学び、国立プロイセン文化財美術館の銅版画教室でゴヤの研究、76年マイスター資格取得。77年ウィーン版画ビエンナーレ展グランプリ、78年クラコウ国際版画ビエンナーレメダル賞。1982年以降はノルウェー、クラコウ等国际展審査員。86、87年「ノーベル賞受賞者たちへのオマージュ」を期に銅版画から和紙と墨による東洋的な表現をする。版画家

長岡忠三郎 (ながおか・ちゅうざぶろう/1900~1983年)

東京生れ。岸田劉生、木村荘八に師事。太平洋画家会研究所に学ぶ。太平洋美術会参与。1983年没、83歳。洋画家

中岡吉典 (なかおか・よしすけ/1927~2015年)

愛媛県生れ。47年家業の指物師から中岡製材所を

起こす。59年、版画家の永瀬義郎、画家の山口長男と知り合う。64年、山口長男と南画廊の志水楠男の指南を受け、東邦画廊を開廊。日本橋通2丁目、画廊主自らが言う「日本一小さな画廊」を開設、座るお客にはまずお茶、しばらくすると珈琲がでて、中岡は客とひとしきり話しをするのが常だった。自分が扱うのは「売るもの」であり、「銀座の画廊とはちがい場所代を乗せない」と言っていた。初期には三岸黄太郎の個展を4回開催し、68年5月、難波田龍起の個展を開催、この出会いで画廊の方向性が見え、難波田も定期的に東邦画廊で個展を開催。扱い作家に建畠覚造、杵田たけを、深尾庄介、吉野辰海、小山田二郎、大沢昌助、山口長男、平賀敬、谷川晃一、豊島弘尚、馬場彬、橋本正司、建畠朔弥らがいる。展覧会の会期は一回が20日間程度、二つ折りのパンフを出し、良く寄稿したのは針生一郎である。針生が推薦したノルウェーの画家ラインハルト・サビエの個展を1994年から定期的に開催、外国作家を扱わない中岡にしては異例だった。93年中央区京橋2丁目5番地で営業、99年からは京橋3丁目9番地に移転した。東京で没、87歳。美術商、東邦画廊主

長尾建吉 (ながお・けんきち/1860～1938年)

静岡県生まれ。東京日本橋斎藤商会店員。1878年巴里万国博覧会へ松方総裁に随行員。79年静岡県嘱託、濠洲シドニー博覧会へ出張。80年渡米、渡英、渡仏、洋風家具学ぶ。89年山本芳翠と洋風家具及額縁の研究、92年洋画専門の額縁製造業を始めた。京都、大阪博覧会の洋画陳列を依託され、1903年東京音楽学校の歌劇「オルフオイス」の背景を山本芳翠を援けて製作。05年磯谷商店となし、美術雑誌「L・S」創刊。08年以降文展の陳列。14年大正博覧会出品、金賞。24年東京日日新聞社より美術界功労者、金賞。04年有栖川宮家に於ける室内装飾金箔工事、赤坂御所、聖徳記念絵画館等の額縁工事を承った。静岡県で没、79歳。額縁製造業の創始者。(引用 東文研額装)

長永治良 不屈 (ながえ・じろう・ふくつ/1893～1961年)

京都市生まれ。京都市立西陣尋常小学校卒。西田画塾や高田鶴州の住込み書生、帯地図案を学んだ。西陣の高級帯地の図案制作を業とした。1930年京都工芸美術展特賞、31年、32年入選、特賞、34年入選選匠賞。31年全国版画展覧会出品。32年国際オリンピック大会芸術競技(ロサンゼルス)出品、褒状。32、33年関西創作版画展に出品。全市学童創作版画展の審査員。33年京都創作版画会展出品。1961年没、68歳。61年「長永治良版画展」姫路商工会議所

清交クラブで開催。版画家

中尾 彬 (なかお・あきら/1942年～)

千葉県生まれ。1958年千葉県立木更津第一高等学校へ入学。60年油彩画の「石の花」が千葉県美術展に入選。61年武蔵野美術大学油絵学科へ入学。62年日活ニューフェイス合格後、映画デビュー。絵の道を捨てきれず63年大学を中退、仏留学。64年帰国、演劇の道を再び目指す。78年再び絵を始め、同年に個展(2回)を開催した。創作活動はその後も継続して行われ、フランスのル・サロン展にて大賞(「BUNRAKU・狂乱」、1981年)、国際賞(「COUNTRY・故郷」、1982年)を受賞。定期的に個展を開催。洋画家、俳優

長尾雨山 (ながお・うざん/1864～1942年)

高松市生まれ。20歳で上京し、1888年東京文科大学古典科卒。漢書を学ぶ。学習院、東京美術学校、第五高等学校の教授を歴任。東京高等師範学校教授。文部省図書編纂官をつとめ、東京帝国大学の講師。1902年上海に渡り、商務印書館編訳部員となり、その後、12年間にわたり中国各地を歴遊、41年帰国、京都に住み、著述のかたわら門弟を教えた。人に求められると書画の筆をとり、書画論を講じた。1942年没、79歳。書画

長尾 己 (ながお・き/1893～1985年)

豊橋市生まれ。白馬会洋画研究所に入所、豊田清輝校長より薫陶を受ける。同期に山下麻耶、後輩に小磯良平がいた。文展に入選。明治学院歴代学長肖像画や国会内の30年勤続議員肖像画など、ポートレート画家の泰斗として知られる。1985年没、92歳。洋画家、肖像

中尾 彰 (なかお・しょう/1904～1994年)

1904年生れ。1920年満州に渡り、満鉄育成学校を卒業。25年島根県小学校、女学校教諭。31年独立美術展出品。以後、独立展出品、37年独立賞、会員。35年文芸誌「日曆」同人として詩文を発表。詩集、詩画集も刊行。46年日本童画会を創立して新人育成に尽力。55年小学館絵画賞。63年いわさきちひろ、赤羽末吉、遠藤てるよ、柿本幸造、渡辺三郎、丸木俊らと「ぐるうぷ聖(かべ)」を結成。65～76年度々ヨーロッパに滞在。オーストリア、チロルの山村に取材制作。72年里見勝蔵の呼びかけにより写実画壇の創立に参加。79年済生会熊本病院の壁画制作。82年日本児童文芸家協会より児童文化功労者。92年独立美術

協会会員努力賞。熊本県で没、90歳。壁画、挿絵、
童画、美教

長野新一 (ながお・しんいち/1894～1933年)

大分県生れ。1920年東京美術学校図画師範科卒業後、山口県師範学校、東京第五中学校で教える。199年第帝展入選。24～30年連続帝展入選。以後、帝展のほか中央美術展、春台美術展に出品。29年東京美術学校助教授。32年辞職。1933年没、39歳。
洋画家、美教

中尾 進 (なかお・すすむ/1916～1971年)

宇都宮市生れ。川端画学校、本郷洋画研究所に学ぶ。1940年荻原高德に師事。41年新制作展に入選。46年新作家賞。56年新制作協会会員。64年渡米。55年新聞雑誌、小説の挿絵。東京で没、55歳。
洋画家、挿絵

長尾太太郎 (ながお・もくたろう/1868～1919年)

岡山県生れ。1887年不同舎に学ぶ。88年郁文館の図画教師。89～1908年私立商工中学校で図画教師。00年明治美術会準通常会員。02年太平洋画会創立会員。14年文展に出品。19年没、51歳。
洋画家、美教

中尾義隆 (なかお・よしたか/1911～1994年)

愛媛県生れ。1936年全関西洋画展に油彩画入選。42年国画会展油彩画入選。43年セメント版画を考案。46年『一木集Ⅱ』セメント版。48年日本版画協会出品入選。会員。49年国画会展に油彩画、セメント版画出品、版画作品で国画奨学賞、56年国画会展三十周年記念賞、60年国画会展出品、会員。68年日本ガラス絵協会出品。東京で没、83歳。96年「人間へのまなざし—中尾義隆展」(愛媛県立美術館)開催。
洋画家、版画、ガラス絵

中川伊作 (なかがわ・いさく/1899～2000年)

京都市生れ。1921年京都市立絵画専門学校卒。28年日本創作版画協会初の会員。30～32年文部省主催日本版画巡回展(ルーヴル、マドリッド、ジュネーブ、ロンドン、ニューヨーク等美術館展示。64年サンフランシスコ・ルドルフセーファー美術学校の客員教授となり州立大学他、教育機関において東洋画の講義。その間海外展10数回、サンフランシスコ市長より金鍵授章。72年沖縄にて南蛮焼を作陶する。2000年没、101歳。
版画家、陶芸

中川一政 (なかがわ・かずまさ/1893～1991年)

東京生れ。1914年巽画会展に出品入選、独学で画風を確立。岸田劉生の草土社展に出品。21年二科展で二科賞。22年春陽会発足に客員参加、24年春陽会会員。31年水墨画の個展。75年文化勲章、文化功労者。油絵の他、日本画、書、陶芸も制作。随筆など著作多い。86年松任市立中川一政美術館。89年真鶴町立中川一政美術館が開館。湯河原市で没、98歳。
洋画家、日本画、書、陶芸

中川紀元 (なかがわ・きげん/1892～1972年)

長野県生れ。1912年東京美術学校彫刻科に入学するが病で中退。13～14年本郷洋画研究所、太平洋画会研究所に学ぶ。15年二科展に入選。19年渡仏、マティスの指導を受け、フォーヴィスムに触れる。20年二科展で樗牛賞、21年二科賞受賞、23年二科会会員。22年前衛的なメンバーでアクションを結成。22年～文化学院美術家で実技指導。47年二紀会を結成。64年日本芸術院恩賜賞。東京で没、79歳。
洋画家、版画

中川紀元 II (なかがわ・きげん/1892～1972年)

長野県生れ。1912年東京美術学校彫刻科に入学、その後退学し洋画に転じ、石井柏亭、正宗得三郎の指導を受ける。15年第2回二科展に初入選。19年渡仏し、マティスの指導を受ける。21年帰国。20年第7回二科展で樗牛賞。21年第8回二科展で二科賞を受け、会友となる。23年二科会員。戦後、二紀会の創立に参加、委員となる。64年日本芸術院恩賜賞。72年2月9日没、享年79歳。(佐)洋画家、版画

中川 清 (なかがわ・きよし/1897～1977年)

滋賀県生れ。1923年東京美術学校彫刻科卒、同研究科、別科を修業。24年帝展に入選、以後毎年官展に出品を続け、27年帝展で特選、37年文展無鑑査。52年日展審査員、以後6回審査員。63年日展)出品作で日本芸術院賞。58年日展評議員、69年日展理事、73年日展参与。東京教育大学講師などを歴任した。日本彫塑会委員長。東京で没、79歳。
彫刻家、美教

中川司気大 (なかがわ・しきた/1933～1994年)

新潟県生れ。1956年京都市美術大学彫刻科中退。二科展出品。他公募展出品。個展。新人賞受賞など。59年広創社設立、代表取締役。モニュメント製作、個展(油彩)発表のかたわらヨーロッパに外遊。72年サロン・デ・ボザール設立、文化庁後援アマチュア対象の「サロン・デ・ボザール展」主宰、21回開催。「国際美術交流展」主宰。海外展助出品。80年日本橋三越個展。81美術愛好会サロン・デ・ボザール副会長、(初代理事長)に就任。
洋画家、「サロン・デ・ボザール展」主宰

中川志朗 (なかがわ・しろう/1927～1995年)

長野県生れ。東京教育大学卒。示現会会員。主体美術協会会員。1995年没、67歳。
洋画家

中川 堅一 (なかがわ・たていち/1865～1914年)

岡山市生れ。中学校在学中から松原三五郎、原撫松と共に、師範学校教員の平野雄也の指導を受ける。京都府画学校西宗学科(西洋学科)で田村宗立に教えを受け、同校中退後 84年上京、川村清雄の塾で学び、イタリアから帰国した松岡寿に師事。東京師範学校、陸軍砲工学校で教鞭をとる。1905年岡山中学の図画教師を務める。1914年没、49歳。美教、洋画家

中川タマオ (なかがわ・たまお/1930～1992年)

東京生れ。中川紀元の五男。東京文化学院で洋画を学ぶ。モダンアート協会会員。包装紙や布、奔放な線、それに鮮やかな色彩によって画面が構成されている。無垢な空想にもとづいた抽象的な表現による、ジャズが聞こえてきそうな作品。1992年没、62歳。洋画家

中川 為延 (なかがわ・ためのぶ/1904～1967年)

広島市生れ。1930年東京美術学校彫刻選科造形部卒、33年同校研究科を修了。29年帝展入選。帝展、文展、日展に出品。官展系有数の中堅作家。52年二紀会彫刻部創設に当り委員、以後毎年同会展に作品発表、彫刻部の基礎づくりと発展に尽力し、理事。セメント彫刻を手掛け、野外彫刻展(白色セメント造形美術会)の委員として普及に寄与。1967年没、63歳。彫刻家

中川 登亀百 (なかがわ・ともき/1917～1978年)

甲府市生れ。新世紀美術協会会員。1978年没、61歳。洋画家

中川 八郎 (なかがわ・はちろう/1877～1922年)

愛媛県生れ。1886年天彩学舎で松原三五郎に師事。96年小山正太郎の不同舎に学ぶ。99年吉田博と渡米、1900年ボストン美術館で二人展。01年ヨーロッパ経由、帰国。01年太平洋画会を創立。02～06年渡米欧。07年東京勸業博覧会で三等賞。08年文展で二等賞。文展、帝展で審査委員。神戸市で没、44歳。洋画家、水彩画、版画

中川 安一 (なかがわ・やすいち/1910～1994年)

兵庫県生れ。姫路師範学校卒。新構造社会員。兵庫県女子短期大学講師。1994年没、84歳。洋画家

中川 雄太郎 (なかがわ・ゆうたろう/1910～1975年)

静岡市生れ。1929年県立庵原中学校卒。31年童土社同人。33年国画会展、日本版画協会展に出品。38年日本版画協会会員。43年静岡県立清水女子商業学校、静岡城内高等女学校図画教員。68年静岡県文化奨励賞。国画会版画部会員。75年没、65歳。美教、版画家

中川 力 (なかがわ・りき/1918～1994年)

台湾高雄市生れ。有島生馬に師事。1937～44年中之島洋画研究所で学ぶ。46年一水会会員。49年一水会賞、同年日展特選。54～55年渡仏、アカデミー・ジュリアンで学ぶ、サロン・ド・ラールールで二等賞。89年求龍堂より「中川力画集」が刊行。94年没、76歳。洋画家

中川るな (なかがわ・るな/生誕年不詳～)

1981年女子美術大学卒。93年多摩美術大学大学院修了。92年東京・ギャラリー山口個展「Lunatic Lucid」開催。93年東京・G アートギャラリー個展「Lunatic Lucid 2」、95年東京・コバヤシ画廊個展「リカちゃんのアイコン 2」開催。96年東京・ときの忘れもの「モルフェ'96」参加。東京・ルナミ画廊個展開催。インスタ、洋画家

長倉 翠子 (ながくら・すいこ/1937～2016年)

福岡県生れ。66年益子町に築窯。72年日展入選、日展、光風会展で活躍。日本橋高島屋で個展。栃木県文化奨励賞。久保貞次郎、安達瞳子等と交友。1990年陶長倉翠子・久保貞次郎編が毎日新聞社発行。2018年益子陶芸美術館で個展開催。陶芸家

長坂 春雄 (ながさか・はるお/1900～1973年)

1920年東京美術学校卒。19年日本水彩画会会員。29～30年、33～34渡仏。31年「日本版画協会」の結成には、「洋風版画会」のメンバーとともに会員として参加。39年文展無鑑査。38年上海派遣軍司令部附出征画家、戦争関連画制作。版画制作。46年行動美術協会会友。光風会会員。1973年没、76歳。水彩画家、洋画家、版画家

長坂 春雄 II (ながさか・はるお/1900～1973年)

東京生れ。1920年東京美術学校製版科選科卒。17、18光風会展に水彩画で入選。油彩画も入選。19年日本水彩画会展で会員。石版画を能くし、日本創作版画協会展に出品。27～28年渡仏、主に油彩画を学び、29年の仏蘭西日本美術家協会パリ展に出品。30年帝展に油彩画で入選。31年「日本版画協会」の結成に会員として参加。35年二科展に油彩画が入選。56年日展出品委嘱。57年光風会展会員。60年版画集団「日版会」の創立に参加。東京で没、73歳。水彩画家、洋画家、版画家

中里 斉 (なかざと・ひとし/1936～2010年)

東京生れ。1960年多摩美術大学美術学部絵画科卒。62年渡米、ウィスコンシン大学大学院、64～66年ペンシルベニア大学美術大学院で学ぶ。66年ロックフェラーⅢ世基金奨学金を受け、NYに移住。68

年渡欧、中近東を旅行。70年ジャパン・アート・フェスティバルで優秀賞(文部大臣賞)。同年シェル美術展で佳作賞。71年ペンシルベニア大学美術大学院で版画の専任講師。82年ペンシルベニア大学美術学部長。83年栃木県立美術館で中里斉展。87年原美術館で中里斉20年の歩み展。NYで没、74歳。洋画家、版画家

中澤竹太郎 (なかざわ・たけたろう/1908~1983年)

1908年生れ。高知県で没、76歳。2008年四万十町美術館・図書館で中澤竹太郎展。洋画家

長沢久敏 (ながさわ・ひさとし/1915~1985年)

長野県生れ。1938年帝国美術学校師範科卒。無所属。1985年生れ、70歳。洋画家

長沢秀之 (ながさわ・ひでゆき/1947年~)

埼玉県生れ。川越高等学校卒、1963年多摩美術大学造形学部デザイン学科卒。79年本格的な作品制作、発表。80年代以降、現代美術の最先端で活躍。武蔵野美術大学油絵学科教授。デザイン

中沢弘光 (なかざわ・ひろみつ/1874~1964年)

東京生れ。1887年曾山幸彦、堀江正章に師事。東京美術学校西洋画科卒。白馬会創立に参加、会員。1907年東京勸業博覧会で一等賞。文展二、三等賞。12年光風会創立会員。22年渡欧。24年白日会創立会員。37年帝国芸術院会員。57年文化功労者。東京で没、90歳。(出典 わ眼)洋画家、版画家

中澤優子 (なかざわ・ゆうこ/1938年~)

長野県生れ。1987年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒、89年同大学大学院修了。89年昭和会展昭和会賞。92年「昭和会賞受賞記念展」日動画廊(東京銀座)。92年大学院博士後期課程満期退学、渡伊。93年ブレラ国立美術学院 Accademia statale di belle arti di Milano (Accademia Brera)絵画科に入学。96年メキシコ渡航、プエブラ市 アメリカ総合大学 Universidad de las Americas (Puebla, Mexico) にて、ブレラ美術学院版画科教授 M. Benedetti による版画特別講座に参加。2000年 Accademia Brera 修了。春陽会正会員。2007年諏訪市美術館で個展開催。洋画家

長沢芦雪 (ながさわ・ろせつ/1754~1799年)

兵庫県生れ。長沢蘆雪、長澤蘆雪。円山応挙の弟子で、師とは対照的に、大胆な構図、斬新なクローズアップを用い、奇抜で機知に富んだ画風を展開した

「奇想の絵師」の一人。1786~87年南紀に滞在した折に多くの障壁画を残している。串本の無量寺、古座の成就寺、富田の草堂寺に計180面の障壁画が残る。1799年没、45歳。江戸時代の絵師

中嶋 明 (なかじま・あきら/1955年~)

静岡県生れ。1977年武蔵野美大卒。卒業制作優秀賞。78年同大学研究科修了。修了制作優秀賞(大学買上げ)。79-81年東アフリカ、近東、ヨーロッパ各国游学。82年独立展出品(以後毎年)。昭和会展、セントラル油絵大賞展、安井賞展、ほか個展、グループ展。独立展にて新人賞、奨励賞、野口賞ほか受賞。97年独立賞、記念特別賞。98年独立美術協会会員。83年東急セミナーBE講師。洋画家

中嶋覚雄 (なかじま・かくお/1921~1985年)

長野県生れ。海軍通信学校卒。アカデミー・グランド・シヨミエールに学ぶ。1956年日展入選。66年光風会会員。66年長野県展で運営委員幹事長、71年渡欧、アカデミー・グランド・シヨミエールに学ぶ。74年から7年間審査員。1985年没、64歳。洋画家

中嶋勝彦 (なかじま・かつひこ/1941年~)

佐賀県出身、1964年佐賀大学農学部卒、化学肥料会社勤務、関連会社常務取締役等歴任、2002年退職在職中(1978年頃)からバードウォッチング、スケッチを始め、退職後、植物画・昆虫画、海外スケッチに取り組み。2004年より、新構造展入選・優秀賞、サムホール公募展優秀賞など受賞歴多数。版画家

中嶋亀孝 (なかじま・きこう/1907~1980年)

長野県生れ。1927年長野師範学校本科第一部卒。県内の小学校に教員として勤務。29年の伊那の彫塑講習会(講師:石井鶴三)に出席し、彫塑作品の制作。石井鶴三を終生の師として彫塑制作を生涯続ける。50~63年小学校の校長。退職後は豊科町の自宅にアトリエを建て制作。1980年没、73歳。彫刻家、美術教

中嶋 潔 (なかじま・きよし/1943年~)

満州生れ。1961年佐賀県立唐津西高等学校卒。絵は独学。71年訪パリ。82年みんなのうたの『かんかんからす』イメージ画。87年『木霊みょうと』でポーロニャ国際児童図書展グラフィック賞。90年中国文化庁の招、北京で個展。2001年パリ、三越エトワール美術館「風の画家中嶋潔の世界・童画でつづる三十年史」展。10年清水寺成就院に、「かぐや姫」「風の故郷」「大漁」46面の襖絵を奉納。15年京都六道珍皇

寺に「地獄心音図」の連作5枚奉納。同寺「中島潔地獄心音図完成特別公開 -親から子へ、いま伝えたいこと-」を開催。 **絵本、挿絵、童画**

中島清之 (なかじま・きよし/1899~1989年)

京都生れ。1916年松本楓湖の安雅堂画塾に入門し、28年院展に再入選し、日本美術院院友。以後院展に出品し、25年山村耕花、43年より安田靫彦に師事。37、39、42年日本美術院賞。50年院展で再び日本美術院賞。52年同人。41年より東京高等工芸学校で教え、52年には東京芸術大学講師。62年渡欧し、インド、中近東、エジプト、モロッコなどを巡遊。63年日本美術院評議員。68年院展で文部大臣賞。78年日本美術院の理事。69年横浜市民ギャラリーで回顧記念展を開催。70年横浜市文化賞、76年神奈川県文化賞。東京で没、90歳。 **日本画家**

中島 園 (なかじま・その/1863~1929年)

1863年生れ。1877年工部美術学校入学。81年頃中退。写真家中島持乳と結婚(旧姓は秋保)。1929年没、66歳。 **洋画家**

中島千波 (なかじま・ちなみ/1945年~)

長野県生れ。1965年東京芸術大学美術学部日本画科に入学、71年東京芸術大学大学院修了。70年神奈川県美術展(神奈川県立近代美術館)でK氏賞。77年春の院展、第62回院展で奨励賞。79年山種美術館賞展(山種美術館)で優秀賞。92年おぶせミュージアム・中島千波館(長野県小布施町)開館。94年東京芸術大学美術学部助教授。95年パリ三越エトワールにて『中島千波の世界』パリ展開催(朝日新聞社主催)。 **日本画家**

中島哲郎 (なかじま・てつろう/1918~1973年)

1918年生れ。1941年新文展に入選。戦後間もない頃、河北展、東北美術展が前身の新東北美術展が主として在仙画家の中に中島哲郎はいた。日府展洋画部理事。1973年没、55歳。 **洋画家**

中島敏男 (なかじま・としお/1912~1987年)

愛知県生れ。岡崎師範学校卒。二紀会同人。日本水彩画協会会員。豊川市で没、75歳。 **洋画家**

中島正貴 (なかじま・まさき/1895~1937年)

1895年生れ。草土社のメンバー。1937年没、42歳。 **洋画家**

中島保彦 (なかじま・やすひこ/1921~1984年)

東京生れ。1949年自由美術協会会員に推挙、日本美術会会員。57年日本美術会の事務局長(委員長は、碓伊之助)。挿画、表紙画を描いた児童文学作品が多数。64年自由美術家協会を退会し、主体美術協会の結成に参加。65準備責任者となった第1回展「主体展」を東京都美術館で開催。72年日本美術会附属研究所「民美」所長。東京で没、62歳。 **洋画家、挿絵**

中島由夫 (なかじま・よしお/1940年~)

埼玉県生れ。明治学院大学、武蔵野美術大学で学ぶ。1964年オランダでコブラ派と出会う。ロッテルダム美術大学、アントワープ王立アカデミーに学び、72年Valand美術大学(スウェーデン)卒。73~77年UBBEBODAセンター現代美術研究所を設立して芸術運動を展開。77~84年SKANSKAKONSTAKADEMIEN校長。90年埼玉県立近代美術館個展。04~08年北欧で個展多数。11年RAUS中島由夫現代美術館開館(スウェーデン・ヘルシングボリ)。 **洋画家**

中島佳子 (なかじま・よしこ/1936年~)

名古屋市生れ。1959年愛知芸大卒。58~61年自由美術展に出品。74年~主体展に出品、佳作作家。80年主体美術協会会員。83年安井賞展(賞候補)。84~86年国際形象展。86、88年日本絵画代表展(カナダ、スコットランド)。87年風景の会同人。95、2003年現代美術選抜展(文化庁)。 **洋画家**

中路融人 (なかじ・ゆうじん/1933~2017年)

京都生れ。1954年山口華楊に師事、56年日展入選。62年日展特選。75年特選。95年日展文部大臣賞。97年日本芸術院賞。2001年日本芸術院会員。多年にわたり湖北風景を中心に、風景画を制作。日展常務理事、日本芸術院会員、農鳥社会長。京都で没、83歳。 **日本画家**

長末友喜 (ながすえ・ともき/1916~1949年)

福岡県生れ。1934~36年花尾職業学校冶金科卒。翌年召集され中国山西省に赴いた。38年帰国し、翌年再び八幡製鉄所に入社。40年美術文化協会展入選、46年会員。一方、地元でも製鉄所洋画部、北九州美術家連盟などで活躍。46年八幡市美術協会設立委員参加。48年村田東作らと美術団体橄欖社創立。1949年没、33歳。 **洋画家**

中筋幹彦 (なかすじ・みきひこ/1925~1956年)

大阪生れ。1944年松江高校を経て、東京大学入学、46年中退し、画生活に入る。52年新樹会展出品。毎年、個展開催。55年森芳雄の影響を受ける。55年自由美術家協会会員。東京で没、30歳。 **洋画家**

永瀬美緒 (ながせ・みお/1987年～)

岐阜県生まれ。2009年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒、11年同大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。09年武蔵野美術大学卒業制作展優秀賞 根岸賞、同年西日本青木繁記念大賞展 損保ジャパン特別賞。12年第89回白日会展 白日賞、アルトン賞、準会員。洋画家

永瀬義郎 (ながせ・よしろう/1891～1978年)

茨城県生まれ。1909年上京、白馬会洋画研究所に学ぶ。11年東京美術学校中退、京都市立絵画専門学校に学ぶ。16年長谷川潔らと日本版画倶楽部を創立。18年日本創作版画協会の結成、会員。22年「版画を作る人へ」刊行。29年春陽会展で春陽会賞。31年日本版画協会創立会員。光風会会員。日展委嘱。77年茨城県立美術博物館で回顧展。装丁、挿絵も描いた。東京で没、87歳。版画家、洋画家、挿絵

仲宗根真補 (なかそね・しんぼ/1843～1919年頃)

首里市生まれ。唐名は查不烈。童名は真三良、雅号は嶂山。仲宗根真栄の二男。1865年に絵師に登用され、筑登之座敷に叙せられた。作品に「七駿馬之図」のほか「琴碁遊山之図」「首里旧城之図」「山水図」「月下神猫図」「牡丹之図」などがある。1919年頃没、76歳位。日本画家

永田一脩 (ながた・いしゅう/1903～1988年)

門司市生まれ。1927年東京美術学校西洋画科卒。26年結成の前衛芸術家連盟(前芸)参加。未来派美術協会展に出品。27年、結成された前衛芸術家同盟に参加。28年全日本無産者芸術連盟(ナップ)の結成に参加。プロレタリア美術大展覽会に出品。30年一斉検挙。41年東京日日新聞社に入社。戦後は日本美術会会員となり日本アンデパンダンなどに出品。48年に初めて個展を開催。58年新聞社を停年退職。73年個展開催。横浜市で没、84歳。洋画家

中藁瑞真 (なかだ い・ずいしん/1912～2002年)

千葉県生まれ。指物師竹内不山に師事し、箱物や茶の湯の道具類の指物を修業。1933年独立自営。茶道を田中仙樵に学び、棚物や箱物等の茶道具の制作をよく修業した。62年日本伝統工芸展初入選、翌年奨励賞。65年鑑査委員や審査委員、そして理事・木竹部会長。伝統木工の発展に寄与。84年重要無形文化財「木工芸」保持者の認定。桐材の制作を主とする木工芸に特異な活躍を示した。東京で没、89歳。工芸家、人間国宝(重要無形文化財保持者)で社団法人日本工芸会参与

中田一男 (なかた・かずお/1907～1938年)

大阪生まれ。1930年抒情社を興し月刊誌「エクスプリス」創刊。31年創作版画グループ「羊土社」に参加。38年没、31歳。版画家

中田幾久治 (なかた・きくじ/1901～1982年)

東京生まれ。川端画学校洋画科と本郷洋画研究所に学び、1926年川端画学校卒。凸版印刷株式会社入社。紙幣、証券の銅原版作成に従事。エッチングを手がける。32年日本版画協会入選、以後第3・5・7・8・10・11・13 回展出品。32年春台美術展覧会出品。43年日本版画協会会員。34年帝展入選、36年文展鑑査展、41年新文展入選。戦後、光風会会員。40年日本エッチング作家協会会員。71年『エッチング画集＝中田幾久治』を出版。1982年没、81歳。版画家

仲田菊代[好江] (なかた・きくよ[よしえ]/1902～1995年)

大阪生まれ。小出檜重、安井曾太郎に師事。46年一水会会員。47年女流画家協会創立会員。戦後、独特で幻想的な画風を確立する。63年新樹会会員。84年池田20世紀美術館で個展。東京・三鷹市で没、93歳。(出典 わ眼)洋画家

永田錦心 (ながた・きんしん/1885～1927年)

東京生まれ。1901年頃挿絵画家・田口米作に師事。03年白馬会研究所や寺崎広業画塾に一時在籍するも、ほぼ独学で絵画を学ぶ。琵琶に興味を持ち、15年に「錦心流」を創設。日本画家としても活動し続け、内国勸業博覧会や東京勸業博覧会入選。14年回文展、17年文展入選。1927年没、42歳。日本画家、版画

長田国夫 (ながた・くにお/1911～1994年)

広島県生まれ。1929年呉海軍工廠工員養成所高等科卒。32年呉市内の水彩画団体「互歩会」結成参加。34～36年二科技塾で学ぶ。45年呉精華高等女学校の助教諭。54年足立区潤徳学園美術科教諭。83年「精気会」結成、会長。1994年没、84歳。洋画家、美教

中谷宏運 (なかた・こうん?/1890～1945年)

富山県生まれ。1913年東京美術学校彫塑科卒。東京府立実科工業学校教諭、23年同校を退職、25年帝展入選し、第5回には「影」、8回には「ほとり」、9回には「姿」、11回には「竝立」、13回には「髪」、14回には「櫛けづる」出品。文展無鑑査。成城学園の沢柳政太郎像、杵屋勝之助像、国分勘兵衛像、楽翁公像。1945年没、56歳。彫刻家

仲田定之助 (なかた・さだのすけ/1888～1970年)

東京生まれ。錦城中学中退。1922～24年独に留学、新興美術に興味、バウハウス紹介。25年「画廊九段」で創立者、中原実と協力、クレー、カンデンスキーの絵画を展示、紹介。美術評論の他、彫塑作品を出品。洋画家三島(仲田)菊代と結婚。美術評論家。三科の一員。70年エッセイスト・クラブ賞。東京で没、82歳。彫刻家、美術評論家

永田春水 (ながた・しゅんすい/1889～1970年)

茨城県生まれ。荒木寛畝・寺崎広業・結城素明に学ぶ。1913年東京美術学校日本画科卒。国華社に入社、『国華』編集の傍ら古画の研究に従事し、20年敦煌発掘仏画模写のためロンドンに1年間滞在する。文展・帝展招待展・新文展に出品。日本美術会・読画会にも所属した。40年東京女子高等師範学校で日本画の講師。54年「如春会」を主宰。1970年没、81歳。
日本画家、美教、版画

永田精二 (ながた・せいじ/1911～1997年)

東京生まれ。東京美術学校卒。藤島武二、寺内萬治郎らに師事する。光風会評議委員。元日展委嘱。渡欧米数回。画集『永田精二50年の歩み』を出版する。1997年没、86歳。(出典 わ眼) **洋画家**

中田 豊 (なかた・とよ/1912～1995年)

和歌山県生まれ。本郷洋画研究所に学ぶ。二科会会員。一陽会創立会員。のち無所属。1995年没、83歳。**洋画家**

中谷健次 (なかたに・けんじ/1901～1985年)

兵庫県生まれ。1925年東京美術学校西洋画科卒。白日展出品。30年「一九三〇年協会」展出品。聖徳太子奉賛美術展出品。36年文部省図画教科書編集委員。47年示現会創立委員。文展無鑑査展出品。63年武蔵野美術大学教授就任。池袋三越個展。81年中谷健次画集刊行。85年没、84歳。**洋画家、美教**

中谷千代子 (なかたに・ちよこ/1930～1981年)

東京生まれ。1952年東京美術学校卒。梅原龍三郎に学ぶ。62年に出版した絵本「かばくん」は、63年サンケイ児童出版文化賞大賞。65年小学館絵画賞。66年出版した「スガンさんのやぎ」は翌年アメリカでも出版され、シカゴトリビュン・ワシントンポスト紙主催の児童図書フェスティバルで最優秀作品。69年講談社出版文化賞。1981年没、51歳。1984年西宮大谷記念美術館で個展。**絵本作家**

中谷 泰 (なかたに・やすし/1909～1993年)

三重県生まれ。1929年上京、川端画学校、春陽会洋画研究所に学ぶ。30年春陽会展入選。38年春陽会賞。42年春陽会の木村荘八に師事。43年春陽会会員。39、42年新文展で特選。51年日本美術会に入会。58、59年日本国際美術展で優秀賞。71～77年東京芸術大学美術学部教授。88年三重県立美術館で回顧展。東京で没、84歳。**洋画家、美教**

中谷ミュキ (なかたに・みゆき/1900～1977年)

広島市生まれ。共立女子職業学校卒。はじめ吉岡満助に学び、1930年帝展入選。31年上京し、岡田三郎助に師事。38～52年光風会会友。38年鬚光、宇根元警らと広島芸術協会を結成。戦後は女流画家協会の創立に参加、のち委員。二紀会同人。東京で没、77歳。**洋画家**

中谷龍一 (なかたに・りゅういち/1917～2008年)

北海道生まれ。1935年灘中学校卒。宝塚舞台美術研究所に学ぶ。小磯良平、木下孝則に師事。51年一水会賞、52年会員推挙、55年会員優賞のち運営委員。52年日展特選、朝倉賞、66年日展菊華賞。69年日展会員、のち参与。98年横浜文化賞。2008年没、91歳。**洋画家**

中田秀和 (なかた・ひでかず/1909～1982年)

長崎県生まれ。キリスト教伝道士、東京で洋画と書を勉強し、東光会、二科展などを経てカトリック美術協会会員。戦後は長崎市内で教鞭をとる傍らカトリック聖像の制作を精力的に行う。信徒発見のレリーフ、浦上教会のフレスコ画と2mの聖母子像、放虎原殉教記念碑、ローマ教皇来崎記念のヨハネ・パウロ2世胸像を制作。北海道男子トラピスト大修道院75周年の記念レリーフ、広島の世界平和記念聖堂のマリア像、全国各地に数百点の作品を残した。1982年没、73歳。**彫刻家、洋画家**

仲田好江(菊代) (なかた・よしえ(きくよ)/1902～1995年)

大阪生まれ。小出檜重、安井曾太郎に師事。46年一水会会員。47年女流画家協会創立会員。戦後、独特で幻想的な画風を確立する。63年新樹会会員。84年池田20世紀美術館で個展。東京・三鷹市で没、93歳。(出典 わ眼) **洋画家**

永田禎彌 (ながた・よしひろ/1916～2008年)

兵庫県生まれ。田村孝之介に師事。旧制甲陽中学校卒業後、信濃橋洋画研究所入所。1947～71年三木市役所に勤務。定年退職後訪欧、制作、台湾にも取材。兵庫県で没、92歳。**洋画家**

永田 力 (ながた・りき/1924～2014年)

長崎県生まれ。中学校卒業後、上京、同舟舎に学ぶ。1943年渡満。ソビエト収容所生活。48年上京。49年第一美術協会展出品、第一美術賞。51年自由美術展出品。52年同会会員。国際アートクラブ会員。53年風間完らと「エンピツの会」を結成。57年第1回ア

ジア青年美術展でアメリカ・フライシュマン賞を受賞、渡仏。雑誌に挿絵。東京の南天子画廊で8回個展。96年東方藝術思潮会を主宰。洋画家、挿絵

中辻悦子 (なかつじ・えつこ/1937年～)

大阪生れ。阪急百貨店宣伝課に広告デザイナー勤務。1963年東京画廊で個展。78年「エリック・サティ人形にためのミニオペラ」人形制作と舞台美術を担当。人の形をした立体作品の他、絵画、版画、絵本など幅広い分野で活躍。98年現代版画コンクール展で大賞。99プラティスラヴァ世界絵本原画展、絵本でグランプリ。2000年西宮市大谷記念美術館で個展。00年赤艸社賞。07年伊丹市立美術館で「元永定正+中辻悦子絵本原画展」。洋画家、絵本、版画、立体

永津照見 (ながつ・しょうけん/1978年～)

兵庫県出身。金沢美術工芸大学大学院修了。ロータリー財団国際親善奨学生としてフランス、トゥールへ留学。ベルギー政府給費奨学生としてラカンブル国立視覚芸術高等美術学校留学。06年同大学大学院博士後期課程退学。第1回創造都市はままつ絵画公募展優秀賞。13年神戸わたくし美術館、19年明石市立文化博物館等で個展。洋画家

中津瀬忠彦 (なかつせ・ただひこ/1916～1973年)

大津市生れ。1936年岡山師範学校本科(美術、音楽)卒。中山巍、須田国太郎に師事。38年独立展入選。48年独立賞。50年独立美術協会会員。58～60年留学生渡仏、59年サロン・ドートンヌ入選。63年、67年安井賞候補展に選抜出品。67年再渡欧。73年没、57歳。洋画家

中出三也 (なかで・さんや/1897～1971年)

東京生れ。京華商業学校卒。本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。1917年院展に入選。18年院友。19、20年院展に出品。28年帝展に入選。この頃二科の甲斐仁代と野方に同居。昭和女子高等学校の美術教師。29～31、33年帝展に入選。42、43年新文展に入選。方南画塾、大蔵省絵画部、日本医科大学絵画部で指導にあたる。旺玄会会員。昭和女子高等学校の美術教師。46年三重県松坂市に転居。71年没、74歳。洋画家、美教

永地秀太 (ながとち・ひでた/1873～1942年)

山口県生れ。松岡寿に師事。明治美術会教場で学ぶ。1902年太平洋画会創立会員。09年文展で褒状。13年文展で三等賞。20年文部省在外研究員として海外視察。帰国後、東京高等工芸学校教授。東京

で没、69歳。(出典 わ眼)洋画家、美教、版画

中西 繁 (なかにし・しげる/1946年～)

東京生れ。1969年東京理科大学工学部建築学科卒。建築家。82年日展に入選、98年日展会友、2001、05年日展で特選、07年日展委嘱、07年東光会理事。90年現代洋画精鋭選抜展で金賞。04～06年渡仏、フランス国立美術学校(エコール・デ・ボザール)で学んだ。08年文翔館(旧山形県庁舎)「棄てられた街 in 山形」。10年沖縄県浦添市美術館「棄てられた街 in 沖縄」開催。洋画家

中西静男 (なかにし・しずお/1909～1981年)

長野県生れ。倉田白羊の弟子。1932年春陽会展入選。戦後は県展に出品。地域美術振興に尽力。1981年没、71歳。洋画家

中西利雄 (なかにし・としお/1900～1948年)

東京生れ。光風会賞。東京美術学校西洋画科卒。日本水彩展、光風会展、帝展などに出品。1928～31年渡仏。サロン・ドートンヌに入選。帝展で特選。新制作派協会を小磯良平らと結成。日本水彩画会展に出品。48年没、47歳。(出典 わ眼)水彩画家

中西夏之 (なかにし・なつゆき/1935～2016年)

東京生れ。1958年東京藝術大学油画科卒。村松画廊で個展。59年シェル展で佳作賞。61年東京国立近代美術館で「現代美術の実験」に出品。63年「ハイドレッド・センター」を組織、参加、ハプニングを行う。89年西武美術館で回顧展。97年東京都現代美術館で回顧展。2016年没、81歳。洋画家

中西 勝 (なかにし・まさる/1924～2015年)

大阪生れ。1947年武蔵野美術学校卒。49年二紀展で二紀大賞。54年二紀会委員。75年二紀会理事。65年より世界20数カ国を4年余車で踏破。72年安井賞。70年神戸学院大学教授。74年兵庫県文化賞、76年神戸市文化賞。2009年神戸市立小磯記念美術館で「中西勝展」開催。2015年没、91歳。洋画家、美術教育

中西 勝 II (なかにし・まさる/1924～2015年)

大阪生れ。中之島の洋画研究所で田中孝之介等に学ぶ。彫刻家・保田龍門のアトリエへ通いデッサンの手ほどきを受けた。1947年帝国美術学校西洋画科卒。49年二紀賞、50年同会同人、54年同会委員、87年常任理事。70年神戸学院大学人文学部美術専任教授。72年安井賞受賞。72年二紀展で文部大臣

賞受賞。74年兵庫県文化賞、76年神戸市文化賞。94年回顧展「中西勝の世界展」(池田 20 世紀美術館)。2015年没、91歳。洋画家、美術教育

中西義男 (なかにし・よしお/1899～1965年)

長野県生れ。1917年太平洋画会研究所に学ぶ。19年小学校の代用教員。1925年「日本農民美術研究所」夏期工芸学校に参加。日本農民美術研究所の研究生として入所。「九科会」(発起人:山本鼎・倉田白羊)が結成され、会友。講師も、務めた。1928年日本創作版画協会展に木版画が入選。会員。28年春陽会展に入選。28年北沢収治らと「淡交会」(長野市)を結成。31年日本版画協会の結成に参加。1936年からは山本鼎の紹介で、雑誌『キンダーブック』に童画の寄稿。47年「鹿苑会」を結成。1965年没、66歳。版画家、童画

中西立太 (なかにし・りつた/1934～2009年)

長野県生れ。1952年長野県上田松尾高等学校卒。55年小学館で小さなカットなどの仕事をはじめ。62年小学館科学図説シリーズ『人類の誕生』で第8回サンケイ児童出版文化賞。64年小学館科学図説シリーズ全体で第11回サンケイ児童出版文化賞大賞。2009年没、75歳。イラストレーター。「歴史画」の第一人者

中西 良 (なかにし・りょう/1964年～)

長野県生れ。1985年安宅賞。87年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。89年同大学院修了。92年渡伊。2000年ブレラ国立美術学院修了(伊)。03年帰国。個展(蔵丘洞画廊・日動画廊・ギャラリーかわにしなど) アート台北、アートシンガポール、KIAFと行った海外アートフェアで活動。洋画家

長沼孝三 (ながぬま・こうぞう/1908～1993年)

山形県生れ。1931年東京美術学校卒。41年聖戦美術展で「英霊」陸軍大臣賞。42年文部省美術展で特選。49年上野駅前広場に野外彫刻「愛の女神」を制作。52年白鷹町畔藤杉沢観音堂に「聖観音」を制作。53年群馬県谷川岳の麓に「山の鎮」を設置。84年日展参与。92年長井市生家に長沼孝三彫塑館開設。1993年没、85歳。彫刻家

長沼守敬 (ながぬま・もりよし/1857～1942年)

岩手県生れ。上京してイタリア公使館に勤務し、1881年伊に留学、85年ヴェネツィア王立美術学校で彫刻を学び、優秀な成績で卒。87年帰国後は明治美術会

<https://kotobank.jp/word/%E5%89%B5%E7%AB%8B-553356> 加、会員。97年伊、仏の美術工芸視察のため再び渡欧、98年帰国して東京美術学校塑造科の初代主任教授。1907年文展審査員。イタリア・アカデミズムの技法を伝えて明治洋風彫刻の先覚者。主要作品『老夫』(1900、東京芸術大学)、『ベルツ胸像』(東京大学構内)、『毛利敬親公像』(山口、長府)。彫刻家

中根 寛 (なかね・ひろし/1925年～)

愛知県生れ。1953年東京芸術大学美術学部油画科卒業、大橋賞。55年東京芸術大学美術学部専攻科(油画)修了。71年新鋭選抜展優賞。75年中国人民対外友好協会の招きにより中国訪問。78年東京芸術大学美術学部教授。86年東京芸術大学美術学部長就任。94年紺綬褒賞。99年勲三等瑞宝章。2000年中根寛画業50年展開催。洋画家、美教

中野和高 (なかの・かずたか/1896～1965年)

愛知県生れ。白馬会葵橋洋画研究所に通う。1921年東京美術学校西洋画科卒。23～27年渡欧。「一九三〇年協会」会員。27、28年帝展で特選。帝国美術学校教授。40年創元会創立会員。58年日本芸術院賞。65年没、68歳。(出典 わ眼)洋画家、美教

中野九州男 (なかの・くすお/1926～1976年)

大分県生れ。官立無線卒。1974年示現会会員。1976年没、50歳。洋画家

中野五一 (なかの・ごいち/1897～1978年)

富山県生れ。1914年小樽商業学校卒。17年小樽洋画研究所創立に参加。22年彫刻家を志し上京、小倉右一郎に師事。27年構造社展に出品、30年構造社賞、44年まで第1回～15回構造社展に全て出品。31年北海道美術家連盟展覧会に会友として出品。37年文展に無鑑査出品。69年日展会員。1978年没、81歳。彫刻家

中野桂樹 (なかの・けいじゅ/1889～1965年)

青森県生れ。少年時代、彫刻家、早坂寿雲に木彫の手ほどきをうけ、1918年上京して太平洋画会研究所に入り藤井浩祐に塑造を学び、1921年東京美術学校彫刻別科卒、朝倉丈夫教授の教室に籍をおき彫塑修業の本格的基礎を研修。1918年文展入選し、29、30、31年帝展で特選、31年以来無鑑査、23年東台彫塑展で東日大毎賞。戦後日展で、49年政府買上げ、54年審査員。官展系の木彫者宿作家として重きをなした。東京美術学校卒業後、内藤伸に師事し

た縁で31年日本木彫会の創立に参画して以来同36年2月同会解散に至るまでその中核。40年太平洋美術学校教授として北支那五省及び満州、朝鮮など7ヶ月にわたる東洋美術美術見学の旅行。東京で没、73歳。木彫、彫刻家、美教

中野四郎 (なかの・しろう/1901～1968年)

山口県生れ。1928年東京美術学校彫刻科卒。28年～帝展、文展に10数回入選。41年以降、文展無鑑査、官展系の中堅作家として活躍。31年木彫の研究団体、九元社を結成、中心的メンバーとして毎年同展に作品を発表。51年戦時中解散した九元社の会員有志とともに創型会を結成、52年より毎年彫刻単一公募団体展を開く、代表。浦和市で没、66歳。彫刻家

中野 淳 (なかの・じゅん/1925～2017年)

東京生れ。川端画学校洋画部で学ぶ。岡鹿之助、松本峻介、川端修に師事。1957年プーシキン美術館賞。94年小山敬三美術賞を受賞。日本美術会事務局長、武蔵野美術大学で非常勤講師、教授、主任教授を歴任。新作家美術協会代表、武蔵野美術大学名誉教授。洋画家

長野誠之助 (ながの・せいのすけ/1916年～)

京都生れ。1929年京都市立絵画専門学校日本画科を卒業。同年自由美術家協会展に出品。47年自由美術家協会会員。戦後は美術教育に携わり、京都市内で美術研究所を主宰。洋画家、美教

中野素昂 (なかの・そこう/1897～1985年)

福岡県生れ。1926年東京美術学校彫刻科卒。水谷鉄也、関野聖雲、建島大夢、北村西望に師事し、28年帝展入選。32年日本美術協会展で奨励賞。41年新文展で無鑑査出品、56年より依頼出品、64年同展審査員、65年日展会員。日展展にも出品。代表作に豊島区役所新庁舎落成記念「希望」、北九州市戸畑区大橋公園の青年像「大気」など。1985年没、88歳。彫刻家

長野隆業 (ながの・たかのり/1905～2003年)

東京生れ。二紀会評議員。2003年没、97歳。彫刻家

中野 亨 (なかの・とおる/1914～1983年)

1914年生れ。川端画学校に学ぶ。藤田嗣治、野間仁根に師事。二紀会同人。1983年没、69歳。洋画家

中野秀人 (なかの・ひでと/1898～1966年)

福岡市生れ。慶応義塾大学高等予科中退、早稲田大学政経学部中退。1822年朝日新聞入社。高村光太郎と交友。1926年渡。ロンドン、パリで制作。1940年「文化再出発の会」発足。絵画、詩、評論等多彩な活動。「中野秀人画集・画論」。66年没、70歳。洋画家

中野弘彦 (なかの・ひろひこ/1927～2004年)

山口県生れ。1945年京都市立美術工芸学校卒。52年新制作展入選。57年立命館大学文学部哲学科哲学専攻卒、59年京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻国内留学修了。70年新制作春季展賞、70・73年京展市長賞、74・76～78・80年創画会春季展賞、75年フランス美術賞展佳作、76年スペイン美術賞展優秀賞。78年東京セントラル美術館日本画大賞展で「西行」が優秀賞、京都府主催の京都美術展で大賞。79年山種美術館賞展優秀賞。82年京都・朝日会館画廊、83年東京画廊及びギャラリー上田で個展開催。89年何必館・京都現代美術館での個展。「藤原定家と鴨長明の無常」以降は同館にて96年「山頭火と芭蕉」、2003年「無常 存在の根源を観る」を開催。90年京都美術文化賞。93～97年成安造形芸術大学教授。93年京都府文化賞功労賞、98年京都市文化功労者賞。98年京都市美術館で回顧展「中野弘彦—無常をめぐる」が開催。京都で没、76歳。日本画家、美教

中野安次郎 (なかの・やすじろう/1901～1992年)

名古屋市生れ。1918年名古屋商業学校卒。23年美術研究グループ「サンサンオン」を結成。27～43年二科展入選。43年新文展入選。47年二紀会創立に参加、48年同委員。76年二紀展で黒田賞。85年二紀展で鍋井賞。二紀会委員。評議員。86年画業60年中野安次郎回顧展。92年没、90歳。洋画家

中野嘉之 (なかの・よしゆき/1946年～)

京都府生れ。1970年多摩美術大学大学院修了。大学4年より創画会にて創作活動。現在はフリーとして活動中。個展多数。新作家賞、創画会春季展賞、セントラル大賞展佳作、MOA 岡田茂吉賞優秀賞。京都美術文化賞等受賞。現在多摩美術大学教授。日本画家、美教

中畑艸人 (なかはた・そうじん/1912～1999年)

和歌山県生れ。和歌山県師範学校卒。師・碓伊之助。1933年帝展入選。46年一水会会員、53年会

員優賞、75年常任委員。55年日展特選。64年渡欧。68年鴨居玲ら具象作家7人と赫土会を結成。大阪中央公会堂榎原画制作。『優駿讃歌・中畑艸人作品集』(90年)刊行。**洋画家**

中畑美那子 (なかはた・みなこ/1904～1990年)

大阪生れ。大阪府立梅田高等女学校を経て、1933年恵美須町独立研究所に学ぶ。小出三郎に師事。38年新関西美術展に入選、42年同展で新関西美術賞。42年関西女子美術学校1年を修了。43年小林武夫に師事し、同年全関西展に入選。戦後は同21年第1回展より行動美術家協会展に出品し、53年行動美術家協会展で行動美術賞、57年同会会友、76年同会会員。兵庫県で没、85歳。**洋画家**

長浜虎雄 (ながはま・とらお/1902～1979年) ※

福岡県生れ。1929年東京美術学校彫刻科卒。28年国画創作展、二科展に入選、31年院展に出品、34年日本美術院院友。55年まで院展に出品し、奨励賞を5回受賞、54年第39回院展に出品作で白寿賞。40年に渡満する。61年～73年まで二科会に出品、66年二科会会友。1979年没、77歳。**彫刻家**

中原清隆 (なかはら・きよたか/生誕年不詳～1963年)

鹿子木孟郎に師事。流動美術研究所を設立。1963年没、89歳。**洋画家**

長原孝太郎 (ながはら・こうたろう/1864～1930年)

美濃国生れ。画家を志し、1882年東京大学予備門を中退。83年不同舎で小山正太郎、93年頃原田直次郎に師事。87年東京府工芸品共進会に出品。90年理科大技手。93年理科大助手。99年理科大本管。95年黒田清輝に師事。96年白馬会会員。1907年東京府勸業博覧会で三等賞。14年文展で三等賞、15年文展で二等賞。16年永久無鑑査。本の装幀、挿絵も描いた。16年東京美術学校教授。東京で没、66歳。**洋画家、美教、装填、挿画、版画**

中原淳一 (なかはら・じゅんいち/1913～1983年)

香川県生れ。私立日本美術学校洋画科に入学。絵画研究所にも通う。1932年創作人形展で注目、「少女の友」の挿絵画家となる。46年「それい」、47年「ひまわり」を創刊、編集、デザインに才能を発揮。妻は葦原邦子。1983没、70歳。**挿絵画家、服飾美術家、版画**

中原英彦 (なかはら・ひでひこ/1916～1986年)

佐賀県生れ。1940年帝国美術学校本科西洋画科

卒。二科会展に出品。77年二紀会会員。東京で没、70歳。**洋画家**

永原 廣 (ながはら・ひろし/1905～1993年)

富山県生れ。彫刻家新海竹太郎に師事。日本美術学校卒業。1926年白日会展に彫刻が入選。1931年白日賞、会友、33年会員。29、31年帝展入選。35年構造社展に出品。35年帝展改組後は、第三部会・国風彫塑会、聖戦美術展、に出品。版画は、36年白日会展に彫刻と木版画を出品。戦後は郷里に戻り、48年日展に出品。後に日展会友。日展系作家による「日本彫塑家倶楽部」(1953年結成、のち「日本彫塑会」「日本彫刻会」)に属し、62年の「日本彫塑会北陸支部」発足に際しては、副支部長。富山県で没、88歳。**彫刻家、版画**

中林 遷 (なかばやし・せん/1878～1937年)

京都市生れ。01年関西美術会で三等賞。03年伊藤快彦の鐘美会で学ぶ。聖護院洋画研究所で学ぶ。04年関西美術会競技会水彩画部門一等賞。08年太平洋画会研究所。13年日本水彩画会創立会員。14年二科会創立参加。15年「日本美術」編集同人。37年市川市で没、59歳。**水彩画家**

中林忠良 (なかばやし・ただよし/1937年～)

東京生れ。1963年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。65年同大学大学院修了。75、76年パリ国立美術学校、ハンブルグ造形芸術大学研修。86年ソウル国際版画ビエンナーレ国際大賞。89～2005年東京藝術大学教授。日動画廊にて12、13年作品集刊行記念展。**版画家、美教**

中原悌二郎 (なかはら・ていじろう/1888～1921年)

1906年白馬会研究所に入り、07年太平洋画会研究所に移る。荻原守衛の影響で彫刻に転じ、新海竹太郎に師事。16年再興日本美術院に入り、18年同人。大正期院展に新鋭ぶりをうたわれたが1921年没、34歳。作品『老人の首』(1916、東京芸術大学)、『若きカフカス人』(19、同)。70年に中原悌二郎賞が設定された。**彫刻家**

長原 担 (ながはら・たん/1907～1986年)

東京生れ。父は長原孝太郎。1930年東京美術大学西洋画科卒。光風会展、帝展に入選。31年光風会展でK夫人賞。38年光風会会員。40年紀元二六〇〇年奉祝美術展で黒田清輝奨励賞。78年日展会友。86年没、79歳。**洋画家**

中原 實 (なかはら・みのる/1893～1990年)

東京生れ。1915年日本歯科医学専門学校卒、同校助手、ハーバード大学歯科に編入学、18～23年卒。渡仏し、アカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ。23年帰国、母校の教授。24年アクション運動に出品。25年三科運動を起し、<単位三科>を設立、アンデパンダン展を組織。自宅に「画廊九段」を設け、前衛的活動を展開。29年第一美術協会の客員。43年二科絵画部会員。59年二科会理事。大正末に未来派や超現実主義を先駆的に紹介した。日本歯科大学名誉学長。日本歯科医師会会長を五期10年務め、のち名誉会長。以後作家活動離れる。東京で没、97歳。洋画家、医師

中原佑介 (なかはら・ゆうすけ/1931～2011年)

神戸市生れ。京都大学理学部卒、京都大学大学院中退。湯川秀樹研究室で理論物理学を専攻、在学中の1955年「創造のための批評」が美術出版社主催美術評論募集第一席に入選、雑誌『美術批評』に掲載。機に、美術批評家となる。安部公房に誘われ「現在の会」に参加、のちに「記録芸術の会」に参加。内科画廊、東京画廊、サトウ画廊、おぎくぼ画廊などの展覧会企画。56年から『読売新聞』の展覧会週評を担当。63年「不在の部屋」展(内科画廊)を企画。70年国際美術展「東京ビエンナーレ」のコミッショナー、76、78年ヴェネツィア・ビエンナーレのコミッショナー。90年水戸芸術館美術部門芸術総監督。90年京都精華大学教授、2002年に退任、京都精華大学名誉教授。06～10年兵庫県立美術館長。08年国際美術評論家連盟会長。東野芳明、針生一郎と並んで「美術評論の御三家」。著書;『ナンセンスの美学』(62年)、「現代彫刻」(65年)、「見ることの神話」(フィルムアート社、1972年)、『人間と物質のあいだ』(田畑書店、1972年)、「大発明物語」(75年)、「80年代美術100のかたち」(91年)などがある。2011年大地の芸術祭における企画「中原佑介のコスモロジー」として、旧蔵書約3万冊が川俣正によってインスタレーションとして展示された。また同年から現代企画室と BankART により「中原佑介美術批評選集」が全13巻の予定で刊行されている。2011年没、79歳。(引用 東文研) 評論家、美教

永淵純一 (ながふち・じゅんいち/1935～2007年)

八幡市生れ。1971年福岡教育大学卒。在学中から二紀展に出品を重ね、77年同人。西日本美術展、81年審査員特別賞、83年大賞。砂や石の粉、アクリル絵具、油絵具などを用い、幻想的な雰囲気を持った物質感の強い独特なマチエールを特徴。それを生か

した「化石シリーズ」は高い評価を受ける。2007年没、72歳。洋画家

中間冊夫 (なかま・さつお/1908～1985年)

鹿児島県生れ。川端画学校に学ぶ。29年「一九三〇年協会」洋画研究所に移る。30年「一九三〇年協会」展でH氏奨励賞。二科展、31年より独立展に出品。36年独立賞。40年独立美術協会会員。62年武蔵野美術大学教授。フォーヴィズムを追求する。東京で没、没。76歳。(出典 わ眼) 洋画家、美教

仲町謙吉 (なかまち・けんきち/1920～2010年)

大分県生れ。大分県師範学校を経て、1943年東京美術学校図画師範科卒。油彩画が新文展入選。卒業後は佐賀県立佐賀高等女学校に、その後は大分県立大分中学校に勤務。戦後は母校の大分県師範学校で教鞭をとり、49年大分大学勤務。日展・光風会展を中心に作品を発表。79年には教育学部長。大分県美術協会会長、大分県芸術文化振興会会長。78年に文化庁長官表彰、94年に勲三等旭日中綬章。油彩・水彩・素描を制作し、版画も手がけている。2000、07年個展を開催。2010年没、90歳。油彩、水彩、版画

中丸精十郎 (なかまる・せいじゅうろう/1840～1895年)

甲府市生れ。1872年上京し、川上冬涯の聴香読画館で洋画を学ぶ。この頃より、銅版、石版画に習熟し、玄々堂より、「輿地誌略」の挿絵銅版や石版画を出版。76年工部美術学校に入学。フォンタネージやサン・ジョヴァンニの指導を受ける。83年「洋式画手本」4冊を出版。同年神田に私塾を開設。89年明治美術会の創立に参加、会員。甲府市で没、55歳。洋画家、美教、版画

長嶺宗恭 (ながみね・そうきょう/1852～1932年)

首里市生れ。唐名は孟有文。雅号は華国。首里儀保村に住み、1873年に小波蔵安章(毛文達)に師事し、75年に王府の絵師に登用されたが、79年琉球王国が崩壊、失職。その後、青年時代の画技が宜湾親方朝保の目にとまり拔擢され、宜湾家に入りました。芭蕉の絵を得意とした。1932年没、80歳。日本画家、絵師

中牟田三治郎 (なかむた・さんじろう/1892～1930年)

福岡県生れ。1911年福岡工業学校建築科卒。南満州鉄道株式会社に数年間勤めた。彫刻家を志し上京、武石弘三郎に師事する。21年東京美術学校彫刻科卒。卒業制作が第3回帝展に入選。22年京都帝国

大学工学部建築学科講師を務め、27年構造社に入会し、29年まで出品。1930年没、38歳。彫刻家

中村一郎 (なかむら・いちろう/1918～1993年)

岡山県生れ。1951年日展に入選、57年日展で特選。57～58年渡欧。59年日本橋画廊で個展。67～68年渡欧各国を巡遊。77年日展審査員、78年日展会員、のち評議員。日洋会常任委員。71年玉野市文化功労賞、73年岡山県文化奨励賞、88年岡山県文化賞。岡山県で没、74歳。洋画家

中村 道 (なかむら・おさむ/1909～1975年)

福岡県生れ。1937年帝国美術学校本科西洋画科卒。JAN会員。1975年没、66歳。洋画家

中村 岳(仲蔵) (なかむら・がく、なかぞう/1909～1992年)

静岡県生れ。静岡郵便局に勤務しながら版画制作。1929年私家版で、詩と版画『有加利樹』を謄写版印刷によって刊行。29年栗山茂、小川龍彦らと「童土社」を創立し、「童土社同人。30年栗山茂が主宰する版画同人誌『艸笛』に作品を発表。33年国画会展に入選。38年日本版画協会展入選、44年同会会友に推挙。48年の「静岡県版画協会」創立に参画。静岡市で没、83歳。版画家

中村岳陵 (なかむら・がくりょう/1890～1969年)

静岡県生れ。東美校卒。川辺御楯に師事する。古土佐の画風を究め、同時に近世西欧絵画の描法を取り入れて、卓抜した描線と清明な色彩を活かした作品を作り出す。福田平八郎、牧野虎雄らと六潮会を結成。芸術院会員。毎日芸術大賞・朝日文化賞受賞。文化功労者。文化勲章。1969年没、78歳。日本画家、版画家

中村可敬 (なかむら・かけい? /生没年不詳)

梅香堂の版元と版下絵師を兼務。本名は利雄。陸舟とも号した。梅香堂は、幕末に文錦堂、大和屋が相次いで廃業するなか、盛んに活動、10年ほどに約60点刊行。同時代の南画家・中村陸舟は、諱が利雄であり、梅香の別号があることから、同一人物とする説もあるが、特定はされていない。中村可敬が描いた木版色摺(長崎版画)、新板阿蘭陀女通行之図、嘉永～文久期(1848～64年頃)が千葉市美に所蔵。版画家

仲村一男 (なかむら・かずお/1911～1982年)

大阪生れ。1930年頃、信濃橋洋画研究所で小出檜重に師事。38年二科展に入選。39年頃から18年間朝日新聞社大阪本社勤務。49年独立賞。56年独

立美術協会会員。中間冊夫、高橋忠也、斎藤長三らと「鷹の会」を結成。67年渡欧、73、75年西欧、中近東へ取材。大阪で没、71歳。83年大阪市立天王寺美術館で独立美術主催の「仲村一男遺作展」が開催。洋画家

中村一美 (なかむら・かずみ/1956年～)

千葉県生れ。1981年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業後、84年同大学大学院美術研究科油画専攻修了。セゾン現代美術館(99年)、いわき市立美術館(2002年)、国立新美術館(14年)で個展。カイカイキキギャラリー(14年、16年・東京)、Blum & Poe(15年・ロサンゼルス、17年・NY)。当初は「Y型」と呼ばれるY字形のモチーフによる表現主義的な絵画作品を制作。東アジアの絵画における空間表現を参照、独自の絵画、絵画理論を探究。2015年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。多摩美術大学絵画学科油絵専攻教授。洋画家、美教

中村勝治郎 (なかむら・かつじろう/1866～1922年)

奈良市生れ。1889年山内愚遷に師事。93年黒田清輝、久米桂一郎に師事。96年黒田清輝、久米桂一郎の白馬会結成に参加。97年東京美術学校雇教員。1905年東京美術学校助教授。00年パリ万博博覧会出品。08, 09, 13, 14年文展に出品。22年没、56、57歳。11年奈良県立美術館で回顧展。洋画家、美教

中村勝美 (なかむら・かつみ/1922～1988年)

青森県生れ。1944年早稲田大学卒。奈良岡正夫に師事。48年日展に入選。50年示現会展で佳作賞。52年示現会会員。日展会友。1988年没、65歳。洋画家

中村敬治 (なかむら・けいじ/1936～2005年)

山口市生れ。59年同志社大学文学部文化学科美学芸術学専攻卒、62年同大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了、同大学文学部助手を経て、66～86年専任講師。72年アメリカ国務省の招聘によりアメリカの現代美術を視察、76～78年フランス政府給費研修員としてパリに留学、82年ドイツ学術交流会(DAAD)によりドイツで滞在研修。同志社大学の助手、専任講師時代から、フランスから帰国後の78～86年以降は、読売新聞夕刊に継続的に展評を執筆、『美術手帖』を中心に現代美術の批評やアンディ・ウォーホルやジャスパー・ジョーンズ等の作家論を執筆、精力的に評論活動を展開した。86年大阪の万博公園にあった国立国際美術館主任研究官(一時期、学芸

課長)として転出。「近作展 2-野村仁」(87年7月)、「近作展 7-今村源/松井知恵」(89年11月)、「芸術と日常-反芸術/汎芸術」展(90年10月)、「パナマレンコ展」(92年8月)、「彫刻の遠心力-この十年の展開」(92年10月)等を担当したほか、パリ留学時代から親交の深かった工藤哲巳の仕事振り返る「工藤哲巳回顧展-異議と創造」(94年10月)を開いた後、95年新設準備段階にあったNTT インターコミュニケーション・センターに転出、97年に開館後は、同センター副館長・学芸部長。、「ビル・ヴィオラ ヴィデオ・ワークス」展(97年11月)、「荒川修作/マドリン・ギンズ展」(98年1月)、『『バベルの図書館』-文字/書物/メディア』展(98年9月)、『『針の女』-キム・スージーのビデオ・インсталレーション』展(2000年5月)等を企画した。01~03年『新美術新聞』に連載した「新美術時評」では、意表をつく見出しと奥の深い諧謔に溢れた批評で読者を楽しませた。大学教員から美術館を去るまでの関西での30年、そして「芸術の方が技術に盲従している場合がやたら多い」(「メディア・アートのあやうさ」『読売新聞』2001年4月11日夕刊)ことを百も承知で勤めたメディア・アートの現場(ICC)を拠点とした東京での10年。その間、国内外の美術の現場を飽くことなく(というより飽き果てるまで)涉猟し、独自の嗅覚で特異な資質の美術家たちを発掘すると同時に、洞察に富んだ鋭い批評を残した。実験映画やビデオ・アートについては、その草創期から詳しく、関連の上映会に足しげく通って丁寧な分析を行った。最晩年は、関東圏の若手の画家たちと自由闊達な勉強会をしばしば開いて互いを刺激しあい、亡くなる直前には「横浜のデュシャン-展示について」(『新美術新聞』2005年3月1日)と題した展評を病床で執筆、最後までその厳しい筆鋒は衰えなかった。著書として、『現代美術/パラダイム・ロスト』(書肆風の薔薇、のち水声社に改名、1988年8月)、『現代美術/パラダイム・ロストII』(水声社、1997年8月)、『現代美術巷談』(水声社、2004年7月)がある。これら三冊に、70年代半ば以降の著述のほとんどが網羅されている。東京で没、68歳。美術批評家

中村研一 (なかむら・けんいち/1895~1967年)

福岡県生れ。鹿子木孟郎の内弟子。本郷洋画研究所に通う。1920年東京美術学校西洋画科卒。21年帝展で特選。23~28年渡仏。サロン・ドートンヌ会員。28、29年帝展で連続特選、帝国美術院賞を受賞。50年日本芸術院会員。東京で没、72歳。(出典 わ眼 洋画家、版画)

中村七十 (なかむら・しちじゅう/1911~1941年)

長野県生れ。木彫家の父に手ほどきを受けたのち、東京美術学校に学ぶ。在学中「女の首」が帝展に初入選。以後文展などに出品。30歳で文展無鑑査、1941年没、30歳。作品には短命だったこの彫刻家の鋭敏な感性と、確かなモデリングによる生気が充ちている。彫刻家

中村修二 (なかむら・しゅうじ/1941年~)

東京生れ。1969年山梨に移住し、甲斐水彩画会賞。新制作協会や山梨美術協会を拠点に、油彩画を制作。84年山梨県新人選抜展に出品、第3回上野の森美術館絵画大賞展、第16回現代日本美術展など、展覧会や個展を中心に活動を続ける。1990年代後半より、「マティス」シリーズを展開。明るい色彩や、オブジェを画面に組み込んだ斬新な構成を取り入れ、それまでの画風を一変させた。2003、05年新制作協会展新作家賞。水彩画家

中村順二 (なかむら・じゅんじ/1971~1999年)

茨城県生れ。1990年柏市・生光ギャラリーで個展。94年沼南町・ドングリの家で個展。95年我孫子市・「ふあいる」でミニ個展。99年没、27歳。2000年柏市・国立がんセンター東病棟で遺作展。03年中村順二美術館が柏市に開館、画集「大空をキャンバスに」刊行。洋画家

中村 真 (なかむら・しん/1914~1969年)

大阪生れ。1931年大阪市立工芸学校工芸図案科卒。29年全関西美術展に入選。34年全関西美術協会会員。31年二科展に入選。39年自由美術家協会展に出品、会員。50年モダンアート協会設立に参加し、のち運営委員。大阪工芸会会長。68年日本万博日本政府館の展示設計。日本美術家連盟関西支部委員長。大阪芸術大学デザイン科主任教授。大阪で没。54歳。洋画家、美教

中村慎一 (なかむら・しんいち 1958年~)

東京生れ。父は洋画家の中村英夫。祖父は装幀家の中村重義。1983年東京造形大学造形学部絵画専攻科卒。86年独立展出品。88年東京展に出品、90年会員。89年自由美術展に出品、89年「佳作作家賞」。94年現展に出品、準会員、96年準会員賞、現代美術家協会会員、2001年研究部、財務部、総務部委員。洋画家

中村新治郎 (なかむら・しんじろう/1906~2003年)

示現会創立員 2003年没、97歳。洋画家

仲村 進 (なかむら・すすむ/1929～2004年)

長野県生れ。1943年満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡った。46年に帰国。郷里の南画家片桐白登の絵画教室に通い、52年より長野県美術展に入選、出品するようになり、53年長野県美術展で信州美術会賞。54年第18回新制作展に「夕の賛歌」が初入選、以後8回入選、春季展賞受賞。60年日展作家である高山辰雄の研究会にその都度上京して参加。66年新日展入選、73年改組展、79年第11回展で特選、84年会員賞。71～74年まで高山辰雄門下による日本画七人展を開催。78年銀座・資生堂ギャラリー一個展。81年山種美術館賞大賞。94年日展内閣総理大臣賞。長野県で没、74歳。 **日本画家**

中村清治 (なかむら・せいじ/1935～2011年)

神奈川県生れ。1958年東京芸術大学油画科卒。72年渡欧。74年上野の森 85年の歩み展、「黎の会」結成に参加。75年サロン・ド・サンコム展。77年東京・銀座の2会場で個展開催、「和の会」結成に参加。81年個展(泰明画廊)。87年中村清治展(読売新聞記者主催、東京・名古屋・大阪)。2011年没、76歳。 **洋画家**

中村清太郎 (なかむら・せいたろう/1888～1967年)

東京生れ。府立第三中学校卒。川端玉章の門下で日本画を学ぶ。1907年日本山岳会に入る。小島烏水らと南アルプス縦走や聖岳などの初登山で知られる。11年東京高等商業学校卒(現一橋大学)。本郷絵画研究所で学ぶ。27年第5回春陽会展に出品。36年足立 源一郎らと日本山岳画協会を結成。第1回展に7点出品、その後も出品を続ける。43年、この頃、日本山岳会評議員。67年12月20日没、享年79歳。(佐) **洋画家、日本画家**

中村節也 (なかむら・せつや/1905～1991年)

群馬県生れ。1929年東京美術学校卒。29年「一九三〇年協会」賞、30年同会奨励賞、32年独立美術協会展海南賞、33年独立賞、36年会員、39年G氏賞。59年米国ロシクルーション美術館、クロッカー美術館で個展。61年シスコのJACの招聘で指導。75年日動画廊で回顧展。群馬県美術会名誉会長。高崎市で没、85歳。 **洋画家**

中村善策 (なかむら・ぜんさく/1901～1983年)

北海道生れ。1916年小樽洋画研究所で学ぶ。24年上京、川端画学校で学ぶ。25年二科展に入選。31年新美術家協会に加わる。37年一水会展に出品、会員。戦後は一水会展、日展、日本国際美術展等に

出品。67日展で文部大臣賞。69年日本芸術院賞。東京で没、82歳。 **洋画家、版画**

中村大三郎 (なかむら・だいじろう/1898～1947年)

京都生れ。西山翠嶂に学ぶ。1916年京都市立美術工芸学校絵画科卒。1918年文展入選。19年京都市立絵画専門学校本科首席卒。20、22年帝展で特選。36年母校京都市立絵画専門学校教授。美人画がおおい。1947年没、50歳。作品に「ピアノ」「弱法師(よろぼし)」など。 **日本画家、版画**

中村琢二 (なかむら・たくじ/1897～1988年)

佐渡市生れ。兄は研一。1924年東京帝国大学経済学部卒。30年二科展入選。30年～安井曾太郎に師事。39年一水会賞。42年一水会会員。46年一水会委員。53年一水会展で芸能選奨文部大臣賞。41年新文展で特選。62年日展で文部大臣賞、63年日本芸術院賞。80年日展参事。82年日展顧問。81年日本芸術院会員。横浜市で没、90歳。 **洋画家**

中村民夫 (なかむら・たみお/1932年～)

埼玉県生れ。賀美中学校の教員。1947年～東北の麓原会公募展麓原展(本荘高校美術教師)に出品。日展、白日会展、埼玉県展に出品。埼玉県上里に中村素描研究所設立、主宰。第38回白日会展で準会員奨励賞の「海辺の家族」を上里町立図書館に寄贈。金井画廊等、個展多数。 **洋画家、美教、水彩、ペンデッサン**

中村忠二 (なかむら・ちゅうじ/1898～1975年)

兵庫県生れ。1918年上京。日本美術学校入学。28年詩集「願望」を出版。白日会展、光風会展、国画会展に入選。36年文展鑑査展に入選。51年日本水彩連盟会員。58年よりモノタイプで虫や花の作品を制作。1975年没、77歳。(出典 わ眼) **版画家、水彩画家**

中村 彝 (なかむら・つね/1887～1924年)

水戸市生れ。1906年白馬会研究所で黒田清輝の指導を受ける。07年太平洋画会研究所に移り、中村不折らに学ぶ。09年太平洋画会展で奨励賞。09文展入選、10年文展で三等賞。10年太平洋画会会員。16年文展で特選。20年帝展に「エロシエンコ氏の肖像」を出品。東京で没、37歳。 **洋画家、版画**

中村貞次 (なかむら・ていじ/1908～1992年)

和歌山県生れ。赤松麟作に師事。新世紀美術協会委員。1992年没、83歳。 **洋画家**

中村 鉄 (なかむら・てつ/1907～没年不詳)

香川県生れ。25年上京。31年東京美術学校油画科卒。33年神戸画廊で個展、36、38年同画廊で開催。37年美術新報画廊で個展。38年台北鉄道ホテルで個展。第13回国画会展に出品。39年第14回国画会展で国画奨励賞。40年上京、求龍堂に勤務。第15回国画会展でF夫人賞、同人に推挙。73年銀座で中林画廊を経営。没年不詳。(佐) **洋画家**

中村 輝 (なかむら・てるたろう/1913～1993年)

大垣市生れ。1931年東京美術学校図案科を中退。35年帝国美術学校彫刻科卒。33年二科展入選。55年一陽会の結成に参加、同会会友、56年同会会員、74年同会委員。64年日本橋高島屋、67年新宿ステーションビル、73年西武百貨店渋谷店、77年日動画廊で個展を開催。88年大垣市制70周年記念として「中村輝彫刻展」を開催。野外彫刻も多く、「金森吉次郎翁」(大垣公園、50年)、「ダイアナ女神像」(京成電鉄谷津公園、58年)、「鶏」(岐阜駅前、59年)、「一粒の種(女神像)」(大垣市水上公園、83年)。横浜で没、80歳。 **彫刻家**

中村傳三郎 (なかむら・でんざぶろう/1916～1994年)

芦屋市生れ。1942年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。47年国立博物館附属美術研究所(現東京国立文化財研究所美術部)奉職。49年文部技官、67年美術部主任研究官、72年美術部第三研究室長、78年定年退官。美術研究所入所当初から明治以降の彫塑史研究に着手し、51年「明治末期におけるロダン」を研究所の機関誌「美術研究」に発表。同論文は、西洋彫刻の受容と展開に着目し、実証的研究に先鞭をつけた論考。彫刻界に近代をもたらしたとされる荻原守衛の生涯と芸術に関する詳細な研究を続行し、その成果を同58年以来「美術研究」誌上に6回こわって発表した。一方、平櫛田中ら木彫家の作家研究、明治以来の彫塑団体の系統的調査研究を併行し、日本近代彫刻史の史的展開を総合的に把握するに至った。上記研究の主要な論文は、著書「明治の彫塑」にまとめ、同書で91年毎日出版文化賞。彫塑・立体造型を主とする現代美術の動向の調査研究にも従事し、その成果は在職中の『日本美術年鑑』の編集、執筆に生かされた。日本美術評論家連盟会員、批評活動も展開し、数多くの絵画を含む美術批評を新聞や雑誌に発表した。千葉県で没、77歳。(引用 東文研 **美術評論家、美術研究**)

中村徳三郎 (なかむら・とくさぶろう/1913～1997年)

福井県生れ。旧制武生中学校時代に森由太郎の指導を受け画家を志す。帝国美術学校(現武蔵野美術大学)に進学。1934年二科展入選。48年春陽展春陽会賞。岡鹿之助に師事。日展・国際形象展等で活躍。中谷泰らと研究団体「五人の会」を結成。1997年没、84歳。 **洋画家**

中村徳次郎 (なかむら・とくじろう/1896～1995年)

神戸市生れ。神戸第二中学校卒、東京農大中退。1923年青木大乗主宰の「新燈社」に通う。23年小出檜重と新交。24年長谷川三郎らと白象会を結成。26年二科会入選。27年中央美術展入選。47年二紀会入選、49年同会同人、51年同会退会。51年一水会出品、58年同会会員。62～66年滞豪。75年日伯現代美術展に出品。 **洋画家**

中村直人 (なかむら・なおんど/1905～1981年)

長野県生れ。1920年彫刻家・吉田白嶺の内弟子。30年年院展で日本美術院賞。36年日本美術院彫刻部同人。43～45年の陸軍美術展で陸軍大臣賞。52～64年渡仏。53年油彩画を描く。64年銀座松屋で滞仏絵画展。65年二科会絵画部会員。80年二科展で内閣総理大臣賞。東京で没、75歳。 **彫刻家、洋画家、版画**

中村英夫 (なかむら・ひでお/1929年～)

東京生れ。明治大学政経学部卒。秋田書店に創業時に入社。社員として勤務しながら独学で学んだ絵で『譚海』誌に絵物語を描く。中本達也と舞台美術の仕事にも携わる。挿絵画家に転向。漫画原作者・梶原一騎と組み、少年漫画誌に連載。出版物としては小学館刊行世界名作シリーズ、朝日ソノラマ、講談社、集英社、ポプラ社などの児童向け単行本、福音館書店の絵本、少年、少年サンデー、少年マガジン、少年キング、少年チャンピオン、明星、平凡等に連載。69年少年週刊漫画誌少年ジャンプの創刊号の表紙の絵を描く。70年代洋画家に転身。洋画家、絵物語作家、挿絵画家

中村 宏 (なかむら・ひろし/1932年～)

浜松市生れ。1951年日本大学芸術学部美術学科入学。53年青年美術家連合に参加。54～61年アンデパンダン展に出品。54年ルポルタージュ絵画運動模索、55年前衛美術会に入会。55～58年日本大学芸術学部美術研究室入所。56年タケミヤ画廊で個展。61年～装丁、挿画、64年「観光芸術」。66年日本画

廊で戦争展。2007年東京現代美術館で個展。**洋画家、ルポルターージュ絵画、アヴァンギャルド作家**

中村 博 (なかむら・ひろし/1904～1980年)

高知市生れ。1920年高知県立第1中学校中退、上京し、太平洋画会研究所、川端画学校で学ぶ。29～32年渡欧。33年国画会会友。37年同人、のち同会会員。44年高知県洋画家協会を設立。47年山脇信徳と高知県展を創立。56年高知県文化賞。高知市で没、75歳。**洋画家**

中村博直 (なかむら・ひろなお/1916～1991年)

神奈川県生れ。1937年沢田政廣に入門、木彫を学ぶ。46年日展入選。49、60年年日展で特選。64日展会員。64年日本橋高島屋で個展。82年改組日展出品作で同展文部大臣賞を受け、83年同展に出品した作品で84年日本芸術院賞。東京で没、74歳。**彫刻家**

中村不折 (なかむら・ふせつ/1866～1943年)

江戸生れ。1887年画塾「不同舎」に入門、小山正太郎に師事。94年新聞社で挿絵担当。1900年パリ万博で褒状。01年渡仏、ラファエル・コラン、ジャン・ポール・ローランスに師事。05年太平洋画会会員、この頃、森鷗外、夏目漱石の挿絵、題字を書いた。24年太平洋美術学校校長。1907年文展審査員。東京府勸業博覧会で1等賞。19年帝国美術院会員。25年帝国芸術院会員。36年書道美術館を開館。東京で没、76歳。**洋画家、版画、美教、書、挿絵**

中村 誠 (なかむら・まこと/1926～2013年)

盛岡市生れ。東京美術学校工芸科図案部卒。1949年資生堂宣伝部入社後、宣伝部制作室長。53年日本宣伝美術会展に出品、特選、会員。57年広告電通賞雑誌広告電通賞。60年新しい写真表現と印刷技術を駆使する広告制作に取り組む。63年日宣美会員賞、ADC 金賞、朝日広告賞、毎日広告賞。87年資生堂顧問。ルーブル装飾美術館招待展で福田繁雄氏との二人展「モナリザ百微笑展」(ジャポン・ジョコンダ展)。2013年没、87歳。**グラフィック・デザイナー、アートディレクター**

中村政人 (なかむら・まさと/1963年～)

秋田県生れ。1987年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。89年同大学大学院美術研究科絵画専攻壁画を修了。92年大韓民国政府招待奨学生として、弘益大学大学院西洋画科修士課程卒。2003年東京芸術大学美術学部助教授。東京藝術大学教授。

村上隆と共に「中村と村上」展や「大阪ミキサー計画」など活動を展開した後、コンビニの看板を作品化したシリーズやマクドナルドのMサインを作品化するなど、作品展開を進め、98年よりアーティスト・イニシアティブ「コマンドN」を主宰。「水見クリック」(富山県氷見市)、「ゼロダテ」(秋田県大館市)、「アーツ千代田3331」(東京都千代田区)などの社会芸術家である。2010年芸術選奨。18年日本建築学会文化賞。**現代美術家**

中村正義 (なかむら・まさよし/1924～1977年)

豊橋市生れ。1946年中村岳陵に師事、日展初入選。50、52年特選。60年新日展審査員。61年日展を脱退。守旧派に対抗、旧画風を一新し斬新な作品を制作。73年从会を結成。75年東京展を立ち上げる。川崎市で没、52歳。(出典 わ眼) **日本画家**

中村正義 II (なかむら・まさよし/1924～1977年)

豊橋市生れ。戦後の荒廃した日展に彗星のように登場し、一度の落選もなく出品回数10回で特選2回、遂に審査員に上り詰め若輩で日展会員となる。日展を離脱。日本画改革の先頭に立ち因習と戦い憤死する。52歳。(出典 わ眼) **日本画家**

中村宗久 (なかむら・むねひさ/1907～1975年)

山梨県生れ。山梨師範学校卒、吉村芳松に師事。新世紀美術協会会員。1975年没、68歳。**洋画家**

中村義夫 (なかむら・よしお/1889～1957年)

兵庫県生れ。1905年松原三五郎に師事。17年東京美術学校卒。21～26年渡欧。アマン・ジャンに師事。サロン・ドートンヌに入選。大阪美術研究会を設立。志賀直哉らと交友。35年大阪パステル画会を指導。57年没、68歳。(出典 わ眼) **洋画家、パステル画**

中村善種 (なかむら・よしたね/1914～1995年)

和歌山市生れ。1938年和歌山師範学校専攻科卒。38年独立美術協会展入選、会員の森有材に師事、42年独立賞、49年会員、66年G賞。抽象表現。74年京都市立芸術大学教授。81～94年大手前女子大学教授。84年京都府文化賞、86年京都市文化功労賞、87年和歌山市文化賞。85年『中村善種画集』刊行。京都市で没、81歳。**洋画家、美教**

中村好宏 (なかむら・よしひろ/1904～1964年)

高松市生れ。1922年香川県立工芸学校卒。1925年東京美術学校図案科卒。梅原龍三郎に師事。30

年より国展に出品。33、37年国画奨励賞。44年同会
会員、会務委員として活躍。46年ハマ展の初代委員
長として横浜画壇復興に尽力。東京で没、60歳。65
年高松美術館で遺作展が開催。洋画家

中村蘭林 (なかむら・らんりん/1853～1938年)

山梨県生れ。藩校徽典館を卒業後、近代南画壇の
重鎮、瀧和亭に師事し花鳥画を得意とした。東京市
青年絵画共進会展(明治22年)、第四回内国勸業博覧
会(明治28年)などへ出品し、山梨県で開催された第
一回絵画展覧会(明治38年)では《紅梅鴻鷺図》が一
等受賞。1900年の皇太子行啓の際には、《迎陽花
鶏》を献画。山梨を代表する近代南画家のひとりであ
る。南画家

中本達也 (なかもと・たつや/1922～1973年)

山口県生れ。1943年帝国美術学校西洋画科卒。5
2年自由美術家協会会員。59年みづゑ賞選抜作家
展でみづゑ賞、同年安井賞。60年ギャラリーキムラ、
61年東京大丸ギャラリー、62年大阪関西画廊、62年
大阪フォルム画廊でエッチング個展。63～64年渡
伊。67年老番館画廊で個展。70年多摩美術大学油
画科教授。東京で没、51歳。洋画家、版画、美教

長屋 勇 (ながや・いさむ/1893～1961年)

山口県生れ。1922年東京美術学校西洋画科卒、
研究科。24～27年商工省海外実業練習生として渡
仏。西洋画、ポスターを研究。25年帝展入選、34年
まで9回帝展入選。36年新文展無鑑査。52年日展で
岡田賞。58年日展委嘱。旺玄社同人、委員。55年新
世紀美術協会結成のち委員。31年多摩美術学校講
師、後教授。42年より共立女子学園、共立女子大学
教授。東京で没、68歳。洋画家、美教

仲矢勝好 (なかや・かつよし/1927～1992年)

宮崎市生れ。1943年旧制宮崎商業学校卒。48年
宮崎交通で、広告やデザイン制作を担当。77～80
年宮交シティのグランドホール大壁画「ガリバー旅行
記」。83年宮崎県置県百年記念肖像画6点制作。85
年厚生年金会館陶板壁画、87年知覧町平和記念会
館陶板壁画。宮崎県美術展、宮日総合美術展等で特
選。92年宮日総合美術展無鑑査。宮崎市で没、65
歳。洋画家、デザイン、壁画

ながやす巧 (ながやす・たくみ/1949年～)

長崎県生れ。ちばてつやの漫画に影響受け、貸本
劇画作家としてデビューし、南波健二プロダクション
のアシスタントを経て独立。1969年に少年漫画雑誌

連載の『男になれ』で商業誌デビュー。代表作に梶原
一騎原作の『愛と誠』(1975年度講談社漫画賞)。98
年以降は浅田次郎の小説をコミカライズしたものを発
表した。デビュー以来、「人がいると気を使ってしまう
ので集中できない」との理由でアシスタントは全く使
わない主義であり、背景やモブシーンも全て自らペ
ンを入れる。2008年に貸本作家デビューから45周
年を迎えるにあたり、短編3作と短期連載1作を収録
したアンソロジー「画業45年記念出版ながやす巧
作品集」が講談社から発売された。10年には別冊少
年マガジンで『壬生義士伝』を連載する傍ら、同誌連
載作の『どうぶつの国』応援企画として全連載作家が
4コマ漫画を寄稿した『どうぶつよんこま』にて、自身
の作家生活で初と述べる4コマ漫画を執筆した。同年、
『壬生義士伝』で第39回日本漫画家協会賞・優秀賞
を受賞。17年『浦沢直樹の漫勉』(NHK Eテレ)にて
テレビ初出演。漫画家

仲山計介 (なかやま・けいすけ/1948年～)

浜松市生れ。1974年多摩美術大学日本画科卒。7
6年多摩美術大学大学院絵画専修科修了。2020年
浜松市美術館で仲山計介展。日本画家、版画

中山爾郎 (なかやま・じろう/1915～2004年)

新潟県生れ。帝国美術学校卒。師・海老原喜之助、
岡鹿之助。春陽会員。2004年没、89歳。洋画家、版
画

中山 巍 (なかやま・たかし/1893～1978年)

岡山県生れの洋画家。1919年帝展初入選。東京
美術学校卒。22～28年渡仏。里見勝蔵、前田寛治ら
と交友。28年二科賞。30年独立美術創立会員。46
年女子美術大学教授。52年日本芸術院賞。独立美
術協会の重鎮。78年没、84歳。(出典 わ眼)洋画家、
美教

中山隆右 (なかやま・たかすけ/1949年～)

群馬県生れ。1976年多摩美術大学絵画科版画専
攻修了。81年日本版画協会会員。83年ソウル国際
版画ビエンナーレ展(韓国)、85年版画(期待の新人
作家)大賞展受賞。99年カダケス国際ミニチュア版画
展受賞(スペイン)、第1回ヴェネツィア国際小品展
受賞。日本版画協会会員 多摩美術大学非常勤講
師。版画家

中山 正 (なかやま・ただし/1927～2014年)

新潟県生れ。1947年多摩美術油絵科中退。57年より
東京、イタリア、アメリカ個展を開催。62年ミラノ滞在。

63年リトグラフ画集「騎士のない馬」パガーニ画廊(ミラノ)より限定出版。64年ロンドン滞在。82年ヘンドリックス・アート・コレクション(米)より木版画集出版。89年銀座和光自選展。東京国際版画ビエンナーレ展等出品。2014年没、87歳。版画家

中山忠彦 (なかやま・ただひこ/1935年～)

福岡県生れ。中津西高校卒、1953年伊藤清永に師事。三輪孝主宰の洋画研究所や英国王立美術学校に学ぶ。54年日展入選、55年白日会入選、58年白日会会員、内閣総理大臣賞。69、81年日展特選。85年回顧展。87年日展会員。96年日本芸術院賞受賞、98年芸術院会員。2002年白日会会長。09～13年日展理事長。19年旭日中綬章受章。洋画家

中山とし子 (なかやま・としこ/1925～2020年)

名古屋生れ。1947年名古屋美交社入社。83年夫・中山一男の死去にともない、株式会社名古屋画廊代表取締役。2000年長男・中山真一の同代表取締役就任に伴い退任。2020年没、94歳。元名古屋画廊代表取締役

中山年次 (なかやま・としつぐ/1840～1890年)

1840年生れ。84年の『第二回内国絵画共進会 出品人略譜』によれば歌川国芳及び月岡芳年の門人、本名は中山亀太郎。上総国に生まれ、横浜不老町に住んだ。1881年内国勸業博覧会、84年内国絵画共進会に油彩画や水彩画を出品。写真を基に絹地に描いた「横浜絵」といわれる洋風の肉筆画を残す。これらは来日した外国人が求めるいわゆる「お土産絵」であった。1890年没、51歳。門人に田端年正、田中修吾、井汲陸次郎。明治時代の浮世絵師。洋画家、水彩画、洋風画、日本画、浮世絵

中山正實 (なかやま・まさみ/1898～1979年)

神戸生れ。1919年神戸高等商業学校卒。川端画学校で学ぶ。21、27年帝展入選。24～27年渡欧、パリでアカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ、サロン・ドートンヌに入選。25年イタリアで壁画研究、銅版画学ぶ。32～38年神戸商大の壁画制作。カラーエッチング研究。その後、各地で壁画制作。60年日本版画協会会員。63年フィラデルフィア美術館、ロックフェラー・コレクション等を買上げ。66年ルガノ国際版画展でオーストリア政府買上げ。東京で没、81歳。洋画家、壁画、版画

中山正實 II (なかやま・まさみ/1898～1979年)

神戸市生れ。1919年神戸高等商業学校卒。川端画

学校に学ぶ。21年第3回帝展に初入選。24年渡欧。アカデミー・グラン・ショメールに学ぶ、サロン・ドートンヌに出品。25年フレスコ壁画、銅版画を習得。27年帰国、第8回帝展に出品、以後12回まで出品。30年第7回槐樹社展に出品。32年、この頃から専ら神戸商大などの壁画制作に従事した。47年創美社主催第1回選抜作家展出品。66年ルガノ国際版画ビエンナーレで買上賞。日本版画協会名誉会員。日本におけるカラーエッチングの先駆者として知られている。79年1月7日没、享年81歳。(佐)洋画家、壁画、版画

中山力治 (なかやま・りきじ/1901～1993年)

東京生れ。日展、光風会展、一水会展に出品。日本パステル画会会長。1993年没、92歳。洋画家、パステル画

永礼孝二 資朗 (ながれ・こうじ・しろう/1901～1975年)

岡山県生れ。1919年上京し、本郷洋画研究所に学ぶ。29年日本創作版画協会展入選。32年日本版画協会展出品入選、44年会友、47年会員。47年の日本版画協会展に出品。会員に推挙。60年まで毎回出品。48～53年国画会展出品。52年からは棟方志功に誘われ日本版画院展に出品、53年会友、54年会員。74年まで出品。61年日本版画会(日版会)出品、会友に推挙され、62年会員、63年退会。津山市で没、74歳。2005年には「没後三十年記念永礼孝二展」勝央美術文学館、津山郷土博物館。版画家

名倉弘雄 (なぐら・ひろお/1945年～)

愛知県生れ。愛知教育大学美術科(美術専攻)修了。浄土宗西山深草派の不退院第27世の住職でもある。能を主題にした作品を描いている。東久邇宮文化褒賞。日本画家、洋画

名坂有子 (なさか・ゆうこ/1938年～)

大阪生れ。樟蔭女子大学卒業後、1962年芦屋市展に段ボールに無数の穴をあけた大作で市長賞、15周年記念賞。62年二科展、女流画家協会展に出品。62年吉原治良に師事、63年具体美術協会会員、解散まで出品。64年グタイピナコテカで個展開催、回転板を用いて描画した同心円のモチーフを繋ぎ合わせ、壁面全体を覆い尽くす大作を出品。同一モチーフの反復を強調することにより、壮大な絵画空間の創出をめざした。60年代後半には一時、マグネットを用いたキネティック・アートも手掛けた。70年日本万国博覧会政府館4号館ドームパターンを担当。「具体」解散後も平面作品を発表し続ける。2004年結成50周年記念「具体」回顧展(兵庫県立美術館)、2015年

アーモリーショー(NY)で個展、2019年米グッゲンハイム美術館美術竣工記念展。洋画家、具体

名嶋憲児 (なじま・けんじ/1968年～)

三重県生れ。1991年中京大学文学部国文学科卒。94、95、97、99年樹樹画廊・名古屋個展。96、99年個展(ギャラリー219・中目黒、都画廊・大阪)。97年ぶどうの国国際版画ビエンナーレ(山梨県立美術館、招待)。99年ハンガリー国際版画ビエンナーレ特別展招待出品、個展(ギャラリー惣・銀座)。版画家

梨本紀美夫 (なしもと・きみお/1911～1983年)

東京生れ。太平洋美術学校卒。国画会展、独立展に出品。1939年創紀美術協会同人。40年美術文化協会創立同人。のち無所属。1983年没、72歳。洋画家

梨本正太郎 (なしもと・しょうたろう/1913～1945年)

東京生れ。1920年東京美術学校図案科本科卒。装飾美術集団の「尖塔社」創設発起人。31年新潟県巻町に転居。吉五郎らと巻町で「四泉会」を結成。33年第4回新潟県展入選。36年第7回新潟県展で特選。38年新潟県展で無鑑査出品。39年第26回二科展初入選。40年第27回二科展入選。45年復員の途次病死、享年32歳。(佐)洋画家

灘本唯人 (なだもと・ただひと/1926～2016年)

神戸市生れ。海軍飛行予科練習生、末期、予科練に入隊。1956年山陽電鉄宣伝部に勤務。同社の宣伝ポスターを描く。61年大阪早川良雄デザイン事務所。兵庫県宣伝美術展、日本宣伝美術会に出品。横尾忠則をデザイナーとして神戸新聞社に入社させた。講談社出版文化賞挿絵部門選考委員。東京イラストレーターズ・ソサエティ代表。2016年没、90歳。デザイナー、イラスト

奈知安太郎 (なち・やすたろ/1909～1986年)

盛岡市生れ。1929年高千穂商業学校卒。31年独立展入選、40年独立賞、41年脱会。32年松本俊介と交友。37～38年渡仏、シャガールに師事。39年日動画廊で個展。41年国画会展に出品。47年自由美術協会会員。49～58年岩手県立盛岡短期大学助教授。1986年没、77歳。90年萬鉄五郎記念館で遺作展。洋画家、美教

夏目漱石 (なつめ・そうせき/1867～1916年)

東京生れ。元來英語教師、子規とその仲間たちと出会わなければ、一介の英語教師で終わっていたかも

しれない。漱石は、俳句のみならず何をしても巧みで、絵画においても、いろいろと試した。これは漱石が吉田蔵澤を好んでいたことによるもので、友人の森円月が漱石に蔵澤の墨竹画を贈ったところ、礼状とともに「蔵澤の竹を得てより露の庵」とよんだ短冊が送られてきたという。子規の没後、「ホトギス」に「吾輩は猫である」「ぼっちゃん」を發表し、文壇での地位を不動のものとした。1916年没、49歳。南画、水彩、水墨、油彩

名渡山愛順 (なごやま・あいじゅん/1905～1970年)

那覇市生れ。1932年東京美術学校卒、和田英作、金山平三に師事。28年帝展入選以後文展、日展に十数回入選。41年光風会展三星賞。46年米民政府沖繩諮問委員会、文化部芸術課美術技官。光風会会員。47年沖繩美術家協会結成。49年沖繩美術展審査委員。51年国民指導委員として渡米、米国美術界視察。55大嶺政寛と1955年協会結成、光風会展奨励賞。60年沖繩美術展開催。70年那覇市で個展。70年没、65歳。洋画家

名取春仙 (なとり・しゅんせん/1886～1960年)

山梨県生れ。久保田米僊、平福百穂に日本画を学ぶ。1906年院展に入選、後に院友に推挙。この頃、朝日新聞社に入社し夏目漱石の「三四郎」をはじめ、島崎藤村、森田草平、泉鏡花ら多くの新聞小説の挿絵を描く。1916年初代鴈次郎の《紙屋治兵衛図》を木版画にすることを依頼された。版元渡邊庄三郎によって役者絵版画家として世に送り出された。また、その後、役者絵版画家として《春仙似顔集》、《新版舞台之姿絵》等多くの版画作品を刊行し、昭和の役者絵に新時代を築いた。1960年没、74歳。日本画、挿絵、版画、浮世絵師

名取明德 (なとり・めいとく/1917～1991年)

東京生れ。有島生馬に師事。1946年一水会会員。53年一水会展で会員優品。53年日展入選。38年より日本橋高島屋で個展。東京で没、74歳。洋画家

那波多目功一 (なばため・こういち/1933年～)

茨城県生れ。父が画家であったこともあり、15歳の頃より日本画を描き始める。1950年高校生の時に院展に入選。51年日展入選。社会人として勤めながら制作を続け、72年松尾敏男に師事。院展を舞台に活躍し、受賞を重ねる。風景画や花鳥画の技法に習熟し、写生に基づく繊細で清雅な画境を展開している。日本画家

鍋井克之 (なべい・かつゆき/1888～1969年)

大阪生れ。1908年天王寺中学卒。上京、白馬会洋画研究所で長原孝太郎に学ぶ。13年巽画会展に出品。14年二科展入選。15年東京美術学校西洋画科卒。15、18年二科展で二科賞。23年渡欧、二科会会員。24年信濃橋洋画研究所を開設。31年中之島洋画研究所と改称。47年二紀会創立会員、のち委員。50年二紀展で日本芸術院賞。64年浪速芸術大学芸術学部長。大阪で没、80歳。洋画家、美教、版画

生井 巖 (なまい・いわお/1941年～)

東京生れ。1958年松本英峰に師事。創造美術会員。80年養清堂画廊個展。小松均に師事。88年ギャラリーおかりや個展。89年、ギャラリーシャローム個展。96年千種画廊個展。97年竹屋画廊(鎌倉)個展。98年煉瓦画廊個展。2014年ギャラリーKANI 個展。洋画家

生江葉子 (なまえ・ようこ/1950年～)

神奈川県生れ。1970年武蔵野美術短期大学卒。71年同大専科修了。71年近代美術協会会員、94年委員、2001年同会退会。洋画家

並河 弘 (なみかわ・ひろし/1910?～1979年)

文化学院に学ぶ。石井柏亭、有島生馬に師事。元二科会会員。二紀会同人。1979年没、69歳。洋画家

並木哲男 (なみき・てつお/1908～1993年)

千葉県茂原市生れ。県立長生中学校卒、茂原市内の小学校において教鞭をとる。その後、東京美術学校(現 東京芸大)に学び、兵庫県の女学校教諭として赴任する。1940年皇太子殿下の図画習字担任教官に任ぜられ、4年後、学習院大学の教授となる。同年には従七位に叙せられる。1993年東京で没、85歳。洋画家、美術教育

名村定志 (なむら・さだし/1902～1989年)

福井市生れ。1922年土岡秀太郎・木下秀一郎らと「北荘画会」を結成。のち鈴木千久馬に師事。高校の美術教師をしながら絵を描く。33年帝展入選。訪欧。鈴木千久馬、堀田清治につづく福井県洋画会の第一人者。1989年没、87歳。洋画家

行木正義 (なめき・まさよし/1909～2004年)

千葉県生れ。川端画学校に学ぶ。1931年国立千葉医科大学に勤務。自由美術家協会展、独立美術協会展に出品。39年猪熊弦一郎に師事。42年田園調

布純粹美術研究所の運営。53年渡仏、パリ大学で芸術解剖学を学ぶ、アカデミー・ド・グランド・ショミエール美術学校に通う。18年間滞仏制作。57年新制作協会会員。その後、同協会審査委員。2001年梅野記念絵画館で個展。04年没、95歳。洋画家

奈良岡昂 (ならおか・たかし/生没年不詳)

北海道生れ。1922年札幌で黒土社の結成に参加。24年札幌丸井で個展。25年北海道美術協会の創立会員。カンデェンスキーに傾倒。32年道展出品最後に、野戦郵便局軍属として中国に渡り、同地で戦死。洋画家

奈良岡正夫 (ならおか・まさお/1903～2004年)

青森県生れ。1925年上京。41年白日会展入選。43年二科展、独立展入選。44年文展入選。46年日展入選。47年「示現会」創立会員。示現会会長。79年日展参与。東京で没、100歳。女優・奈良岡朋子の父。洋画家

檜崎栄昭 (ならざき・えいしょう/1868～1936年)

小林永濯の門人。大蔵省印刷局に在職中、キヨッソーネの助手として彫刻銅版を習得。1920年輸出用の中小判の木版画を発表。32年渡辺版画店から「帝国新議事堂」など大判の木版画による風景画を発表し好評を得た。32年日本橋白木屋で行われた「第三回現代創作木版画展覧会」に出品。東京で没、68歳。版画家、浮世絵師

奈良清四郎 (なら・せいしろう/1911～1991年)

秋田県生れ。1929年光風会展、中央美術展入選。自由美術会員。在京秋田美術会世話幹事(北区王子住)。自由美術の分裂で新たに主体美術協会を創立する。主体美術協会 秋田県立近代美術館所蔵作家。1991年没、80歳。洋画家

檜原健三 (ならはら・けんぞう/1907～1999年)

東京生れ。1933年東京美術学校油画科卒。藤島武二に師事。30年帝展入選。34～43年関東立大連神明高等女学校図画教師。46年日展入選。47年入選、岡田賞、56年審査員、81年日本芸術院賞、日展理事、88年日本芸術院会員。47年示現会創立、創立会員、79年示現会理事長。96年練馬区立美術館で個展。東京で没、92歳。洋画家、美教

檜原益太 (ならはら・ますた/1888～1963年)

1888年生れ。岡田三郎助に師事。創元会会員。文展で無鑑査。1963年没、75歳。洋画家・日本画

檜原満帆 (ならはら・まんぼ/1911～1984年)
1911年生れ。創元会会員。福岡市で没、73歳。**洋画家**

奈良美智 (なら・よしとも/1959年～)
弘前市生れ。武蔵野美術大学入学。同大学中退後、愛知県立芸術大学および大学院修了。1988～93年渡独ドイツ国立デュッセルドルフ芸術アカデミーに在籍。93年A.R.ペンクに師事しマイスターシュウラーを取得。2000年帰国。95年名古屋市芸術奨励賞。ニューヨーク近代美術館(MoMA)やロサンゼルス現代美術館に所蔵。にらみつけるような目の女の子をモチーフにしたドローイングやアクリル絵具による絵画を創立。**洋画家、彫刻家**

成田玉泉 (なりた・ぎょうせん/1902～1980年)
青森県生れ。小学校美術教師、斎藤清を教えた。日本板画院同人。1980年没、43歳。**洋画家、美術教育**

成瀬教富 (なるせ・かずとみ/1910～1993年)
広島市生れ。高等小学校卒、17歳で上京。宮本三郎らに絵を学び、挿絵画家として活躍。朝日新聞に連載された川口松太郎の小説「新吾十番勝負」、東京新聞の連載小説の花登筐「氷山のごとく」(昭和54～56年)、三好徹「戦士たちの休息」(同58年)、毎日新聞連載小説の古川薫「天辺の椅子」(平成3～4年)の挿絵を描いた。1979年創立の一創会に参加し、会員1993年没、73歳。**挿絵画家**

成田楨介 (なりた・ていすけ/1938年～)
東京生れ。1967年示現会展出品受賞。70年示現会会員。71年安井賞展出品(以後7回)。82年日展特選、93年日展審査員('97'06'11年)、94年日展会員。現在示現会理事長。**洋画家**

成田 亨 (なりた・とおる/1929～2002年)
神戸市生れ。青森県に疎開。画家阿部合成、彫刻家小坂圭二の指導を受ける。1950年武蔵野美術学校(現武蔵野美術大学)西洋画科入学。52年同校彫刻科に転科し清水多嘉示に師事。56年武蔵野美術学校彫刻研究科修了。60年東映で特撮美術監督。62年新制作展で新作家賞、協友。65年円谷特技プロダクションの美術監督、「ウルトラ Q」「ウルトラマン」「ウルトラセブン」等のテレビ番組で、ヒーローや怪獣のデザインにたずさわった。日展に出品する芸術活動を行う傍ら、東映特撮美術や、ウルトラマンや彼と戦

った怪獣達のデザイン、松竹の特撮美術等を手がけた。68年フリーの特撮美術監督となり、新宿伊勢丹でウィンドウディスプレイのデザイナー、商業デザイン。70年日本万国博覧会で、太陽の塔内部の「生命の樹」のデザインを担当。東京で没、72歳。**彫刻家、円谷特技プロダクションの映画美術監督**

成田 陽 (なりた・よう/1922～1992年)
南満州生れ。1924年東京に移り住む。42年愛知県に転居。49年中美展入賞、院展入選。51年中村岳陵に師事、第7回日展入選。76年日展会友。55年関西総合展入賞。63年個展(名古屋・松坂屋美術画廊)。65年新日展(名古屋)で中日賞。89年個展-自選展(刈谷市美術館)。1992年没、70歳。94年成田陽・中野貴雄展(リタケギャラリー、名古屋)。**日本画家**

成井 弘 (なるい・こう/1910～1999年)
神奈川県生れ。1937年東京美術学校卒。47年二紀会創立に参加。49年二紀会審査員。52～54年渡仏、藤田嗣治の指導を受ける。67年二紀会常任理事、71年二紀展で25周年記念大賞、81年二紀展で35周年記念賞、87年二紀会理事長。99年没、88歳。**洋画家**

成川雄一 (なるかわ・ゆういち/1937年～)
北海道生れ。1955年千葉県立成東高校卒。58年春陽会入選、武蔵野美術学校卒、三雲祥之助に師事。60年春陽会研究賞、69年会員。66年壺番館画廊(銀座)で個展。99年平和を願う美術展(千葉)出品。平和を願う千葉県美術家の会会員。**洋画家**

成瀬教富 (なるせ・かずとみ/1920～1993年)
広島市生れ。高等小学校卒、17歳で上京。宮本三郎らに絵を学び、挿絵画家として活躍。朝日新聞に連載、川口松太郎の小説「新吾十番勝負」、東京新聞の連載小説の花登筐「氷山のごとく」(昭和54～56年)、三好徹「戦士たちの休息」(同58年)、毎日新聞連載小説の古川薫「天辺の椅子」(平成3～4年)の挿絵を描いた。1979年創立された一創会に参加、会員。東京で没、73歳。**洋画家、挿絵**

成瀬政博 (なるせ・まさひろ/1947年～)
大阪生れ。1969年大阪外国語大学朝鮮語学科卒。大阪簡易裁判所入所勤務の傍ら美術評論を書いてきたが、83年退職してイラストレーターに転身した。97年谷内六郎の後を引き継いで「週刊新潮」の表紙絵とコラムを担当。画家の横尾忠則の実弟。2004年

長野県安曇野に個人美術館「museum cafe BANANA MOON」開設。イラスト、表紙絵

名和晃平 (なわ・こうへい/1975年～)

大阪生れ。1998年京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒、2000年同大学大学院美術研究科彫刻専攻修了03年同大学博士(後期)課程彫刻専攻修了 博士号(美術)取得。04年 咲くやこの花賞 [美術部門](大阪市)。05年 アジアン・カルチュラル・カウンシルの助成によりニューヨークに半年滞在、京都市芸術文化特別奨励者。07年 京都府文化賞 奨励賞。08年六本木クロッシング 2007(森美術館)特別賞。10年京都造形芸術大学大学院特任准教授のち教授、総合造形コース主任。ガラスビーズやプリズムシートを使って彫刻の事物としてのリアリティーを問い直す作品を制作。17年日本プロ野球パシフィック・リーグの優勝トロフィーの制作プロデュースを担当。彫刻家、現美、美教

南城一夫 (なんじょう・かずお/1900～1986年)

前橋市生れ。本郷絵画研究所に学ぶ。1920年東京美術学校西洋画科入学。1924～37年渡仏。ロジェ・ビシエール、アンドレ・ロートに学ぶ。40年春陽会会友、42年春陽会会員。兜屋画廊等で個展を開催。81年群馬県立近代美術館で南城一夫展。安中市で没、85歳。(出典 わ眼)洋画家

南城一夫 II (なんじょう・かずお/1900～1986年)

群馬県生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1920年東京美術学校西洋画科入学。24年渡欧、ロジェ・ビシエール、アンドレ・ロートに学ぶ。27年パリ日本人美術家展に出品。29年薩摩派と福島派の展覧会に出品。37年サロン・ドートンヌに出品。帰国。42年第20回春陽会で会員推挙。81年群馬県立近代美術館で個展。86年群馬県で没、享年85歳。(佐)洋画家

難波香久三 (なんば・かくぞう/1911～1996年)

岡山県生れ。行動美術協会会員。前衛作家。1996年没、85歳。洋画家

難波田龍起 (なんばた・たつおき/1905～1997年)

北海道生れ。1926年早稲田大学政経学部入学、翌年中退。太平洋画会研究所に通う。36年アヴァンギャルド芸術家クラブ結成に参加。38年自由美術家協会会員。戦後は抽象表現的作風。74年フジテレビギャラリー回顧展。87年東京国立近代美術館回顧展。96年文化功労者。東京で没、92歳。洋画家、版画家

難波田史男 (なんばた・ふみお/1941～1974年)

東京生まれ。父は画家・難波田龍起。1960年文化

学院美術科入学。70年早稲田大学第一文学部卒。72年日本橋・東邦画廊個展。74年九州旅行の帰りフェリーから転落溺死、32歳。75年フジテレビギャラリー遺作展。2004年東京ステーションギャラリー遺作展。05年、東京オペラシティギャラリー遺作展。洋画家、水彩画

に

新妻 実 (にいづま・みのる/1930～1998年)

東京生れ。1955年東京芸術大学彫刻科卒。1959年米国に渡り、以後、ニューヨークを拠点に活動。72～84年コロンビア大学助教授、のちニューヨーク大学スイス・ルガノ国際大学院大教授などを務める。78年ニューヨーク彫刻家連盟名誉会長。81年ヘンリー・ムーア大賞展受賞。83年からニューヨークストーン研究所所長。ワシントン・スミソニアン美術館や東京国立近代美術館フィルムセンターのモニュメントで知られ、他にもカナダ、ポーランドなどに石彫が設置されている。1998年没、68歳。彫刻家

仁井谷三徳 (にいいたに・みつのり/1923～1981年)

1923年生れ。ギャラリー仁井谷の父。大阪ゆかりの作家と思われる。東美会会長。1981年没、57歳。洋画家

新津文紀 (にいづ・ふみのり/1904～1966年)

長野県生れ。旧制野沢中学卒業後、地元小学校の教員、1927年木曾中学と高等女学校で図工教師。この間、中川紀元に師事。出版社の編集部勤務。帰郷、佐久美術会や信州美術会の振興に尽力。52年長野県展初入選、教育委員会賞。53年の同展でも同賞を受賞。1966年没、62歳。2016年ギャラリー82で個展。洋画家

新沼杏一 (にいぬま・きょういち/1909～1955年)

北海道生れ。札幌第一中卒。長谷川昇に師事。春陽会研究所に学ぶ。31年春陽会展入選。36年春陽会賞。37年春陽会会友。47年春陽会会員、会務委員、研究所委員となる。55年没、46歳。洋画家

新延輝雄 (にいのべ・てるお/1922～2012年)

広島市生れ。1943年東京美術学校油画科。48年日展入選。64年日展特選、80年日展会員、日洋展常任委員。82年油絵50年記念展(広島福屋特設会場)。92年日展評議員就任。97年中国文化賞受賞。12年日展参与・日洋会副委員長。2012年没、90歳。洋画家

新原峻吉 (にいひら・しゅんきち/1904～1972年)

鹿儿島県生れ。早稲田大学に入学、中退。1931年[東京美術学校]卒。45年県立宮崎第一高等女学校、

宮崎大宮高校、その後は宮崎東中学校で60年退職するまで教壇に立つ。46年[宮崎美術協会]参加、66年[宮崎県美術協会]副会長。69年[宮崎県芸術文化団体連合会]常任委員。1972年没、68歳。72年度宮崎県文化賞。洋画家、美教

新居広治 (にい・ひろはる/1911～1974年)

東京生れ。青山学院中卒。岡田三郎助、前田寛治、牧野虎雄に師事、戦前はプロレタリア美術家同盟中央委員、本部書記長代理を務める。戦後は日本美術会、日本版画運動協会の創設に参加。1950年以降、世界各国での版画展、茨城県の絵画展に出品。日本美術会、美術家平和会議、美術茨城の各委員を歴任。1974年没、63歳。版画家

新納忠之介 (にいろう・ちゅうのすけ/1869～1954年)

鹿児島市生れ。1894年東京美術学校彫刻本科卒。95年母校の助教授、98年日本美術院の第二部(彫刻)が奈良に設置されると共に第二部主任、院展の審査員。1913年日本美術院第二部から分れ美術院を経営し、国宝修理に専念、神仏像2041体、工芸品71点を再生させた。1909年には米国ボストン美術館の東洋部顧問となり、10年には日英博覧会美術館工事監督として渡英した。1899年以来古社寺保存事業につき、国宝保存会委員、帝室博物館学芸委員などを歴任し、学識、技術共にすぐれた彫刻界の長老。その作品には古彫刻の名品の模作が多く、主なものに「百済観音像」(昭和8年、大英博物館並に東京国立博物館蔵)、「四天王」(昭和14年、大阪四天王寺本尊、戦災により焼失)、「観世音寺大黒天像」(同年、鹿児島市美術館蔵)、「毘沙門天及び僧形八幡菩薩像」(同17年、大阪市平野大念仏寺蔵)などである。52年奈良国立博物館評議員。奈良市で没、86歳。叙勲4等、瑞宝章。奈良国立博物館評議員、彫刻家

鳩川誠一 (にしかわ・せいいち/1897～1983年)

千葉県生れ。絵を独学、33年独立展入選、42年独立賞。48年独立美術協会会員。36年白日会展でF氏賞。37年白日賞、白日会会友。72年国際形象展に招待出品。ヨーロッパ芸術展で朱賞。76年蒼樹会展で文部大臣賞。82年千葉県立美術館で個展。東京で没、86歳。洋画家

西岡瑞穂 (にしおか・みずほ/1888～1973年)

高知県生れ。1912年東京美術学校図画師範科卒。13年長野県立諏訪中学校教諭。19年長野県立野沢中学校教諭。25～28年渡仏。30年国画会展、聖徳太子奉賛美術展出品。諏訪市で没、85歳。74年西

岡瑞穂遺作展(諏訪市)、80年西岡瑞穂遺作展(高知市)。洋画家、美教

西岡義一 (にしおか・よしかず/1922～2010年)

奈良市生れ。1943年奈良師範学校卒。50年光風会展に出品、51年会員、68年中沢賞。49年日展出品、83年日展会員。日展参与。奈良教育大学附属小学校教諭で長く勤務。奈良芸術短期大学、奈良教育大学で教授。多くの後進を育てた。絹谷幸二は西岡義一に教わる。2010年没、87歳。洋画家、美教

西尾節子 (にしお・せつこ/1907～1991年)

奈良県生れ。春陽会研究所に学ぶ。1950年春陽会展で研究賞。58年春陽会会員。1991年没、84歳。洋画家

西尾善積 (にしお・よしずみ/1912～1995年)

京都市生れ。1939年東京美術判交油画科卒、38年新文展入選。藤島武二、川島理一郎に師事。43年光風会展入選、光風賞、戦後、同会会員、審査員、評議員、45年退会。47年日展入選、特選、以後51～57年出品委嘱。58～60年渡仏、留学。帰国後、日展審査員、評議員、93年参与。東京で没、83歳。洋画家

西川一草亭 (にしかわ・いっそうてい/1878～1938年)

京都生れ。華道去風流六代目家元西川源兵衛の長男、弟に津田青楓。1904年蒔絵師杉林古香、津田と「小美術会」を結成し、02年浅井忠を顧問格とし交流。07年頃『小美術』の図案を纏めて『小美術図譜』が芸艸堂から刊行。去風流七代目を継ぎ、17年に発刊した流派の機関誌『去風洞社報』、30年『瓶史』と改名して挿花芸術季刊誌とし、編集した。画集に『一草亭畫譜』(五彩洞 1922)、『第一畫集』(津田と共作 1930)、『一草亭第三畫集』(1935)。図案家、華道去風流七代目家元

西川 純 (にしかわ・じゅん/1886年～1974年)

京都府生れ。京友禅の仕事、鹿子木孟郎の室町画塾、聖護院洋画研究所及、関西美術院に学ぶ。1968年関西美術院理事。1908～11年大阪三越呉服店衣装部、島津製作所に勤務。京都市内の私設貝類研究機関・平瀬介館の画工として同館発行の出版物に多くの図を描いた。京都市展(京都市美術展覧会)と京展のみへの出品で個展中心に発表。1974年没、88歳。洋画家

西川藤太郎 (にしかわ・とうたろう/1906 ~1991年)

東京生れ。1921年篆刻家の酒井支山に師事し、篆刻の道に進む。22年より支山の影響で木口木版を始める。30年川端画学校日本画部卒。、36年日本版画協会展入選。37、38、40、43出品。44年会友に推挙。創作版画誌、「版画蔵票」で発表。68年日本版画協会会員。78年『木口木版版画集 懐古帖』を刊行。東京で没、85歳。 **版画家**

西川美沙夫 (にしかわ・みさお/1927~1983年)

兵庫県生れ。日展に出品。1976年光風会会員。1983年没、56歳。 **洋画家**

錦 義一郎 (にしき・ぎいちろう/1898~1962年)

朝鮮生れ。1917年京都市立絵画専門学校で日本画を学ぶ。21年関西美術院で洋画を学ぶ。27年「白亜会」結成、会の中心で活動。29、30、34、36、39、年二科展入選。35年特待、38年会友、41年二科会会員。54年京展審査員。62年没、64歳。 **洋画家**

錦戸新観 (にしきど・しんかん/1908~1995年)

茨城県生れ。1930~35年山本瑞雲に師事、木彫を学ぶ。40年茨城県関城町立正寺のために日蓮上人坐像を制作。45年東京都多摩郡稲城町の妙見寺の僧松野光観に入門し、得度して天台宗の僧籍。47年日展入選。日展に51年まで出品。53、51年日展出品作である不動明王三尊仏の台座、光背を制作し大本山音羽護国寺本堂に安置。57年大本山浅草寺本堂のために梵天・帝釈天像を制作。64年立正佼成会大聖堂、久遠実成釈迦牟尼如来像を制作、64年浅草寺宝蔵門のために仁王尊阿形像を制作。65年インド、セイロン、シンガポール、タイを訪れ各地の仏像を研究。65年浅草寺よりセイロン国総督へ聖観世音菩薩像を贈り、66年同寺より釈迦牟尼如来像をセイロン国アマラダプラ・エスルムニヤ精舎の大長老に贈る。66年伝教大師幼形像を比叡山坂本生源寺本堂に安置。70年伝教大師等身像を総本山延暦寺に寄進し、天台座主即真周湛大僧正より法眼位を授与。71年浅草寺五重塔院内聖観世音菩薩像を制作。73年川崎大師平間寺信徒会館の大日如来像を制作、73年ハワイ天台別院院庭に樹脂製の十一面千手観世音菩薩像を建立。75年ハワイ高岩寺本堂地藏菩薩像を制作。81、79年に制作した馬頭観世音菩薩像を品川本覚寺本堂に安置、川崎大師五重塔院内五智如来レリーフ、弘法大師像、興教大師像、恵果阿闍梨像、茨城県県社大宝八幡宮御神体、横浜市善光寺大日如来三尊像、品川区大崎観音寺如意輪観音像などを制作、安置し、92年仏教伝道文化賞。57、67、72、

76、79、85年日本橋高島屋で個展開催。信仰によって仏を感じて造像する姿勢を貫き、多様な古典様式に現代的感性を融合させた。東京で没、87歳。

仏教彫刻家

西 苦楽 (にし・くらく?/生没年不詳)

経歴は不詳。原南嶺斎らと同時代の人と思われる。作品「紅毛視操眼鏡図」が残っており、西肥崎陽東古河町住西苦楽という落款が入っている。 **江戸絵師、長崎派**

西沢榮一 (にしざわ・えいいち/1908~1974年)

兵庫県生れ。御影師範学校卒。太平洋画学校に学ぶ。1947年日展に入選。東光会会員賞。元新協美術会委員。1986年没、77歳。 **洋画家**

西澤静雄 (にしざわ・しずお/1912~1997年)

神戸市生れ。1969年日本版画協会展山本鼎賞。74年版画集『源氏女人抄』。75年版画集『花』。83年文楽画集『文楽:幻想的情念の世界』。85年『川端康成作品集』。86年『源氏物語』(著:紫式部 12点ノーベル財団)。1997年没、85歳。 **版画家**

西澤笛畝 (にしざわ・てきほ/1889~1965年)

東京生れ。1913年荒木寛畝に入門。寛畝没後は荒木十畝に師事。1915年文展入選、以降は文展・帝展・新文展・日展に出品。内外の人形の蒐集・研究にも熱心で、自家珍藏の雛人形百種を描いた『雛百種』上中下などの木版画集を芸仲堂から刊行。31年「童宝美術院」を結成し、「童宝美術院展覧会」を開催。36年人形玩具の研究所「西澤童宝文化研究所」を設け人形芸術の普及をめざした。43年日本版画奉公会会員。1965年没、76歳。2020年「岩槻人形博物館」開館予定。 **日本画家、版画家、人形玩具研究家、人形玩具の蒐集家**

西沢富吉 (にしざわ・とみきち/1915~1978年)

福井県生れ。松山商業大学卒。小磯良平に師事。文展、新制作展、一水会展に出品。無所属。1974年没、59歳。 **洋画家**

西沢富吉 (にしざわ・とみよし/1915~1974年)

福井県生れ。1936年松山商大卒。小磯良平に師事。40年新燈社展で受賞。42、43年新文展入選。43、54年一水会展入選。46年愛媛美術協会理事、審査員。47年オリン洋画研究所を開設。49年新制作展入選。52年新居浜市役所庁舎正面レリーフ制作。58年無所属。1974年没、59歳。 **洋画家**

員。67～68年、ニューヨークに滞在。川崎市で没、55歳。**洋画家**

西田静子 (にしだ・しずこ/1905～1976年)

1905年生れ。西田幾太郎の二女。京都府立第一高等女学校卒。関西美術院で黒田重太郎に師事。27年白亜会展に出品。35, 36, 38, 39, 42年二科展入選。43年京都市展で受賞。46年京展で市長賞第一席。二紀展に出品。1976年没、71歳。**洋画家**

西田俊英 (にしだ・しゅんえい/1953年～)

三重県生れ。高校生で中部春陽会賞、その後油彩画から日本画に転向。1977年武蔵野美術大学日本画卒。在学中、院展入選し、奥村土牛、塩出英雄に師事。88年日本美術院同人、現在は日本美術院同人、理事、日本芸術院会員、広島市立大学名誉教授、武蔵野美術大学日本画科教授。日本画家、**美教**

西田武雄 (にしだ・たけお/1894～1961年)

三重県生れ。1909年横浜商業学校入学。14年文展に水彩画入選。18年本郷洋画研究所に入り、岡田三郎助に師事。岡田の紹介で東京美術学校製版科の結城林蔵にプレス操作の指導を受け、26年エッチングの試作を行う。21～22年支那旅行、日本倶楽部で個展。25年画堂室内社を開廊、石井鶴三、木村荘八、石井柏亭、岡田三郎助らの個展を開催、30年「エッチングの描き方」発刊。「西田武雄デッサン集」出版。32年雑誌「エッチング」を創刊。各地で講演会を開き普及。33年「画工志願」を出版。25年「アサヒグラフ」に「回顧70年明治初期洋画」を執筆。38年麹町画堂室内社にて旧草土舎展開催。エッチング研究所を設立。後進を育て、38年広山インク株を設立。日本近代美術史の在野研究者。38年資生堂ギャラリーで岸田劉生展を開催(西田企画)。45年戦災。三重県で没、67歳。**版画家、美教、美術普及、エッチング研究所を設立、日本近代美術史の在野研究者**

西田半峰 (にしだ・はんぼう/1894～1961年)

津市生れ。横浜商業学校に在学中、第8回文展に水彩画が入選。本郷洋画研究所に入り、エッチングの画法の研究・普及に熱心に努め、1923年には東京で画廊「室内社画堂」を開廊。日本で最初の洋画商となり、32年雑誌「エッチング」を創刊したことから「エッチングの父」とも呼ばれる。日本近代美術史の在野研究者として活動。はがき絵の普及を目指し、52～61年26,744通のはがき絵を制作し、全国の友人達に送り続けた。1961年没、67歳。**版画家、画廊主**

西田勝 (にしだ・まさる/1918～1974年)

川崎市生れ。1942年帝国美術学校本科西洋画科卒。42, 46年新制作展で新作家賞。47年同会展で岡田賞。51年15周年記念賞。53年新制作派協会会

西田明史 (にしだ・めいし/1908～1999年)

島根県生れ。1925年彫刻家を志し上京、内藤伸の内弟子として6年間師事。27年帝展入選、以来帝展6回、文展(無審査3回)、聖徳太子奉賛会展、日本木彫会展に出品。第1回文展に「相倚」第2回文展に「朝」を出品し連続特選。39年文展以降42年無審査出品。第2次世界大戦後は日展、二科展に発表。60～67年まで同志により「朋人会」を結成し「丸善」で木彫を主体に発表。「藤門会」および「日本木彫会」の主要作家として活躍し多くの秀作を生み出した。代表的な作品に37年の「相倚」、38年の「朝」、40年の「凱旋」、沖縄の「島根戦没者慰霊塔」や島根県庁前と東京岸記念体育館前の「岸清一像」、山陰中央新報礼蔵の「出雲神話」、大社町出雲お国記念塔の「舞姿」。**彫刻家**

二科十朗 (にしな・じゅうろう/1906～1978年)

福岡県生れ。1928年熊本県立工業学校卒。太平洋画会研究所で油絵を学ぶ。草木染の研究。戦前、朝鮮美術展などで活躍し、戦後は太平洋展や県展を舞台に天然染料を用いたろうけつ染作家として活躍。県内各地はもとより、東京や鎌倉などに染色教室を開いて「にしな会」と総称し、門人の作品を集めて開催した「百人展」は6回に及ぶ。66年太平洋美術会西日本支部の創設。東筑紫短期大学で教鞭。筑紫美術協会の役員。1978年没、72歳。2019年大宰府市文化ふれあい館で個展。**ろうけつ染作家、美術教育**

仁科實 (にしな・みのる/1917～没年不詳)

和歌山県生れ。50年和歌山水彩画協会を設立し、会長に就任。55年第8回示現会展で佳作賞。示現会会員、日本水彩画会会員として活躍した水彩画家。98年第5回水彩展OHARAで奨励賞。2003年和歌山市文化功労賞。没年不詳。(佐)**水彩画家**

西八郎 (にし・はちろう/1928～1979年)

京都府生れ。46年大阪市立美術研究所油画部に学ぶ。49年自由美術展に出品。57年自由美術協会会員。65, 73年安井賞展出品。67年安井賞展で鑿光賞。72年より新鋭選抜展(三越)で優秀賞3回。夢土画廊、日本画廊で個展。幻想的作風。東京で没。50歳。**洋画家**

西原比呂志 (にしはら・ひろし/1911年～没年不詳)

松本市生れ。旧制松本中学校在学中より文展(文部省美術展覧会)や日展に出品。1943年、応召。比島派遣第105師団司令部報道班員。46年復員。洋画家として作品を発表しつつける一方、童画家・挿画家としても活躍(神州一味噌のみ子ちゃん、その他のキャラクターあり)。洋画家、童画、挿絵

西巻多門 (にしまき・たもん/1899～1987年)

新潟県生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。水彩連盟会員。新世紀美術協会会員。1984年没、85歳。洋画家、水彩画家

西村 功 (にしむら・いさお/1923～2003年)

大阪生れ。1947年帝国美術専門学校卒。50年二紀展入選佳作賞。56年二紀会委員。60年極端な遠近法の構成とカミノリの刃で絵の具を削る手法を確立。65年二紀展出品作品で安井賞。70年以降度々渡欧。88年兵庫県文化賞。2003年没、80歳。西宮市大谷記念美術館で個展。洋画家、版画

西村喜久子 (にしむら・きくこ/1907～1982年)

北海道生れ。岡田三郎助に師事。1946年光風会会員。47年日展で特選。全道展創立会員。札幌市で没、75歳。洋画家

西村計雄 (にしむら・けいゆう/1909～2000年)

北海道生れ。1934年東京美術学校入学、藤島武二に師事。43年文展特選。早稲田中学、高等学校の教師。51年単身渡仏、ピカソの画商カーンワイラー氏との出会い、各地で個展を開催、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げ。フランス芸術文化勲章、クリティック賞、勲三等瑞宝章など受賞多数。東京で没、91歳。洋画家、美教

西村健次郎 (にしむら・けんじろう/1910～1972年)

青森県生れ。1928県立八戸中学校卒業後、上京、太平洋美術学校本科卒業後母校の八戸中学校で教鞭、71年南郷村立中沢中学校の校長。独立美術協会第1回展から連続12回入選し、37年河北美術展出品、河北賞。49年独立展の会友、東奥展の審査員。1972年没、62歳。洋画家、美教

西村公朝 (にしむら・こうちょう/1915～2003年)

大阪生れ。東京美術学校卒。1941年美術院国宝修理所入所、59年所長。のち東京芸大教授。京都広隆寺の弥勒像や三十三間堂の千手観音像など約1300体の国宝・重要文化財を修理。延暦寺戒壇院の本尊の復興にもかかわった。天台大仏師法印。2003年没、88歳。著作に「仏像の再発見」など。仏師彫刻家、美教

西村五雲 (にしむら・ごうん/1877～1938年)

京都生れ。1890年岸竹堂に入門、竹堂没後は竹内栖鳳に師事。1907年文展三等賞。1913年京都市立美術工芸学校の教諭。31年頃より活発な制作活動を再開、《日照雨》《秋茄子》などの代表作を次々と発表。24～36年京都市立絵画専門学校の教授。画塾晨鳥社を主催、後進の指導に当たった。33年帝国美術院会員、37年帝国芸術院会員。動物の描写にすぐれ、写実に基づいた洒脱な画風を形成した。1938年没、61歳。日本画家、美教

西村昭二郎 (にしむら・しょうじろう/1927～1999年)

京都生れ。1944年京都市立美術工芸学校絵画科を修了し東京美術学校日本画科を卒業。49年創造美術展に初入選、以後新制作展、創画展と出品。53、57、59、60年新制作展で新作家賞、61年新制作協会日本画部会員。67年法隆寺金堂壁画模写。82～91年筑波大学芸術学系教授。1999年没、72歳。日本画家、美教

西村宣造 (にしむら・せんぞう/1943～2012年)

大阪生れ。1962年大阪市立工芸高校卒。日本大学哲学科中退。74～78年パリに遊学、ル・サロンに出品し奨励賞受賞。帰国後上京、銅版画「アルルカン」シリーズ制作。88年版画集『アルルカン』出版。個展中心に発表。95年版画集「夢窓・六人の女」刊行。2012年没、69歳。版画家

西村千太郎 (にしむら・せんたろう/1907～1994年)

名古屋市生れ。1922年鈴木不知の名古屋洋画研究所に入門。30年横井礼二の緑ヶ丘研究所で洋画を学ぶ。春陽会展に出品後、二科展に出品。53年二科展で二科賞。61年二科会会員に推挙。67～73年名古屋造形芸術短期大学助教授、73～76年教授。自宅に研究所を設け後進の指導。名古屋市で没、87歳。洋画家、美教

西村富彌 (にしむら・とみや/1946年～)

佐賀県生れ。1972年東京芸術大学大学院修了。75～78年スペイン・マドリッド留学。80年資生堂ギャラリー個展。94年ストライプハウス美術館、ミズマアートギャラリーで個展。99年銀座「ニッチギャラリー」開廊。米、伊、ベルギーで個展。洋画家

西村房蔵 (にしむら・ほうぞう/1919～1994年)

千葉県生れ。1961年日展入選。68年日展で特選、70年改組日展特選。74年審査員をつとめ、84年日展会員。日本彫刻会運営委員。堅実な手法による自

然なポーズをとる女性像を毎日日展に発表した。東京で没、74歳。 **仏像彫刻家**

西村真琴 (にしむら・まこと/1883～1956年)

長野県生れ。西村晃の父。1908年広島高等師範学校、博物学科卒。北海道帝大教授、マリモ研究から大阪毎日新聞論説委員に転じ、保育事業の推進や科学啓蒙活動などにつとめる。1928年ロボット「学天則」を製作した。著作に「大地のはらわた」「科学奇談」など。36年全日本保育連を結成、初代理事長。大阪で没、73歳。 **植物学者、版画**

西村雅之 (にしむら・まさゆき/1885～1942年)

東京生れ。1912年木彫を林美雲に学び、その没後は高村光雲に師事。また松岡映丘について大和絵風の彩色を研究。文展無鑑査、正統木彫家協会々員。1942年没、58歳。 **彫刻家**

西村憲定 (にしむら・もとさだ/1914～1993年)

東京生れ。1938年東京美術学校油画科卒。38年光風会展で光風会賞。46年光風会会員。47年資生堂画廊で個展。50年日展で特選。60年日展で菊華賞。72年日展評議員。93年没。78歳。 **洋画家**

西村元三朗 (にしむら・もとさぶろう/1917年～2002年)

神戸市生れ。1942年小磯良平の師事を受ける。44年日本大学専門部芸術科卒。53年新制作展で新作家賞、58年会員。71年兵庫女子短期大学教授。80年神戸市文化賞。神戸市で没、85歳。 **洋画家、美教**

西村陽平 (にしむら・ようへい/1947年～)

京都府生れ。1973年東京教育大学教育学部芸術学科卒。74年から98年まで千葉県立千葉盲学校で図工を担当。視覚障害の子どもたちに造形指導。造形作家として活動。77年日本陶芸展で外務大臣賞。2001年日本女子大学家政学部児童学科 助教授。06年日本女子大学教授。 **造形作家、陶芸**

西村義人 (にしむら・よしと/1910～1982年)

熊本県生れ。1931年東京美術学校卒。36年福岡県立柳川高等女学校教諭、40年晋州師範学校教諭。57年日展に油彩画が入選。72年清原武則・西山進と「三樹社」を結成。1982年没、72歳。2010年に宇城市不知火美術館で「生誕100年記念 西村義人展」が開催。 **美教、洋画家、版画**

西村龍介 (にしむら・りゅうすけ/1920～2005年)

山口県生れ。1936年上京、41年日本美術学校日本画科卒、太田聰雨、川崎小虎、矢沢弦月らに学び、またデッサンを洋画家の林武に学ぶ。46年山口市八木百貨店個展開催。この頃、三好正直らと山口市展、山口県展を創設。49年京都市立美術専門学校研究科入学。50年同校中途退学。54年二科展入選、56年特待受賞。57年会友、59年二科金賞、60年会員。63、69年二科会会員努力賞、68年青児賞、71年内閣総理大臣賞。89年芸術選奨文部大臣賞。59年サロン・ド・コンパレゾン展招待出品。67年サロン・ドートンヌ招待出品。70～82年毎年渡欧。79年画集制作。個展も多数。軽井沢町で没、85歳。 **洋画家**

西銘生楽 (にしめ・せいらく/1887～1924年)

那覇市生れ。沖縄県人として初めて東京美術学校で学んだ。1918年県立師範学校で美術教師。美術教育に力をそそぐ。美術教師を主な構成員とする丹青協会会長。22年西銘が中心となり県立二中の学生とともに絵画グループ・樹緑会を結成。子に西銘生一がいる。1924年没、37歳。 **洋画家、美教**

西山真一 (にしやま・しんいち/1906～1989年)

福井県生れ。1926年福井県師範学校卒。42年光風会会員。49年日展特選。54～55年渡仏、アカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ。58年日展会員。73年日展文部大臣賞。80年日本芸術院賞。84年日本芸術院会員。86年「西山真一画集」刊行。87年福井県立美術館で回顧展開催。光風会常任理事、日展顧問を歴任。東京で没、82歳。 **洋画家**

西山舜之助 (にしやま・しゅんのすけ/1915～1970年)

東京生れ。独立美術協会会員。1970年没、54歳。父は料亭「ひさごや」経営。 **洋画家**

西山翠嶂 (にしやま・すいしょう/1879～1958年)

京都生れ。京都市美術工学校卒。竹内栖鳳に師事。後に女婿となる。文展・帝展で活躍し、審査員。1935年画塾青甲社を設立。堂本印象・中村三郎・上村松篁らを輩出した。57年文化勲章。代表作は「青田」「青梅」等1958年没、79歳。 **日本画家、美教**

西山英雄 (にしやま・ひでお/1911～1989年)

京都市生れ。14歳の時、伯父西山翠嶂に入門し、その画塾青甲社で学ぶ。京都市立絵画専門学校に入学し、34年帝展で特選となるなど、頭角を現わす。1946年京都市立絵画専門学校卒。以後も官展に出品、次第に風景画を多く手がけるようになる。14年第3回新文展「雪嶺」、18年同第6回「薄暮」などを出品

したのち、戦後、47年日展で特選。58年新日展で文部大臣賞。力強く壮大な構想力の山岳風景を描く”山の画家”として知られた。35年中国に旅行し、同年の第3回新日展に「天壇」を出品、翌61年日本芸術院賞。古城シリーズも発表し、また晩年は活火山をスケッチして巡り、51年第8回改組日展「薩摩」、55年同第12回「阿蘇嵐」などを発表した。58年日展評議員、69年同理事、79年参事、85年常務理事。54～69年京都学芸大学(現京都教育大学)教授、72～77年金沢美術工芸大学教授。青甲社幹部をつとめていたが、33年翠嶂の死去に際してはこれを継がず、青甲社は解散となった。74年京都市文化功労者、80年日本芸術院会員、85年京都府特別文化功労賞。京都市で没、77歳。日本画家

西脇敦子 (にしわき・あつこ/1921～1975年)

岩手県生れ。大阪女子師範学校卒。行動美術協会展に出品、創造美術協会会員。1975年没、54歳。
洋画家

西脇順三郎 (にしわき・じゅんざぶろう/1894～1982年)

新潟県生れ。藤島武二に師事。1917年慶應義塾大学卒。渡英。文学活動を行い、海外文学の紹介に努める。近代詩に足跡を残した。61年日本芸術院会員。71年文化功労賞。詩人の余技をこえた絵画を制作した。新潟県で没、88歳。(出典 わ眼) 詩人、水彩画、版画

仁平有美 (にたいら・ありよし/1912～1982年)

水戸市生れ。1933年日本美術学校洋画科卒。38年美術誌「詩と美術」社入社、40年同社編集長。47～56年国画会に出品。71年第三文明賞。73年ル・サロン展銅賞。75年近代日本美術協会大賞。77年同会副理事長。80年同展内閣総理大臣賞。茨城美術協会理事。県芸術祭審査員。水戸市で没、69歳。
洋画家

仁平有美 II (にたいら・ありよし/1912～1982年)

茨城県生れ。本名丹下豊明。茨城中学校卒。1932年第9回白日会展に出品。33年日本美術学校読画科卒。35年第二部会展に出品。47～56年まで国画会展に出品。71年第三文明賞。73年ル・サロンで銀賞。75年近代日本美術協会展で大賞、77年副理事長、80年内閣総理大臣賞。茨城県美術協会理事。82年10月4日没、享年69歳。(佐) 洋画家

耳鳥齋 (に・ちょうさい(じ・ちょうさい)/生年不詳～1801から1804年没)

大阪生れ。通称は松屋平三郎。酒造業、骨董業を営む。狂画を能くし、戯作・音曲にも通ずる奇人であった。、享年未詳。江戸後期の浮世絵師

仁戸田秀吉 (にとだ・しゅうきち/1909～1970年)

福岡県生れ。1927年大牟田市三井工業学校卒。本郷絵画研究所に学ぶ。39～43年日本水彩画会展、東光会展、旺玄社展、大潮会展に出品。47年水彩連盟会友推挙、49年奨励賞、50年会員。54年二科会展で特待賞、56年二科会々友、63年会員。63年東京大丸デパートで3回目の個展。1970年没、60歳。
水彩画家

蜷川有紀 (にながわ・ゆき/1960年～)

横浜市生れ。女優、画家、映像作家。2006年より、画家として活動。08年東急Bunkamuraギャラリーにて絵画展「薔薇めくとき」を開催。同年度情報文化学会・芸術大賞。以降毎年個展を開催。テレビ東京開局45周年番組「寧々～おんな太閤記」タイトル画、倉橋由美子没後十年「最後の祝宴」の表紙画など、岩絵の具で描き上げた作品を発表。日本文化デザイン・フォーラム幹事、(財)全国税理士共栄会文化財団評議員、芸術活動分野選考委員、Innovative Technologies 特別賞選考委員(経済産業省)、青森県立美術館アドバイザー。洋画家、表紙

二宮雪夫 (このみや・ゆきお/1903～1975年)

1903年生れ。一水会会員。1975年没、72歳。洋画家

二瓶徳松・経松 (にへい・とくまつ/1898年～没年不詳)

札幌市生れ。1924年東京美術学校卒。17年光風会第5回展に経松の名前で初入選。22年平和記念東京博覧会に二瓶は経松の名前で出品。27年札幌で個展開催後、渡仏。26年には満州美術協会を結成。29年帝展入選。大連女子美の校長。45年下落合～池袋に転居。55年「新世紀」の委員。75年に開かれた札幌「どんぐり会」の65周年記念展の記念写真に二瓶が写る。没年不詳。洋画家、美教

二瓶 等 (にへい・ひとし/1897～1990年)

北海道生れ。1917年光風会展に出品。24年東京美術学校西洋画科卒。28～29年渡仏。第5、10回帝展入選。戦後は新世紀美術協会に参加。1990年没、93歳。洋画家

二瓶大三 (にへい・ひろみ?/1911～1977年)

福島県生れ。1932年福島県師範学校卒、38年県

立相馬女子高校教諭となり美術を担当。40年日本水彩展入選、56年春陽会展入選、66年春陽会会友。67年日本水彩展で会友奨励賞(美術報知賞)、68年日本水彩画会会員。71～76年以降海外取材。1977年没、65歳。水彩画家、美教

丹羽長兵衛 (にわ・ちようべい/1901～1970年)

鳥取県生れ。太平洋美術研究所に学ぶ。新しい絵画表現運動に進む。戦後、「麗人会」の結成に参加。2001年丹羽長兵衛遺作展・画集刊行委員会。出版。洋画家

丹羽林平 (にわ・りんぺい/1870～1919年)

東京生れ。1897年第2回白馬会展に出品。「百美人油絵展」を須田輝洲と開催。98年東京美術学校西洋画科選科卒。99年第4回白馬会展に出品、以後、6回～10回展まで出品。1912年第1回光風会展に出品。19年12月27日没、享年49歳。(佐)洋画家

ぬ

額田晃作 (ぬかた・こうさく/1935年～)

大阪生れ。独立美術協会。洋画家

塗師祥一郎 (ぬし・しょういちろう/1932～2016年)

石川県生れ。1953年金沢美術工芸大学油彩専攻卒。小糸源太郎に師事。光風会初入選、同会員。63年光風会退会の後に日洋展に参加。52年日展入選、71年特選、76年会員、2003年日本芸術院賞、日本芸術院会員。08年旭日中綬章受章。10年日洋会理事長。15年埼玉県立近代美術館のリニューアルオープンを記念して4月から7月まで展覧会「未来に遺したい埼玉の風景—塗師祥一郎展」が埼玉新聞社主催で開催された。日本の洋画家(浦和画家)。16年従四位。2016年没、74歳。洋画家

沼倉正見 (ぬまくら・まさみ/1910～1987年)

宮城県生れ。1941年鈴木千久馬主宰の絵画研究所に学ぶ。熊谷守一に師事。46年新東北美術展新東北美術会賞。47年日展初入選、65年新日展特選、73年改組日展特選、日展会員。48年創元会展創元会賞、準会員、50年創元会会員。創元会常務理事。49、50年河北美術展河北賞連続受賞。63年宮城県芸術協会結成に参加。65年河北美術展顧問。76年宮城県教育文化功労者。日展審査員。1987年没、77歳。洋画家

沼田一郎 (ぬまた・いちろう/1902～1972年)

東京生れ。川端画学校に学び、1924年辻永に師

事。24年中央美術展入選。26年春陽会展に出品。28年帝展に出品。29～36年光風会展に出品、31年レイトン賞。40年二科展に出品。42年旺玄社に出品、月光賞、社友、43年に同人、戦後、旺玄会の創立に参加、のちに退会。59年太平洋展に出品、会員、以後同展に出品、評議員。35年ガラス絵をはじめ48年以降、三越百貨店、壺中居、高島屋百貨店などでガラス絵による個展開催。64年居住地で鎌倉美術家協会の創立に参加、代表。横浜市で没、70歳。洋画家、ガラス絵

沼田一郎 II (ぬまた・いちろう/1902～1972年)

東京生れ。川端画学校に学ぶ。1923年白日会展に第2～5回展まで出品、24年中央美術展に入選。辻永に師事。28年第9回帝展に初入選。29年第1回童人社洋画展に出品、以後第4回展にも出品。他にも春陽会展、光風会展、二科展、旺玄会展に出品。59年太平洋美術会会員、のち評議員。鎌倉美術協会会長。47年12月20日没、享年70歳。(佐)洋画家、ガラス絵

沼田一雅 (ぬまた・かずまさ/1873～1954年)

福井県生れ。木彫家の竹内久一に師事。1900年パリ万国博で鍍銅「猿廻し置物」が1等金牌。仏で陶磁器彫刻を研究。帰国後、母校の東京美術学校教授。51年日本陶彫会を結成、会長。54年芸術院恩賜賞。東京で没、81歳。彫刻家、陶芸

沼辺強太郎 (ぬまべ・きょうたろう/生没年不詳)

小山正太郎の不同舎に学ぶ。太平洋画会に所属、1893年第5回明治美術会展に出品。「墨画の景色写生3点」。油彩「宿場風景」。1907年東京勸業博覧会美術館展に出品「杉並木」。日光院風景、水彩画。水彩画家

沼田月斎 (ぬまた・げっさい/1787～1864年)

1787年生れ。尾張名古屋藩士。はじめ牧墨僊にまなび、2代歌政と号した。のち張月樵(ちよう・げつしょう)、山本梅逸(ばい・いつ)に師事し、文人画で知られた。1864年没、78歳。別号に凌雲など。作品に「絵本今川状」など。江戸時代後期の浮世絵師

ね

根上富治 (ねあがり・とみじ/1895～1981年)

山形県生れ。酒田市生れ。1922年東京美術学校日本画科卒、結城素明に師事。傍ら本郷絵画研究所で岡田三郎助にも洋画を学ぶ。1921年帝展で日本画が入選、22年帝展で特選。37年帝国美術学校で

教鞭。38年川崎小虎・野田九甫らと「日本画院」を興し同人。41年椿貞雄・新海竹蔵らとともに山形県美術協会結成に参加。49年から日展委嘱となり、日展・日本画院に出品。1981年没、86歳。日本画、版画、美術

根岸 敬 (ねぎし・けい/1925～1980年)

埼玉県生まれ。安井曾太郎に師事。一水会展、日展に出品。1959年一水会会員、77同会委員。59年新日展で特選、61年新日展で特選、日展会友、日展委嘱。秩父美術協会会長。埼玉県で没、65歳。洋画家

根岸文子 (ねぎし・ふみこ/1970年～)

東京生まれ。1993年女子美術大学絵画科版画コース卒。スペイン美術大学の版画工房で学ぶ。スペイン国内版画展新人賞、モハカ絵画奨学コース(スペイン)。99, 2001, 04年ときの忘れもので個展。02年エガン画廊(マドリッド)で個展、またマドリッド国際アートフェアに同画廊より出展、現在、スペインで制作を続ける。版画家

根岸右司 (ねぎし・ゆうじ/1938年～)

埼玉県生まれ。1961年埼玉大学教育学部美術科卒。60年光風会展入選、95年辻永記念賞、光風会副理事長・常務理事。61年新日展入選、渡辺武夫に師事、87、92年改組日展特選、96年審査員、2015年改組日展新審査員、15年日展内閣総理大臣賞、理事。17年日本藝術院賞、日本藝術院会員。20年改組新日展副理事長。公益社団法人日展副理事長・理事、一般社団法人光風会副理事長・常務理事。洋画家

根岸鎌吉 (ねぎし・れんきち?/生没年不詳)

1890、91、92、93年明治美術会に出品。93年には水彩画を出品。1900年「種馬集」、03年「新選種牛図譜」出版。04年太平洋画会展に出品。06年札幌農学校に作品を寄贈。11年「新選種牛図」等を出版。(佐) 洋画家、水彩

根本霞外 (ねもと・かがい/1899～1975年)

東京生まれ。松林桂月に日本画を学ぶ。1929、39年帝展、新文展で入選。前川千帆に木版画を学び、35年日本版画協会展で入選。37年同展で協会賞、39年会員。42年日本版画協会横浜展(横浜・野沢屋)で実務担当、43年協会事務所を自宅に置く。60年日本版画会(日版会)に参加。1975年没、76歳。日本画家、版画、蔵書票

野生司香雪 (のうす・こうせつ/1885～1973年)

香川県生れ。香川県工芸高校卒、東京美術学校日本画科に進む。1917年約1年間インド滞在し、寺院の壁画模写に参加、32年に再びインドに渡り、壁画は36年に完成。壁画の下絵は同50年、永平寺に献納。帰国後、長野善光寺雲上殿や埼玉名栗観音などの壁画を手掛け、郷里高松の法恩寺や、父が役僧をつとめた檀紙村の金乗寺にも襖絵を残す。長野で文化人や高僧と交わり、文人的生活を送った。生涯インドと日本の交流の架け橋としての役割を担い、73年、仏教協会より仏教美術賞。1973年没、87歳。日本画家、仏画、壁画

納富 進 (のうとみ・すすむ/1911～1976年)

佐賀県生れ。1935年文化学院美術部卒。37年一水会展入選。43年一水会賞。61年一水会常任委員。41年文展入選。42年文展岡田賞。66年日展評議員。69年改組日展で文部大臣賞。70年佐賀県文化功労賞。長崎県で没、64歳。77年佐賀県立博物館で遺作展。洋画家

野木定次郎 (のぎ・さだじろう/1890～1919年)

福岡県生れ。矢掛中学卒業後、1908年上京し、白馬会に入り洋画を研究。東京美術学校に入学し、和田英作、長原孝太郎に師事。同学を中退して12年渡米、オハイオ州クリーブランドの大学で研鑽を重ね、将来を期待されたが、健康を害して帰国。1919年没、29歳。洋画家

野北晏輝 (のきた・あんしょう/1918～1974年)

福岡県生れ・1943年帝国美術学校本科西洋画科卒。中野和高に師事。66年一水会会員。1974年没、56歳。洋画家

イサム・ノグチ (のぐち・いさむ/1904～1988年)

米、ロス生れ。野口米次郎の子。パリでブランクーンに師事、のち中国、日本で書、造園、陶芸を学ぶ。1946年「14人のアメリカ人展」に選ばれ、造園、家具、デザイン、舞台設計など幅広い分野で活躍した。1988年没、84歳。作品にパリのユネスコ本部庭園など。アメリカの彫刻家

野口謙蔵 (のぐち・けんぞう/1901～1944年)

滋賀県生れ。1924年東京美術学校西洋画科卒。黒田清輝、和田英作に師事。郷里に戻り、蒲生野の風物を描いた。平福百穂の指導を受けた。31、33、34年帝展で特選。34年東光会会員。43年新文展審査員。滋賀県で没、43歳。(出典 わ眼) 洋画家

野口謙蔵 II (のぐち・けんぞう/1901～1944年)

滋賀県生れ。滋賀県立彦根中学校卒。1924年東京美術学校西洋画科本科卒。平福百穂に日本画を学ぶ。29年第10回帝展に初入選。槐樹社に出品。31年第12回帝展、33年第14回、34年第15回帝展でそれぞれ特選。東光会会員。38年新文展に無鑑査出品。39年神戸、大丸で個展。41年銀座、鳩居堂で個展。43年新文展第二部審査員。44年7月5日没、享年43歳。49年滋賀県立産業文化館で回顧展。(佐) **洋画家**

野口昂明 (のぐち・こうめい/1909～1982年)

愛知県生れ。1927年愛知県立工業学校図案科卒。伊東深水に師事。35年中里介山の「大菩薩峠」の挿絵を描き、時代ものの挿絵の第一人者として活躍した。中山義秀と組んだ作品が多く、「戦国梟雄伝」「武辺往来」、池波正太郎の「堀部安兵衛」、永井路子の「王者の妻」、代表作に「大菩薩峠絵本」。1982年没、73歳。 **挿絵画家**

野口 鎮 (のぐち・しず/1924～1993年)

東京生れ。1942年豊山中学校卒、46年加藤顕清に彫刻を学ぶ。48年東京美術学校卒。父親は人形作家、49年人形劇団プークの美術部員。54年東京都港区立北芝中学校、同愛宕中学校、都立高等工芸学校の講師。62年 UNIMA(国際人形劇連盟)日本代表としてポーランド、ワルシャワ会議に出席。64年行動展入選。以後同展に出品を続け、66年同会会友、71年同展で奨励賞、73年同会会員。69年チェコ・プラハで行なわれた UNIMA 第10回大会に出席。初めは人体像を中心に具象彫刻を制作したが、戦後抽象彫刻へ移行。85年前後「水は天から貰い水」シリーズ。東京都田無福祉法人緑寿園ロビー、神戸市垂水区歌敷山通称院記念碑、泉佐野市犬鳴山七宝滝寺記念碑など公共の場のための制作も行なっている。美術教育にも寄与し、76～93年女子美術大学の講師。東京で没、69歳。 **彫刻家、美教**

野口小蘋 (のぐち・しょうひん/1847～1917年)

大阪生れ。明治を代表する女流南画家。初め四条派を学ぶが、19才で日根對山に師事し、25才の時に上京。1877(明治10)年、滋賀の酒造家野口正章と結婚する。第一、二回内国絵画共進会で褒状、第三、四回内国勸業博覧会で妙技二等賞、日本絵画協会第一回展で銅牌、さらに日英博覧会では銀賞など、数多く受賞した。1877(明治10)年、甲府に醸造所を持つ滋賀の酒造家野口正章と結婚。後しばしば来甲

し、数多くの作品を遺す一方、明治初期の甲府愛宕焼の絵付も行っている。制作は、山水・花鳥を得意とし、代表作に御大礼記念に献上した「阿波鳴門」・「小松島」の六曲屏風一双「西王母図」等があり、穩健着実な画風により1889(明治22)年華族女学校教授、後、帝室技芸員を勤め、奥原晴湖と共に女流南画家の双璧とされる。 **明治を代表する女流南画家、美教**

野口小蕙 (のぐち・しょうへい/1878～1945年)

滋賀県生れ。母は明治を代表する女流南画家で女性初の帝室技芸員となった野口小蘋。6才で上京。南画を母小蘋に学び、14才の時、日本美術協会展入選。1897年日本絵画協会展で二等褒状。1900年パリ万国博覧会に母小蘋とともに出品。南画壇の重鎮、小室翠雲と結婚するが、離別。日本美術協会展、日本画会展で活躍。1945年没、67歳。 **日本画家**

野口琢郎 (のぐち・たくろう/1975年～)

京都府生れ。1997年京都造形芸術大学洋画科卒。2000年長崎市にて写真家・東松 照明の助手に就く。01年京都西陣の生家に戻り、家業である箔屋野口の五代目を継ぐため修行。その後も精力的に創作活動を続け、04年の初個展以来毎年個展を開催。 **箔画家**

野口藤三郎 (のぐち・とうざぶろう/～1970年)

佐賀県生れ。1898年東京美術学校西洋画科卒。長崎県で没。 **洋画家**

野口徳次 (のぐち・とくじ/1908～1999年)

宮城県生れ。1936年[東京美術学校]油画科卒。毎日新聞社に入社。記録映画の制作。41年映画コンクールで文部大臣賞。48年帰郷し、都城泉ヶ丘高校高城分校教諭。68年[二科会]会友、81年会員。79年シルクロードの作品展を東京と宮崎で開催。81年都城市立美術館館長。82年宮崎県文化賞。1999年没、91歳。 **洋画家、美教、版画**

野口駿尾 (のぐち・としお/1881～1946年)

東京生れ。1901年東京美術学校日本画科卒。06年フランスへ留学し、室内装飾を学んで帰国。08年前田侯爵家の本郷にある邸の洋館の室内装飾を依頼される。1910年明治天皇前田邸行幸に際し、画商林忠正がフランス滞在中に収集した300点を超える絵画のなかから、邸を飾る作品を黒田清輝とともに選定。11年国華社と並んで日本・東洋美術史研究の一翼を担ってきた審美書院に主幹の一人として運営を

引き継ぐ、30年社長。43年日本版画奉公会会員。**室内装飾家、審美書院社長、版画**

野口俊文 (のぐち・としふみ/1959年～)

長野県生れ。1982年武蔵野美術大学卒。90年春陽会展入選。2005年春陽会賞受賞。06年春陽会会員推挙。07年「奥信濃で出会った師弟二人展」アートミュージアム・まど。09年「木原正徳・野口俊文二人展」飯山市立美術館。**洋画家**

野口彌太郎 (のぐち・やたろう/1899～1976年)

東京生れ。川端画学校に学ぶ。1922年二科展に初入選。26年「一九三〇年協会」会員。29～33年渡仏。33年独立美術協会会員。52～70年日大芸術学部教授を務める。75年日本芸術院会員。東京で没、76歳。(出典 わ眼)**洋画家、美術教育**

野口良一呂 (のぐち・りょういちろう/1904～1942年)

東京生れ。本名遼一郎。1916年本郷区根津小学校卒。22年川端画学校及び本郷洋画研究所に学ぶ。23年清原重以知、富田温一郎に師事。第4回新光洋画会に出品。25年第2回白日会展に出品、以後、毎回出品。32年白日会会員。第12回帝展に初入選。白日会朝鮮展のため京城に赴く。35年第二部会展に出品。岸田国土他の本の装幀を担当。36年昭和十一年文展監査展に出品。38年第1回～4回新文展に出品。創元会会員。42年8月2日没、享年38歳。(佐)**洋画家**

野崎一良 (のざき・かずよし/1923～2008年)

京都生れ。仏師の家に生まれる。1949年東京美術学校研究科卒。55年京都市立美術大学講師、71年同校教授。52年行動美術賞。88年京都府文化賞功労賞。91年京都美術文化賞、京都文化功労者。京都で没、85歳。**彫刻家**

野崎華年 (のざき・かねん/1862～1936年)

名古屋市生れ。1883年上京、殿木勝吉に学ぶ。90年内国勸業博覧会の展覧会に出品。美術教師。97年名古屋に洋画塾「明美会」をひらく。1903～08年浅井忠に師事。10年鈴木不知らと「ハレー洋画会」を結成、11年「東海美術協会」を発足、常務理事。36年没、74歳。**洋画家、美教**

野崎華年 II (のざき・かねん/1862～1936年)

名古屋市生れ。河野次郎から洋画を学ぶ。1883年上京し、殿木勝吉に師事。87年帰郷し、菅原小学校美術教員となる。97年明美会を開く。1903年浅井忠に師事。08年に改称して浪越美術会となり、後に名古屋美術会となる。10年いとう呉服店(現大丸松坂屋名古屋店)の天井画と壁画制作。鈴木不知とハレー

洋画会を結成。11年東海美術会が発足し、鈴木らと洋画部門の常務理事となる。36年没、享年74歳。(佐)**洋画家、美教**

野崎信次郎 (のざき・しんじろう/1923年～)

鳥取県生れ。1961年光風会入賞。63年日本版画院会員。44年第一展受賞。65年創元展入選。69年新世紀展受賞。74年国展受賞。**版画家**

野崎利喜男 (のざき・りきお/1909～1985年)

横浜市生れ。1929年本郷絵画研究所、二科技塾などで洋画を学ぶ。30年裕伊之助に師事。37～40年渡仏、アンリ・マティスに師事、影響を受ける。47年一水会会員。52年一水会展で会員佳作賞。66年再渡仏、66年カンヌ・ビエンナーレ国際美術展でグランプリ・カンヌ市賞。68年三越等で滞欧作展。東京で没、75歳。**洋画家**

野坂徹夫 (のざか・てつお/1949年～)

青森県生れ。和光大学芸術学科(日本画)卒。1984年ホアン・ミロ国際デッサン・ドローイングコンクール入選(バルセロナ)。88年青森県芸術文化奨励賞。2003年伊フィオレンティーノ市立美術館個展。09年銀座ギャラリーゴトウ個展。青森大学、青森短大非常勤講師。**洋画家、美教**

野島康三 (のじま・こうぞう/1889～1964年)

浦和市生れ。1905年慶應義塾普通部に入学、12年退学。07年写真品評会、東京写真研究会展に出品。10年東京写真研究会に入会。15年三笠写真館、野々宮写真館を開設。22年小石川の自邸で岸田劉生、万鉄五郎、小林徳三郎、富本憲吉の個展開催、24年春陽会展洋画入選。26年国画創作協会の第2部(洋画)開設に関与、油絵を出品、同会会友。28年国画創作協会第1部解散し、梅原龍三郎が第2部の国会発足を助け、評議員。35年慶応大学カメラクラブ顧問、全日本写真連盟委員。神奈川県で没、75歳。**写真家**

野地正記 (のじ・まさき/1914～1997年)

神奈川県生れ。東京美術学校卒。南方へ出兵、終戦後、捕虜として過酷な労働に従事。読売アンデパンダン展で瀧口修造に高く評価される。「宇宙胎」というマンダラ的小宇宙を形成する。1997年没、83歳。2005年福島県立美術館で野次正記展。**洋画家、シユール**

野尻三郎 (のじま・さぶろう/1916～1942年)

愛知県生れ。豊橋中学校卒。1939年帝国美術学校西洋画科入学。36年同級の浅原清隆らとグループ「表現」を結成。フォーヴィスム風から超現実主義的な作品制作。39年二科、九室会に参加。42年没、26歳。**洋画家**

能勢亀太郎 (のせ・かめたろう/1893～1942年)

鳥取県生れ。1919年東京美術学校西洋画科卒、研究科を経て25～27年欧州、遊学。29～31年再度渡仏。帰国後は帝展文展に出品、白日会々員。能勢洋画塾を開塾。38年北京に遊び、40年陸軍航空本部嘱託、支那巡歴、重慶爆撃行参加、41年「重慶三部作」二部を完成、航空美術展に出品。41年南支従軍。1942年没、48歳。洋画家

能勢真美 (のせ・まさみ/1897～1982年)

北海道生れ。1914年札幌中学退学。17年東京薬学専門学校を中退。25年道展創立会員。30年帝展入選(31、32、33、34年)。31年槐樹社展で荊田賞。33年旺玄社創立同人。47年一水会会員。49年北海道文化賞。50年日展に出品(67年まで)、57年日展出品委嘱。55年帯広市文化賞。1982年没、86歳。洋画家

野田九浦 (のだ・きゅうほ/1879～1971年)

東京生れ。東美校卒。寺崎広業に師事する。歴史に対する深い素養を備え、人物画を得意とする。狩野探幽の研究でも一家を成し、著書に『狩野探幽』がある。1971年没、92歳。日本画家、版画

野田健郎 (のだ・けんろう/1921～1993年)

北海道生れ。1939年川端画学校修了、44年東京美術学校油画科卒。54年創元展入選、55年創元展受賞、同会準会員、56年創元展準会員賞、会員、78年退会。54年日展入選、71年改組日展で特選、75年改組日展特選、76年会友、83年会員。77年日洋展に出品、87年新日洋会の設立に参加。54年より熊本県立荒尾高校に勤務。67年熊本県立済々黌高校に転勤。77年熊本大学教育学部講師。67年渡欧。88年「熊本の現代作家」展(熊本県立美術館)。熊本市で没、72歳。洋画家、美術

野田修一郎 (のだ・しゅういちろう/1931～1993年)

山梨県生れ。麻布中学校で日本画家山田申吾の教えを受け、1951年東京藝術大学日本画科入学。74年日展特選、日春展で日春賞と奨励賞、日展の再度特選。1977年に山田申吾が没した後は加藤東一に師事。馬を生涯にわたるモチーフとし、哀愁を帯びた表現と落ち着いた色彩の作品を描いた。1993年没、62歳。日本画家

野田哲也 (のだ・てつや/1940年～)

熊本県生れ。1963年東京芸術大学美術学部油絵

科卒業。65年同大学大学院絵画研究科油絵専攻修了。68年東京国際版画ビエンナーレ国際大賞を受賞。91年東京藝術大学教授。2014年大英博物館で半年間個展を開催。現在、東京藝術大学名誉教授。(出典 わ眼) 版画家、美術教育

野田半三 (のだ・はんぞう/1886～1946年)

東京生れ。1904年早稲田中学校卒。三宅克己に師事。08年東京美術学校西洋画科を首席卒。22～24年渡欧。26年静岡高等学校教授。この頃、太平洋画会会員。1946年没、60歳。洋画家

野田英夫 (のだ・ひでお/1908～1939年)

米、カリフォルニア生れ。1929年カリフォルニア・フライン・アーツに学ぶ。31年中退、ニューヨークに移住、ウッドストック芸術村でアート・ステューデント・リーグの夏季講座に参加。32年ウッドストック美術協会賞。33年ディエゴ・リベラの助手として壁画を制作。来日、34年二科展に出品。37年新制作協会会員。東京で没、31歳。79年熊本県立美術館で回顧展。洋画家、版画

野田弘志 (のだ・ひろし/1936年～)

1936年韓国生れ。61年東京藝術大学油画科卒(小磯良平教室)。82年白日展内閣総理大臣賞。94年宮本三郎記念賞。広島市立大学芸術学部教授を経て現在無所属。2015年神戸市立小磯記念美術館で「東京藝術大学・小磯良平に学んだ美術家たち 野田弘志展」が開催。洋画家

野田正明 (のだ・まさあき/1949年～)

広島県生れ。1972年大阪芸術大学美術学科卒。77年に渡米し、ニューヨーク・アート・スチューデント・リーグで学ぶ。卒業後はニューヨークを中心に世界各地で個展を開催し、主に鏡面ステンレスを素材としたパブリックワークを制作。作品は、ギリシャのアポロ神殿隣に位置するデルフィー・ヨーロッパ文化センター(2005)、アテネのアメリカン大学(2009)、松江市宍道湖畔岸公園(2010)に恒久設置され、日本では福山駅前広場で福山市のシンボルともなっているモニュメントを見ることができる。彫刻家、版画、洋画

野田好子 (のだ・よしこ/1925～2016年)

静岡県生れ。静岡県立富士高女卒。曾宮一念に師事。1953年国画会会員。64年文部省、近代美術館買い上げ。80年吉原高等学校・斎藤センター回顧展。93年ロゼンシアター(富士市文化会館)緞帳制作。シュルレアリスムの影響を色濃く反映。2016年没、91

歳。三越で個展。2008年静岡県立美術館で回顧展。
洋画家

能登靖幸 (のど・やすゆき/1923年～)

岡山県生れ。1942年岡山県師範学校卒、研究科に学ぶ。46年佐藤一章洋画研究所で洋画を学ぶ。48年東光会展入選、49年同会会友。50年日展入選。76、81年日展特選。81年岡山大学教育学部教授。森田茂に師事。92年山陽新聞社賞(文化功労)。97年日展会員。99年岡山県文化賞。**洋画家**

野長瀬晩花 (のながせ・ばんか/1888～1964年)

和歌山県生れ。1903年近野尋常小学校卒、大阪在住の中川蘆月塾に入門、のちに京都在住の谷口香嶠(たにぐち・こうきょう)に師事。09年京都市立絵画専門学校(現:京都市立芸術大学)第1期生入学、翌年中退。11年新古美術品展で三等賞。人気を得て京都画壇に登場。18年土田麦僊、小野竹喬、榊原紫峰、村上華岳らと国画創作協会を創設、日本画壇に新風を吹き込。21年渡欧し、翌年帰国。46年疎開先の信州で白炎社を結成し、地元の芸術文化運動に貢献。64年没、75歳。**日本画家、版画**

野中光正 (のなか・みつまさ/1949年～)

東京生れ。1968～71年太平洋美術研究所に学ぶ。73～82年渋谷洋画人体研究所に学ぶ。77年日本版画協会会展出品。個展中心に発表。78年渋谷・現代版画センター個展。84～2008年渋谷・ゆーじん画廊で18回の個展。2001年新潟・絵屋個展(以降05、06、10、12年)**版画家**

野中ユリ (のなか・ゆり/1938年～)

東京生れ。東京都立駒場高等学校卒。1953年頃から銅版画を始め、関野準一郎や駒井哲郎や瀧口修造に師事。57年瀧口の推薦で瀧口企画のグループ展「銅版画展」(タケミヤ画廊)に出品。57年「第1回東京国際版画ビエンナーレ展」(東京国立近代美術館)に出品。59年個展で澁澤龍彦の知遇を得る。67年「現代美術の動向展」、パリ青年ビエンナーレに出品。**版画家**

野々内保太郎 (ののうち・やすたろう/1902～1985年)

島根県生れ。西山翠嶂に師事し、京都市立絵画専門学校卒。1933年帝展に入選。以来、帝展・文展・日展に28回の入選を重ねる。59年皆川千恵子らと共に「牧人社」結成。画風は、細密かつ華麗な花鳥画を得意としていた。1985年没、83歳。**日本画家**

野々内良樹 (ののうち・よしき/1930年～)

京都生れ。父親は、日本画家の野々内保太郎。19

50年京都市立美術専門学校卒、西山英雄に師事。51年日展入選。66年日展特選・白寿賞、日春展入選。75年山種美術館賞展招待出品。80年日展特選。85年日展審査員、日展会員。**日本画家**

野々村一男 (ののむら・かずお/1906～2008年)

名古屋市生れ。東京美術学校卒。1929年帝展入選。35年新文展で特選、52年日展で特選。75年日展で内閣総理大臣賞。81年芸術院賞。88年芸術院会員。ブロンズによる男性の裸体像をモチーフとした。名古屋市で没、101歳。**彫刻家**

野原櫻州 (のはら・おうしゅう/1886～1933年)

岐阜県生れ。1909年東京美術学校卒。久保田米僊・小林呉橋・寺崎広業に師事。19年京都市に転居し、橋本関雪に師事。16年文展で入選。22年帝展で入選。歴史画、花鳥画。特に薔薇の絵を得意とした。岐阜鶴飼を見物にきたイギリス皇太子(後のエドワード8世)に贈る岐阜提灯に絵を描いた。1933年没、47歳。**日本画家**

野間清六 (のま・せいろう/1902～1966年)

滋賀県生れ。1930年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。31年帝室博物館鑑査官補、51年東京国立博物館美術課長、54年桑港日本美術展のため渡米、57年東京国立博物館学芸部長。女子美術大学教授。シュヴァリエ・ド・ノワール勲章。59年文化財専門審議会専門委員、埴輪展のため渡米。66年従四位勲三等旭日中綬章。東京で没、64歳。著書:日本古楽面(昭和10年)、日本美術大系一彫刻(16年)、日本彫刻の美(18年)、日本仮面史(18年)、古仏の微笑(21年)、美を慕う者へ(22年)、日本の名画(26年)、御物金銅仏(27年)、日本美術辞典(27年共著)、日本の面(28年)、日本の絵画(28年)、土の芸術(29年)、墨の芸術(30年)、飛鳥、白鳳、天平の美術(33年)、日本美術(33年)、日本美再発見(38年)、続日本美再発見(39年)、金銅仏(39年)、小袖と能衣裳(39年)、装身具(41年)、インターナショナル日本美術(41年)。**美術史家、東京国立博物館、美教**

野又 穫 (のまた・みのる/1955年～)

東京生れ。1979年東京芸術大学美術学部デザイン科卒。マッキンゼーエリクソン博報堂へ入社しアートディレクター。78年安宅賞受賞。84年マッキンゼーエリクソン博報堂を退職、独立。95年芸術選奨新人賞美術部門受賞(文化庁)。2007年タカシマヤ美術賞受賞(タカシマヤ文化基金)。14年女子美術大学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアル・デザイン専攻

教授。現代美術家、美教、アートディレクター、デザイナー

野間傳治・伝治 (のま・でんじ/1935～2005年)

愛媛県生れ。父は野間仁根。1958年東京芸術大学絵画科卒。60年アカデミー・ランソンに学ぶ。63年個展(兜屋画廊)。フルブライト留学生として渡米。64年ボストン・インプレッションズ・グラフィック、銅版画講師。65年ボストン・プリントメーカーズ、第二席。ベツフォード美術展第一席。一陽会展、青麦賞。2005年没、70歳。版画家

野間仁根 (のま・ひとね/1901～1979年)

愛媛県生れ。1919年上京、20年川端画学校に通う。25年東京美術学校西洋画科卒。24年二科展に入選。28年二科展で樗牛賞。29年二科賞。33年二科会会員。挿絵も描いた。55年鈴木信太郎らと一陽会を創立、会員。東京で没、78歳。洋画家、挿絵、版画

野見山暁治 (のみやま・ぎょうじ/1920年～)

福岡県生れ。1943年東京美術学校洋画科卒。52年渡仏。58年安井賞受賞。64年帰国。68年東京藝術大学助教授、後、教授。81年藝大を辞職。97年「無言館」設立に尽力。2000年文化功労賞、14年文化勲章を受章。(出典 わ眼)洋画家、美教

野見山暁治 II (のみやま・ぎょうじ/1920年～)

福岡県生れ。1943年東京美術学校洋画科卒。48年自由美術家協会展で自由美術協会賞。52年フランス政府私費留学生として渡仏。56年サロン・ドートンヌ会員に推挙。58年安井賞受賞。64年帰国。68年東京藝術大学助教授、72年教授となる。81年東京藝術大学を辞職、客員教授。92年芸術選奨文部大臣賞。97年「無言館」設立に尽力。2000年文化功労賞、14年文化勲章受章。2003年東京国立近代美術館で回顧展。(出典 わ眼)洋画家、美教

野村公雄 (のむら・きみお/1907～1956年)

東京生れ。1930年東京美術学校彫刻科塑造部選科、並びに東京歯科医学専門学校卒。構造社展に出品のかたわら齋藤素巖に師事。構造社賞受賞後会員。44年解散まで構造社に在籍。文展にも出品し無鑑査待遇。戦後製作は少なく、家業の歯科医を続けた。作品に「セルパン」「いくさのにわ」、浮彫彫刻を主とした。東京で没、49歳。彫刻家

野村 耕 (のむら・こう/1927～1991年)

京都市生れ。1948年京都市立絵画専門学校日本画科卒。50年パシフィック美術協会に入会、65年まで同会展に出品。62年朝日秀作美術展。現代日本美術展、64年現代日本画展(アメリカ巡回)、64年東京大丸で個展。90年、1950年代日本画展(京都市美)出品。91年没、64歳。日本画家、パシフィック

野村光司 (のむら・こうじ/1896～1975年)

福島県生れ。1922年東大農学部卒。24年ブラジルに渡り、同国官吏として農業試験場に勤務、のち拓務省官吏として総領事館に勤務。帰国後一水会の中村琢二に師事。47年一水会会員。60年同会委員。70年日展審査員、71年日展会員。53年日展特選、朝倉賞。62年日展で特選。75年没、81歳。洋画家

野村正三郎 (のむら・しょうざぶろう/1904～1991年)

長野県生れ。1928年東京高等師範学校卒。中学、高校の教員を経て53年愛媛大学教授。65年二科会友。71年二科会員。74年勲三等旭日章受章。80年銀座・文藝春秋画廊個展。86年愛媛県立美術館個展。91年没、87歳。洋画家、美教

のむら清六 (のむら・せいろく/1916～1955年)

山梨県生れ。川端画学校に入り日本画を学ぶ。新興美術院に出品1958年岩崎巴人、長崎莫人らと日本表現派を結成、油彩画のように剛毅な筆致と重厚な画面の水墨着彩画によって、戦後の日本画改革運動の一端を担った。61年無所属、個展を重ねた。75年日仏現代美術展大賞。1955年没、39歳。日本画家、水墨

野村千春 (のむら・ちはる/1908～2000年)

長野県生れ。平野高等女学校卒。1929年中川一政に内弟子として師事し、春陽会研究所に学ぶ。武井直也から彫刻を学ぶ。31年春陽会展入選、50年会友賞、52年会員。女流画家協会には創立会員として参加し、52、54年女流画家協会賞。63年以降長野県美術展(県展)の審査員を務めた。2000年没、91歳。洋画家

野村守男 (のむら・もりお/1904～1979年)

広島市生れ。1926年川端画学校で藤島武二に学ぶ。27年二科展入選。38年中国取材旅行。41年二科会会友。45年二科会会員。49年二科会会員努力賞。60年渡欧。73年二科展で日本芸術院賞恩賜賞。東京で没、75歳。洋画家

野村義照 (のむら・よしてる/1945年～)

大阪生れ。1970年東京芸術大学日本画科卒。卒業制作が藝大附属資料館買上げ。72年院展入選。7

3年前田青邨に師事、平山郁夫に師事。84年東京セントラル美術館日本画大賞展佳作賞。86年古文化財研究機関として一世保存修復研究所設立。代表顧問に就任。91年新薬師蔵「四天王像胎内経巻」の修復をはじめ数々の古文財の修理にあたる。**日本画家**

野村芳光 (のむら・よしみつ/1870~1958年)

和歌山県生れ。14歳初代野村芳国に学び、16歳二代芳国に師事した。1892年頃、京都でフランス人画家ジョルジョ・ビゴーに洋画を習い、「パノラマ描法」を学ぶ。版画は1930年『野村芳光創作版画京洛名處』版元佐藤章太郎商店発行。同掲載広告に『京洛名處』の題名、《知恩院鐘楼》《八坂之塔》《伏見稻荷山》《廣76澤之月》《加茂堤之雪》《高雄秋景》の6点が掲載。横判《二條橋より大文字を望む》、豎判《清水産寧坂通》出版、芳光の『京洛名處』シリーズは8点確認。1958年没、88歳。**浮世絵、パノラマ画、版画**

野本昌男 (のもと・まさお/1914~1979年)

埼玉県生れ。1940年埼玉師範学校専攻科美術科卒。47年東京美術学校に学び、寺内萬治郎に師事。47年「紅土会」を創立。日本橋三越で個展。48年光風会展に出品。58年光風会会員。50年日展に出品。55~56年渡欧アカデミー・グラン・ショミエールで学ぶ。浦和で自死、64歳。**洋画家**

乗松 巖 (のりまつ・いわお/1910~1997年)

松山市生れ。1935年東京美術学校図案科卒。水野欣三郎に師事して彫刻に志す。38年二科展入選。41年二科賞。50年二科会に復帰し同会会員。53年会員努力賞。60年に渡欧し約6ヶ月間滞在し、この間、イタリア、ギリシャの古典彫刻に注目して研究した。75年東郷青児賞。80年二科会文部大臣賞。81愛媛県立美術館で弟乗松俊行と兄弟展「彫刻と備前焼展」を開催。81年東京のストライプハウス美術館で個展。46年女子美術大学で教鞭を取り、53年同教授。松山市で没、86歳。**彫刻家、美教**

野呂良一呂 (のろ・りょういちろう/1904~1942年)

東京生れ。清原重以知、富田温一郎に師事。本郷洋画研究所に学ぶ。1928年白日会展で白日賞。32~40年白日会会員。創元展に出品。1942年没、**洋画家**

は

梅素亭玄魚 (ばいそてい・げんぎょ/1817~1880年)

東京生れ。はじめ浅草の骨董商ではたらき、のち父の経師職を手伝うが、書画の版下を得意とし、注文も多かったことから、経師職を辞め専らこれに従事し、

小説の版下でも有名となった。活字の秀英体B型仮名書風の版下を作り、活版印刷の成立に大きな貢献をした。また、千社札・絵ビラに使われる江戸文字を創った。**版下師**

灰谷正夫 (はいたに・まさお/1907~1985年)

広島県生れ。鬚光、灰谷正夫とともに勤務していた広島市内の印刷所では、図案工、石版工として働きながら画家を目指し、1926年に上京した。29年「一九三〇年協会」展入選、31年二科展入選、35年帰郷。戦後は自由美術展や二科展を中心に発表した。1985年没、79歳。**洋画家、版画家**

梅堂国政 (ばいどう・くにまさ/1848~1920年)

江戸生れ。四代歌川国政。幼少から初代歌川国貞門下に学び、初代没後は二代国貞に学ぶ。1889年三代国貞を襲名。一寿斎、香蝶桜とも号し、国貞襲名以降は豊斎、芳斎などと称した。鉄道など、明治の開化を積極的に取材したことで知られる。1920年没、72歳。**江戸時代末期から明治時代にかけての浮世絵師、長崎派、長崎版画**

灰野文一郎 (はいの・ぶんいちろう/1901~1977年)

新潟県生れ。1925年明治大学商科卒。宇都宮市立商業学校、県立宇都宮商業高等学校等で商業美術の教鞭。31年白日会入選。37年白日会会友奨励賞、白日会会員。後常任委員。白日会栃木県支部長。36年文展入選。戦後日展に出品。栃木県文化協会理事。宇都宮市で没、75歳。**洋画家、美教**

南風原朝光 (なえばる・ちょうこう/1904~1961年)

沖縄県生れ。1919年沖縄第二中学中退。20年上京し、29年日本美術学校卒、名渡山愛順と那覇市で二人展開催。32年大城皓也と沖縄美術協会を創設、神田三省堂画廊で開催。46年「琉球古典芸能団」結成。52年帰郷、沖展審査委員、芸能祭審査委員。60年那覇市に劇場建設を計画、「とまり劇場」落成。1961年没、57歳。**洋画家**

南風原朝光 II (なえばる・ちょうこう/1904~1961年)

沖縄県生れ。1929年日本美術学校卒。その後、帰郷。第6回白日会展に出品、以後、12回展まで連続出品し、31年第8回展で白日賞。32年第1回沖縄美術展に出品。38年藤田嗣治を沖縄に案内する。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。41年那覇、山形屋で個展。42年第1回台日展で第1回台日文化賞。48年国画会会員。51年第6回沖縄美術展で運営委員。59年竹中三郎らと五人展。61年没、享年57歳。(佐)**洋画家**

羽下修三 (はが・しゅうぞう/1891~1975年)

新潟県生れ。1916年東京美術学校入学。高村光雲、北村西望らに指導を受ける。27年から同校で教

鞭を取る。45年疎開を機に五泉にアトリエを築く。1975年没、84歳。彫刻家

萩谷 巖 (はぎのや・いわお/1891～1979年)
福岡県生れ。1908年葵橋美術研究所に学ぶ。18～20年光風会展に出品。22年渡仏。シャルル・گرانに師事。サロン・ドートンヌ会員。再三渡仏。個展中心に活動する。東京で没、88歳。(出典 わ眼)洋画家

萩原一羊 (はぎわら・いちよう/1871年～没年不詳)
金沢市生れ。浅井忠、黒田清輝に師事。1906年関西美術院創立会員、同展に出品。美人画。博文館編集局員。没年不詳。洋画家

萩原吉二 (はぎはら・きちじ/1914～1957年)
青森市生れ。1928年盛岡尋常小学校卒業。独学で絵を始め、32年杜陵日本画会展に日本画を、素顔社展に水彩画を出品。34年盛岡の美術団体である「七光社」に参加、36年木版画出品、目録の表紙を版画で制作。37年日本版画協会展入選、以降連続入選、44年日本版画協会会員。38年白日会、造型版画協会展、新興美術家協会展に入選。43、44年国画会展入選、48年国画会展で優秀作品。1957年没、43歳。版画家、水彩、日本画

萩原孝一 (はぎわら・こういち/1909～1979年)
長野県生れ。野沢中学校卒業。1934年東京美術学校西洋画科卒業。38～54年野沢中学校、姫路高等女学校、野沢北高校の教壇に立つ。48年日展入選。48年佐久美術展を結成。54年一水会々員。日本山岳画協会にも所属。62年上野松坂屋で個展開催、64年渡欧。68年佐久市民美術展運営委員。73、77年紺綬褒章。1979年没、70歳。2010年ギャラリー82で個展。洋画家、美教

萩原朔美 (はぎわら・さくみ/1946年～)
東京生れ。1966年日本大学芸術学部文芸学科中退。寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」参加。67年『青森県のせむし男』舞台を踏む。丸山明宏(美輪明宏)との共演作『毛皮のマリー』で美少年役。68年『新宿のユリシーズ』演出担当。以降同劇団の演出家。代表作に『書を捨てよ町へ出よう』『時代はサーカスの象にのって』。69年『毛皮のマリー』の演出、ドイツのフランクフルトで開催された国際実験演劇祭に招待。73年アメリカ国務省の招聘により渡米。帰国後、アメリカ文化センターでビデオ・アートについて講演。版画作品、写真作品などメディアを使い作品制作。75年(株)エンジンルーム設立、代表取締役。雑誌『ビ

ックリハウス』パルコ出版より創刊し、初代編集長。パルコ文化、渋谷系サブカルチャーを生みだし、牽引。78年にイメージフォーラム映像研究所講師。81年多摩美術大学芸術学科非常勤講師、82年同大学専任講師、88年同大学助教授、93年同教授就任。90年東京アナウンス学院講師。2001年多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科教授。02～06年に桜美林大学非常勤講師。02～06年東北芸術工科大学非常勤講師。07年多摩美術大学生涯学習センター長。11年多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科長、13～16年造形表現学部長。16年前橋文学館館長。日本映像学会員。日本文芸家協会会員。全税共文化財団評議員。愛知文化情報センター専門委員会委員。工芸高等学校定時制課程学校運営連絡協議会委員。公益財団法人せたがや文化財団評議員。萩原朔太郎は母方の祖父。映像作家、パルコ文化、渋谷系サブカルチャー、演劇、版画、造形、美教

萩原 淳 (はぎわら・じゅん/1960年～)
兵庫県生れ。大翔会会員。県美同好会会員。太平洋美術家協会会員。県市展入選、他受賞多数グループ展6回、外遊。洋画家

萩原英雄 (はぎわら・ひでお/1913～2007年)
甲府市生れ。1929年耳野卯三郎に師事する。38年東京美術学校西洋画科卒業。高見沢木版社に入社。65年日本版画協会会員。60年東京国際版画ビエンナーレで神奈川県立近代美術館賞。63年リュブリアナ・ビエンナーレでユーゴスラビア科学芸術アカデミー賞等、国際展で受賞多数。79～90年日本版画協会理事長。2007年没、94歳。版画家、洋画家

萩森久朗 (はぎもり・ひさお/1913～没年不詳)
三重県生れ。大阪美術学校卒業。カンサス美大卒業。斎藤与里に師事。元律動美創立会員。二紀賞2回受賞、二紀会同人。他に4回受賞(31)。1954年中之島図書館に作品寄贈。渡仏。尾崎行雄十二景(新潟赴任)図が衆議院憲政記念館に収蔵。洋画家

箱崎睦昌 (はこざき・むつまさ/1946年～)
大分県生れ。1972年京都市立芸術大学専攻科卒業。72、79年シェル美術賞展で佳作賞。82年東京セントラル美術館日本画大賞展で佳作賞。84年日本画研究グループ「横の会」を結成。山種美術館賞展で入選。89年京都市芸術新人賞。90年京都新聞日本画賞展で優秀賞。95年タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞。96年信貴山・王蔵院奉納記念の襖絵展を開催。

「NEXT」で活動。現在、京都嵯峨芸術大教授。日本画家

裕伊之助 (はざま・いのすけ/1895～1977年)

東京生れ。慶應義塾普通部中退。大下藤次郎の日本水彩画会研究所に学ぶ。1921～29年渡仏。26年春陽会会員。31年日本版画協会創立に参加。14、18年二科賞。33年二科会会員。33年再渡仏。アンリ・マティスと親交。36年一水会の創立参加。49～50年東京美術学校助教授。日本美術会の委員長。美術雑誌、総合誌に絵画解説やエッセイを発表。加賀市で没、81歳。86年加賀市に裕伊之助美術館開館。洋画家、美教、版画

狭間二郎 (はざま・じろう/1903～1983年)

宮城県生れ。川端画学校に通う。1930年早稲田大学文学部英文科卒。37年独立展入選。38年林武、40年野口弥太郎に師事。42年独立賞。48年独立美術協会会員。50年仙台独立グループを結成。64年東北独立展開催。31～55年河北美術展記者、のち顧問。神奈川県で没、81歳。洋画家

橋浦泰雄 (はしうら・やすお/1888～1979年)

鳥取県生れ。1920年黒耀会に出品。26年日本プロレタリア芸術連盟が結成、美術部に所属。28年無産者芸術連盟(ナッパ)結成、中央委員。29年日本プロレタリア美術家同盟、中央委委員長。34年以降は柳田国男の影響で民族学調査研究。画家としては個展中心に発表。戦後は日本美術会の設立に尽力、平和美術展に出品。60年ソ共産党の招待で訪ソ。79年鳥取市福祉文化会館で回顧展。東京で没、90歳。洋画家、版画

橋口五葉 (はしぐち・ごよう/1881～1921年)

鹿児島市生れ。1899年上京、橋本雅邦に学ぶ。1905年東京美術学校西洋画を首席で卒。05年「吾輩ハ猫デアル」～「行人」装填。07年東京府勸業博覧会で二等賞。名作の表紙を描く。1911年三越呉服店の美人画ポスター図案募集で1等に当選し、注目を集めるようになる。14年頃から浮世絵論考を『浮世絵誌』などに発表。15年より渡辺庄三郎を版元に浮世絵版画の伝統的技術を用いた木版画を制作。「大正の歌麿」と称され人気を博した。15年新版画運動に参加。18～20年私本版木版、新ロマン派の傾向と写実を表わす。東京で没、41歳。装填作家、浮世絵、浮世絵研究者、新版画、日本画家

橋口竹夫 (はしぐち・たけお/1889～1956年)

宮城県生れ。宮城県師範学校卒。小学校で教職に就く。1911年上京。浅草、本郷の小学校で教職、[中西利雄]らと水彩画の制作。22年蒼原会会員、水彩画の研究。41年[創元会]創立参加。46年戦後の[宮崎美術協会]創立参加。[日本水彩画会]会員。宮崎県で没、67歳。美教、水彩画

橋口康雄 (はしぐち・やすお/1905～1973年)

橋口五葉の長兄(貢)の子。1927年東京美術学校西洋画科卒。上社会展に出品。第8回展展に初入選。32年渡欧、ゴールド・スミス・カレッジで銅版画を学ぶ。スタンレー・アンダーソンに師事。35年帰国。36年昭和十一年文展監査展に出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。第1回日本エッチング展に出品。木版画「温泉宿」は残されていた橋口五葉の下絵を康雄が完成させ、五葉の作品として発表したものと言われている。73年7月26日没、享年67歳。(佐)版画家

橋田庫次 (はしだ・くらじ/1895～1944年)

高知県生れ。本郷研究所に学び、岡田三郎助に師事。1926年帝展に「後庭」を出品し入選、第10回には「秋草」第12回には「木洩日」第14回には「霜月」、文展第3回に「木かげ」に入選した。その他春台美術会にも出品していた。1944年没、50歳。洋画家

端館紫川 (はしだて・しせん/1855～1921年)

伊勢の国生れ。喜多村豊景に学び、川端玉章に師事四条派を修得。伊勢神宮の絵師。1885年フェノロサが主宰する鑑画会大会で四等褒状。95年内国勸業博覧会で褒状。1904年東京女子美術学校教授。07年文展で旧派の画家たちと正派同志会の結成、評議員。09年川端画学校の教授。1921年没、67歳。浮世絵師、日本画家

橋本興家 (はしもと・おきいえ/1899～1993年)

鳥取県生れ。1920年鳥取県師範学校卒。24年東京美術学校図画師範科卒。25～56年東京府立第一高等女学校教師。35年頃から版画制作。38年新文展入選。49年国画会会員。40年日本版画協会会員。文部省教材等調査研究委員。84年日本版画協会理事。日本橋三越、東急で個展。所沢市で没、93歳。版画家、美教

橋本雅邦 (はしもと・がほう/1835～1908年)

江戸生れ。13才のとき狩野勝川院雅信に学び、号は勝園雅邦。1882年内国絵画共進会で銀賞、90年

内国勸業博覧会で一等、東京美術学校教授。98年岡倉天心とともに日本美術院を創立して主幹。狩野派の日本の伝統様式の中に新鮮な洋画風の作風を樹立した。明治画壇の巨匠で近代日本画の祖。1908年没、73歳。 **日本画家、美教**

橋本雅邦 II (はしもと・がほう/1835~1908年)

江戸生れ。父は川越藩御用絵師の橋本晴園養邦(おさくに)。狩野勝川院雅信(ただのぶ)の門に入り、ここで狩野芳崖と知りあう。明治維新後は海軍兵学校に勤めながら、内国絵画共進会やフェノロサの鑑画会などに出品。1889年東京美術学校が開校すると、狩野派の教授として下村観山、横山大観、菱田春草らの指導にあたり、その一方で岡倉天心とともに古文化財の保護にも力を尽くした。98年東京美術学校騒動に際し、天心に殉じて同校を辞職。日本美術院の創立に加わり、初期美術院の中心をなした。芳崖とならぶ狩野派最後の大家として高い評価を受けるが、教育者としての功績も大きい。1908年没、73歳。 **日本画家、美教**

橋本関雪 (はしもと・かんせつ/1883~1945年)

神戸市生れ。関雪は号。1893年四条派の画家片岡公曠に師事。1903年に竹内栖鳳の門に入る。08年上京、文展に入選。以後、文展で受賞を重ね、花形作家として活躍。19年帝展で審査員。34年帝室技芸員、31年帝国美術院会員、32年辞退。卓抜な四条派の写実を基礎に、漢学の素養と中国画の研究から、中国古典に題材を求めた高雅で覇気に満ちた作品を発表。動物画にも情緒豊かな秀作を残した。詩文にも通じており著作も多い。1945年没、62歳。 **日本画家、版画**

橋本邦助 (はしもと・くにすけ/1884~1953年)

栃木県生れ。白馬会研究所に学び、1903年東京美術学校西洋画科選科卒。欧州に二度外遊している。07、08、09年文展で続けて3等賞。その後も官展に出品を続けていたが、近年は振わなかった。32年帝展からは無鑑査。主観的な表現をさげその外面的描写技術は当時としては非常に秀れた作家。東京で没、69歳。 **洋画家、版画**

橋本高昇 (はしもと・こうしょう/1895~1985年)

福島県生れ。高等小学校卒業後上京し、1922年木彫家三木宗策に入門する。25年帝展入選、32年帝展で特選。11年文展招待展出品後、新文展に出品し、18年第6回「大道宣明」などを発表する。また16年正統木彫会展に「心音」を出品し、18年松戸市万満寺

蔵「聖観音」を制作している。53年日展で特選・朝倉賞。54年日展で特選。55年日展依嘱、56年・62年審査員、58年日展会員、64年評議員、70年参与。東京で没、90歳。 **彫刻家**

橋本三郎 (はしもと・さぶろう/1913~1989年)

函館市生れ。1936年上京、本郷絵画研究所に学ぶ。35年春陽会展入選。41年国展で国画褒状。48年国画会会員。49年北海道文化奨励賞。59年赤光社代表。61年函館市民文化賞。85年北海道文化賞。88年道立函館美術館で個展。89年没、75歳。 **洋画家、版画**

橋本静水 (はしもと・せいすい/1876~1943)

東京美術学校中退後、橋本雅邦に師事し、養子となる。第5回文展に《一休》を出品し入選。のち帝展を中心に活躍する。また晩年まで雅邦塾二葉会の幹事として、後進の指導に尽力した。院展同人。東京で没、67歳。 **日本画家、版画**

橋本節哉 (はしもと・せつや/1905~1965年)

京都生れ。橋本関雪、ヨネの嫡子。20年関西美術院で洋画を学ぶ。1921~28年川端画学校終了後渡仏。アカデミー・ランソンに入学、モーリス・ドニに師事し洋画を学ぶ。28年春陽会展に出品。34年春陽会会友。45年父、関雪死去、京都に戻り「白沙村荘」の保存管理。1965年没、60歳。 **洋画家**

橋本太久磨 (はしもと・たくま/1911~2006年)

樺太生れ。日本大学芸術学部で藤田嗣治に師事。兵役に就いた後、1944~47年シベリアに抑留された。戦後は二科展で銀賞を受けるなど画家として活躍した。2006年没、95歳。2014年舞鶴引揚記念館で抑留体験をテーマに描いた絵画「眠りの中に求めたもの」が開催。 **洋画家**

橋本太郎 (はしもと・たろう/1912~1996年)

広島県生れ。大和路の古刹を描いた画家。油彩と墨彩画を描く。元大和郡山ロータリークラブ会員奈良で没。83歳。 **洋画家**

橋本周延 (はしもと・ちかのぶ/1838~1912年)

新潟県生れ。本名は橋本直義で、揚洲と号した。元幕府の御家人。はじめ歌川国芳、のち豊原国周に師事。幅広い領域で活躍しているが、とくに美人画を得意とし、明治風俗画で多くの佳作を残している。1882年絵画共進会に出品し褒状を受けた。 **浮世絵師**

橋本(揚洲)周延 II (はしもと(ようしゅう)・ちかのぶ/1838~1912年)

歌川国芳、三世歌川豊国、ついで豊原国周にまなぶ。美人画にすぐれ、江戸城大奥の風俗画や明治開化期の婦人風俗画などで知られる。直義。別号に揚洲。江戸末期から明治にかけての浮世絵師

橋本朝秀 (はしもと・ちようしゅう/1899~1960年)

福島県生れ。1919年本郷絵画研究所でデッサンを学び、山崎朝雲に師事。25年入選、連続入選、30、31年帝展で特選、32年無鑑査。43年審査員。54年度日本芸術院賞。29年仏蹟及び仏教美術研究のためインドに滞在6ヶ月の遊歴を。31年蒙疆大同石仏研究のため中国へ赴き、帰路満州、朝鮮の仏像を研究。山崎朝雲門下の逸材として頭角をあらわし、日展参、新日展評議員として活躍。仏像に独自の新しい解釈を試みたが、現代において伝統的な刀技法を保持する数少ない木彫家。官展以外に日本美術協会、東邦彫塑院、日本彫塑家倶楽部(昭和31年副委員長)等の各展覧会に発表。東京で没、60歳。彫刻家

橋本徹郎 (はしもと・てつろう/1900~1959年)

兵庫県生れ。関西美術院で洋画を学ぶ。1926~42年二科展に出品、入選し、42年会友。第二紀会の創立に参加、会員。48年から出品。同時に作品は、従来の写実風景から抽象的な構成へと推移し値あ。一方、デザイナー、アートディレクターとして活動も盛んであった。日本宣伝美術会々員リオデジャネイロで没、59歳。洋画家・デザイナー

橋本花 (はしもと・はな/1905~1983年)

青森市生れ。1923年札幌市立北海道高等女学校卒。28年女子美術学校西洋画科高等師範科卒。26年同校在学中に帝展入選。29年橋本八百二と結婚。32年帝展特選。以後も帝展、新文展、日展で受賞を重ねた。33年に佐伯米子や深沢紅子らと女流画家による新美術家団体連盟を結成。36年「七彩会」結成。39年中国を遊歴、北京で個展。50年創元会展に出品、会員。58年日展委嘱。晩年は青森市にアトリエを構え制作。43~77年14回上野松坂屋で個展。青森市で没、78歳。洋画家

橋本博英 (はしもと・ひろひで/1933~2000年)

岐阜市生れ。1958年東京芸術大学美術学部油画科卒。67年1年間仏留学。阿佐ヶ谷美術学園、代々木ゼミナール、東京造形大学などで指導。68年新樹会展に招待出品。74年井上悟、大沼映夫等11名で「黎の会」結成。76年『油絵をシステムで学ぶ』(飯田達夫共著、美術出版社)刊行。79年富山県民会館美術館にて「橋本博英自選展」開催、作品集を刊行。81

年「杜の会」結成に参加。94、97、99年名古屋画廊で個展。97年「橋本博英展」開催(高崎市美術館等)。東京で没、66歳。洋画家、美教

橋本平八 (はしもと・へいはち/1897~1935年)

三重県生れ。1915年三宅正直について彫刻を学ぶ。19年上京、20年佐藤朝山の内弟子となる。22年再興院展に入選、同院研究会員。26年生地の朝熊村に帰郷して制作。27年日本美術院同人、35年帝展無鑑査。作品は厳格な反面、豪放な性格をよく反映している。主要作品『花園に遊ぶ天女』(1930、東京芸術大学)、『達磨』(34、東京国立近代美術館)、『牛』など。1935年没、38歳。彫刻家

橋本邦助 (はしもと・ほうすけくくにくすけ>/1884~1953年)

栃木県生まれ。1900年白馬会研究所に学ぶ。03年東京美術学校西洋画科選科卒。04年セントルイス万博に出品。07年東京府勸業博覧会二等賞。07~09年文展3年連続三等賞。10~11年渡欧。23~24年再渡欧。32~35年帝展無鑑査。37~39、41年新文展無鑑査。東京で没、69歳。洋画家

橋本邦助 II (はしもと・ほうすけ/1884~1953年)

栃木県生れ。1900年栃木県立栃木中学校終了。上京し、白馬会溜池研究所に学ぶ。03年東京美術学校西洋画科選科卒。04年セントルイス万国博覧会に出品。第9回白馬会展に出品。以後13回まで出品。報知新聞社入社。05年千葉県習志野で入隊。後、広島で除隊。和田三造らと美術雑誌「L.S」創刊。07年東京府勸業博覧会で2等賞。第1回文展で3等賞。08年第2回文展で3等賞。09年第3回文展で3等賞。10年~11年渡欧し、アカデミー・ジュリアンで学ぶ。12年光風会展に出品。23年~24年渡仏。38年第2回新文展で無鑑査出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。53年1月7日没、享年69歳。(佐)洋画家

橋本正躬 (はしもと・まさみ/1909~1984年)

東京生れ。京都府立第二中学校卒。パリに留学。1936年東京美術学校油画科卒。39年新文展で入選。63年光風会会員、のち評議員。63年日展で特選。1984年没、75歳。洋画家

橋本勝 (はしもと・まさる/1942年~)

東京生れ。主に社会風刺、政治風刺の題材のコマ漫画。映画に関する作品もあり、イラストつき映画評論でも知られている。チャップリンやガンジーなど歴史上の人物からオバマ大統領など、実在の人物を戯画的に描いている。日本人でも、小泉純一郎や、麻生太郎、鳩山由紀夫などを描いた。フォー・ビギナーズ・シリーズの単行本(現代書館)を多数執筆。本

多勝『貧困なる精神』のイラストを手がけるほか、『週刊金曜日』にもイラストを提供している。日本のイラストレーター、作家、政治評論家、映画評論家。東京都出身。**洋画家、イラストレーター**

橋本明治 (はしもと・めいじ/1904～1991年)

島根県生れ。1929年より帝展に出品、旧制浜田中学卒。31年東京美術学校日本画科卒、松岡映丘に師事。37年新文展で特選。40～50年法隆寺金堂壁画模写に従事。戦後、日展に出品。48年創造美術結成に参加、後に脱退して官展に戻る。51年芸術選奨文部大臣賞。52年日展審査員。55年日本芸術院賞。58年日展評議員。69年日展理事。71年日本芸術院会員。72年日展常務理事。74年文化勲章、文化功労者。1991年没、87歳。**日本画家**

橋本八百二 (はしもと・やおじ/1903～1979年)

岩手県生れ。1921年川端画学校に通う。25年白日会展で白日賞。29年東京美術学校西洋画科本科卒。30、31年帝展で特選。32年東光会創立会員。36年主線美術会創立会員。36年世田谷の自宅に橋本八百二絵画研究所開設。59年渡欧。75年盛岡橋本美術館開館。盛岡市で没、76歳。**洋画家**

橋本裕臣 (はしもと・やすおみ/1942年～2014年)

東京生れ。1970年東京芸術大学彫刻科卒。73年新制作展新作家賞。75年新制作協会会員。80年高村光太郎大賞展佳作賞。78年「テラコッタの技法」を出版。88年ロダン大賞展(美ヶ原美術館)彫刻の森美術館賞。ギャラリーせいほう。大阪フォルム画廊で個展。92年中原悌二郎賞 優秀賞。2000年ケルンドーム建設部研究員としてドイツに留学。2014年没、71歳。**彫刻家**

蓮田修吾郎 (はすだ・しゅうごろう/1915～2010年)

金沢市生れ。石川県立工業学校図案絵画科卒、東京美術学校卒。高村豊周に師事、1959年「野牛とニンフ」で日展文部大臣賞、62年に「森の鳴動」で日本芸術院賞。75年東京芸術大学教授。日本芸術院会員。87年文化功労者、91年文化勲章。96年日展顧問を委嘱。2010年没、94歳。**鍍金家**

長谷川栄作 (はせがわ・えいさく/1890～1944年)

東京生れ。吉田芳明に木彫を学ぶ。芳洲と号し、1914年文展入選。官展を中心に活躍し、梅檀(せんだん)社、東邦彫塑院を結成した。作品に「春よ永劫(えいごう)なれ」「地上に在る誇り」1944年没、55歳。東京出身。**彫刻家**

長谷川塊記 (はせがわ・かいき/1898～1973年)

鳥取県生れ。1920年上京、朝倉文夫に師事。29年東京美術学校彫塑別科修業。24年帝展入選。41年文展無鑑査。東台彫塑展、朝倉塾展、塊人社展に出品。54年日展で特選、55年無鑑査、56年より依嘱、61年審査委員、62年日展会員。日彫会の古参会員として活躍した。東京で没、75歳。**彫刻家**

櫛川公子 (はせがわ・きみこ/1947年～)

松山市生れ。1967年東京手織研究所で臼倉静子に師事。69年愛媛県松山市「グループ MyMy」結成。70年愛媛県展愛媛新聞社賞「草木染つづれ帯」。85年母と子のセーターコンクール最優秀賞。95年シチリアでの文化交流会、藍染絞りタペストリー展出品。多摩クラフト協会所属。**コラージュ、クラフト**

長谷川潔 (はせがわ・きよし/1891～1980年)

横浜市生れ。1913年板目木版画、銅版画を制作。18年渡仏、マニエール・ノワールを復興する。28年春陽会会員。31年日本版画協会創立会員。66年フランス文化勲章。80年京都国立近代美術館で回顧展、パリで没、89歳。(出典 わ眼)**版画家**

長谷川小信・初代 (はせがわ・このぶ・しょだい/1848～1940年)

大阪生れ。初代長谷川貞信の長男。父貞信に絵の手ほどきを受け、父の勧めで歌川芳梅に師事。1867年頃から「初代小信」を、75年から「二代目貞信」を名乗る。役者絵を主とし、京阪神の開花期の風俗や風景画、錦絵新聞を手がけた。木版のほか銅版画の制作。1940年没、92歳。**江戸時代末期から明治時代の浮世絵師**

長谷川小信・二代目 (はせがわ・このぶ・にだいでめ/1859～1886年)

初代長谷川貞信の門人。初代長谷川貞信の次男。二代目長谷川貞信の弟。名は貞吉。14、15歳の頃から父に学び、兄の初代長谷川小信が1875年に二代目長谷川貞信を襲名した後、二代目小信を継いでいる。錦絵、小摺物、絵本などが残されている。1886年没、28歳。**江戸時代末期から明治時代の大阪の浮世絵師**

長谷川栄 (はせがわ・さかえ/生誕年不詳)

東京都出身。1952年東京芸術大学美術学部卒。同音楽学部音楽美学も単位取得。'52年東京国立博物館員となる。同館展示調整室長を経て研究指導室長を歴任。'68年ルーヴル美術館大学フランス政府招聘留学。二科展特選、行動展R氏賞・会員、パリ南国際サロン銀・銅賞、棚橋賞受賞(博物館学)、他多数受賞。パリ・東京個展40回。現在、東京国立博物館名誉館員、品川区O美術館館長、おかざき世界子ども美術博物館館長。2000年フランス政府よりシュヴァリエ「騎士」芸術文化勲章叙勲。国際美術評論家連盟会員。**彫刻家、美術評論家**

長谷川貞信・三代目 (はせがわ・さだのぶ・さんだいめ/1881～1963年)

2代目長谷川貞信の門人で長男。父に浮世絵を学び、1894～95年3代目長谷川小信の落款で作画。31年上方郷土研究会が設立、その機関誌の郷土研究誌『上方』の表紙の大半を父の2代目長谷川貞信とともに担当。40年3代目長谷川貞信を襲名した。歌舞伎や文楽の人物画を得意としており、主に道頓堀各座の番付、役者の似顔絵集の他、立川文庫の口絵などを手掛けている。42年真珠湾攻撃を描いた戦争絵を大阪で出版。1963年没、83歳。大阪の浮世絵師、口絵

長谷川三郎 (はせがわ・さぶろう/1906～1957年)

山口県生れ。1929年東京帝国大学文学部美学美術史科を卒業。29年から32年まで渡米欧。34年新時代洋画展を結成。37年自由美術家協会を結成。日本の抽象美術の旗手として著作。53年渡米、カリフォルニア美術大学、アメリカの東洋文化研究所で講義。サンフランシスコで没、51歳。洋画家、美教

長谷川仁 (はせがわ・じん/1897～1976年)

東京生れ。茨城県笠間町立尋常小学校卒、私立聖学院中学を経、1925年明治学院神学部卒。25年長野県飯田の教会に牧師、26年横浜の海岸教会牧師から東京千住の食堂手伝。28年松村建三郎の助言で洋画商を志し、横浜貿易会館で洋画大展覧を開催。29年洗足幼稚園、30年日本洋画総合展開催。31年「東京画廊」を開廊、32年店名を「日動画廊」と改称。同所で洋画だけの画商として活動、今日の洋画界の先駆となった。個展としては32年草光信成水彩・油絵展、鈴木千久馬展、高間惣七展、33年木下義謙・雅子滞欧作品展、大沢昌助展、34年藤田嗣治の個展、海老原喜之助展を開催。藤田嗣治展は大成功をおさめて注目された。毎年の藤田嗣治、海老原喜之助展、35年猪熊弦一郎展、36年中西利雄展、37年北川民次メキシコ展、38年野田英夫展、佐伯祐三遺作展、40年松本竣介展があり、他に個展を開いて画家としては、岡田謙三、山本鼎、三雲祥之助、児島善三郎、津田正周、熊谷守一、野間仁根、桂ユキ、林倭衛、福沢一郎。作品を扱った重要な画家としては藤島武二。45年三岸節子展を開催、各個展、画廊企画によるグループ展などを開催した。48年国際美術協会を組織しジュネーブ、パリで日本現代美術展を開き、28年藤島武二顕彰会を組織して本郷新作、藤島武二像を東京芸術大学に寄贈。56年日本洋画商協同組合が設立され理事長。64年銀座7丁目に日動本店を開き、太陽展を企画、第1回展を開催、67年若い世代の美術家のために昭和会をおこし昭和会賞を設けた。以後両展とも毎年継続して開催。64年月刊美術雑誌「絵」を創刊。個人画集、美術書の刊行を行う。65年私財を投じて郷里の茨城県笠間市に財団法人笠間美術館を設立。東京銀座のほか、大阪、名古屋、熊本、仙台、米子などに支店を開設、73年パリに進出してフォブール・サントル街にパリ日動を開設。67年藍綬褒賞。68年笠間市名誉市民。76年フランス政府よりコマンドール文化勲章。著書に、『洋画商』

(昭和39年)『へそ人生』(昭和49年、読売新聞社刊)。東京で没、79歳。(引用 東文研)日動画廊創業者、美術商

長谷川青澄 (はせがわ・せいちょう/1916～2004年)

長野県生れ。飯山中学在学中に日本画家菊池契月の兄、細野順耳に日本画の手ほどきを受ける。1933年一家上京のため飯山中学を中退、34年吉村忠夫に入門し大和絵を学ぶ。44年郷里に疎開し、戦後長野県展に出品し、47年には信毎賞、48年には県展賞を受賞。51年に大阪へ転住し、52年美人画家中村貞以に師事、画塾春泥会で研鑽を積む。53年第38回院展に「庭」が初入選、以後毎年院展に入選を続けた。59年院展で奨励賞次点、60年奨励賞、62年日本美術院次賞。69、73、75、77、78、79、81、82年院展で奨励賞。82年日本美術院同人。82年には師中村貞以の逝去により春泥会を引き継ぎ、師の七回忌後は画塾含翠として継承、師より受けついだ大阪での日本美術院の伝統を守り続けた。89年日本美術院評議員。90年内閣総理大臣賞。92年郷里の飯山市公民館において作品展、同年から翌年にかけて日本橋と大阪の三越で回顧展を開催。94年院展で文部大臣賞を受賞。99年東大阪市民美術センターで「長谷川青澄展—その純なる魂の軌跡」が開催されている。大阪で没、87歳。日本画家

長谷川曾一 (はせがわ・そいち/1871～1933年)

静岡県生れ。静岡師範学校卒。その後、上田中学校、神奈川師範学校、久松小学校などの教諭、訓導となり教育に勤める。1904年第3回太平洋画会展に出品、以後、11回まで出品。07年第1回文展に初入選。27年第1回日本水彩画会展に出品、創立会員。33年8月24日没、享年62歳。34年第21回日本水彩画会展に遺作が陳列。(佐)美教、水彩画

長谷川武雄 (はせがわ・たけお/1904～1987年)

新潟県生れ。1924年新潟県師範学校卒、新発田尋常高等小学校教員。富樫基平・寅平に油彩画を学び、26年佐藤哲三・富樫寅平らとグループ「野人社」を結成、野人社展を開催。27年同人文芸誌に木版を出品。30、35年光風会展に油彩画が入選。47～58年紫雲寺小学校校長、北蒲原・新発田図工教育研究会会長、70～76年下越美術会会員。1987年没、83歳。洋画家、版画

長谷川多都子 (はせがわ・たつこ/1904年～没年不詳)

1904年生れ。女子美術学校卒、岡田三郎助に学ぶ。木版画を始めたのは28年頃。29年帝展入選、第11回展、第12回展、第13回展、第15回展に入選。32年日本版画協会入選、会員。昭和初期には小説挿絵も手がけ、32年に麴町絵画研究所の女子部を担当。なお夫は日本版画社を主催した長谷川常生であり、同社が刊行した『続創作版画名作集』に作品を寄せている。37年の末には日本版画協会の会員名簿か

ら削除。この頃には版画制作から遠ざかっていたと推測される。**版画家**

長谷川等伯 (はせがわ・とうはく/1539～1610年)

石川県生れ。30代半ば頃までは信春と号した仏画を中心とした絵師として立身、画ははじめこの養父に学んだ。1571年京都に移住し、本法寺に出入りした。千利休とも交際し、大徳寺と親しい交渉をもった。上洛直後は狩野派の傘下で活動、離脱し、独立した一門を形成。現存作品には牧谿の影響がみられるほか、等伯の言葉が書き留められた『等伯画説』においては等春や養父の宗清を経て自らを雪舟の画系に連ねる意識が窺え、実際60代より作品に「雪舟五代」と款記している。1604年法橋に叙せられ、05年法眼を賜った。1610年徳川家康の招きに応じて江戸に下るも、到着二日目に江戸で客死、71歳。**桃山時代の絵師**

長谷川利行 (はせがわ・としゆき/1891～1940年)

京都生れ。1926年帝展、二科展入選。27年二科展樗牛賞。「一九三〇年協会」展で奨励賞。里見勝蔵、鬘光、麻生三郎、井上長三郎らと交遊。日本的フォーヴィスト。天城画廊で個展。1940年没、49歳。69年上野不忍池に「利行碑」建立。(出典 わ眼) **洋画家**

長谷川利行II (はせがわ・としゆき/1891～1940年)

京都生れ。1919年私家版歌集「長谷川木葦集」刊行。21年上京、矢野文夫と出会う。23年個人雑誌「火岸」第一輯「大火の岸に距りて歌へる」を自費出版。26年第2回「一九三〇年協会」展入選(前田寛治、佐伯祐三、東郷青児、古賀春江、三岸好太郎らの評を得る)、第13回二科展入選。27年第3回「一九三〇年協会」展奨励賞、第14回二科展樗牛賞、里見勝蔵、鬘光、麻生三郎、井上長三郎等と交遊。40年10月12日東京市養有院板橋本院にて胃癌により死去。69年上野不忍池弁天島に木村東介氏により「利行碑」建立、發起人に梅原龍三郎、揮毫は熊谷守一、有島生馬。(出典 わ眼) **洋画家**

長谷川仂 (はせがわ・つとむ/1940年～)

愛知県生れ。1963年愛知学芸大学美術科卒。60年光風会展入選、2002年文部科学大臣賞、常務理事。65年日展入選、78、86年改組日展特選。02年審査員、会員。96年愛知県芸術文化選奨文化賞。**洋画家**

長谷川富三郎 (はせがわ・とみさぶろう/1910～2004年)

姫路市生れ。1929年鳥取県師範学校卒。倉吉市の明倫小学校に勤務。34年倉吉の文化団体「砂丘社」同人になり油絵を描く。民芸運動に参加。柳宗悦、河井寛次郎らに師事。40年棟方志功と交友。棟方のすすめで版画を始める。全国的に活動しながらも終生倉吉を本拠にし、鳥取県の芸術の振興に寄与した。2004年没、94歳。**洋画家、美教、版画**

長谷川昇 (はせがわ・のぼる/1886～1973年)

福島県生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。11～15年渡欧。15年日本美術院洋画部同人。21～22年再渡欧。23年春陽会の創立に同人参加。27年3回目の渡欧、バリエルネイム画廊で個展。28年仏政府買上げ。37年新文展の審査員。日展参事。57年日本芸術院会員。73年没、87歳。**洋画家**

長谷川春子 (はせがわ・はるこ/1895～1967年)

東京生れ。25歳の時、画家を志し日本画を錦木清方、洋画を梅原龍三郎に学ぶ。1929～31年渡仏。国展に出品、雑誌「女人芸術」の表紙やカットを美術部門。37年国画会同人。36年「七彩会」を結成。女流美術家奉公隊委員長。戦後も国画会展に出品。東京で没、72歳。**洋画家、挿絵**

長谷川誠 (はせがわ・まこと/1951年～)

網走市生れ。1978年武蔵野美大日本画学科卒、卒業制作優秀賞、80年同大学院造形研究科終了、修了制作優秀賞。文化庁国内研修員。96、97、99年記念切手原画制作。2001、3年個展(渋谷画廊)。創画会所属、日本美術家連盟会員、武蔵野美術学園や読売日本テレビ文化センター、武蔵野美術学園講師。**日本画家**

長谷川三千春 (はせがわ・みちはる/1910～1971年)

広島県生れ。1934年京都高等工芸学校卒。36年都新聞社入社。37年二科会展入選。54年二科特待。55年一陽会創立に参加、同会会員。64～65年中近東、スペインに旅行。東京で没、60歳。**洋画家**

長谷川陽三 (はせがわ・ようぞう/1931～2006年)

福岡県生れ。1949年飯塚商業学校卒、小学校図画教師、以後89年まで小中学校の美術教師。52年二科展入選し、60年特選、93年内閣総理大臣賞、72年会員、のち理事。62年福岡県美術協会会員。76年福岡県美術協会展で県知事賞。同協会では幹事、理事、理事長を歴任した。2006年没、75歳。**洋画家、美教**

長谷川良雄 (はせがわ・よしお/1884～1942年)

京都府生れ。1906年京都高等工芸学校図案科卒。浅井忠に師事。一時私学校で教鞭を執るが、40年退職。家督相続後は家業の傍ら、07、10、12年関西美術会展、京都市美術展覧会に出品。水彩の風景画を得意とした。病弱で美術団体活動はしていない。1942年没、58歳。**洋画家、水彩画**

長谷川義起 (はせがわ・よしおき/1891-1974年)

富山県生れ。東京美術学校卒。1920年帝展入選。32年から帝展無鑑査。相撲をテーマにした作品を得意とした。戦後は日展審査員。1974年没、82歳。彫刻家

長谷川龍甫 (はせがわ・りゅうほ/1907-1984年)

広島県生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1947年日展に入選。日本美術会に所属。創元会委員。1984年没、77歳。洋画家

長谷川隣二郎 (はせがわ・りんじろう/1904-1988年)

北海道生れ。川端画学校に学ぶ。1931-32年渡仏。32年二科展入選。43年一水会展入選。34、37、39年日動画廊で個展。フォルム画廊、現代画廊等で個展。平明・静謐な画風で知られる。孤高な画家。東京で没、84歳。(出典 わ眼)洋画家

長谷川路可 (はせがわ・ろか/1897-1967年)

東京生れ。東京美術学校日本画科で松岡映丘に学び、1921-27年渡仏。油彩画とフレスコ画を習得。フレスコ画、モザイク画や日本画を描いた。武蔵野美術大学教授。日本美術家連盟理事。イタリアの修道院の壁画制作に携わり、ローマで没、69歳。洋画家、美教、版画

長谷部英一 (はせべ・えいいち/1895-1927年)

東京生れ。慶應義塾普通部中退、父の故郷福島県白河に戻る。中村彝と知り合う。1915年文展入選。この頃、父の実家のある白河に滞在し、実業家伊藤隆三郎の援助を受け、制作活動。東京に出て、中村彝のアトリエ近くの落合に住む。17年白河ハリストス正教会で洗礼を受ける。24年「髑髏のある静物」を制作。1927年没、32歳。97年白河市歴史民俗資料館で長谷部英一展。洋画家

長谷部日出男 (はせべ・ひでお/1932年～)

東京生れ。1955年東京芸術大学日本画科卒。同年新日展入選(以後23回入選)。68年日春展特選、白寿賞。84年日展特選。86年日展委嘱。91年日展審査委員。92年日展会員。96年日展審査員。97年日展会員賞。日展評議員。日本画家

畠山錦成 (はたけやま・きんせい/1897-1995年)

金沢市生れ。1921年東京美術学校日本画科卒。結城素明に師事する。帝展で入選を重ね、28、29年帝展で特選。後無鑑査出品。36年文展招待展に出

品。37-44年東京女子美術専門学校の講師。54年まで10年間、金沢美術工芸専門学校教授。60年新日展で審査員、日展日本画家として活躍。1995年没、98歳。日本画家、美教

畠山孝一 (はたけやま・こういち/1933年～)

岩手県生れ。交通事故で重傷を負い、絵描きになる。1975年新制作展に入選。行木正義に師事。猪熊弦一郎の知遇を得る。40年間三陸の海景を中心に描いた。陸前高田市立博物館、陸前高田市広田町の三陸館、花巻市の萬鉄五郎記念美術館、森の美術館に作品収蔵。2018年流山市の森の美術館で個展。洋画家

畠山三朗 (はたけやま・さぶろう/1903-1933年)

1921年上京、画家を志し、岡田三郎助に師事。29年サイパン、マリアナ諸島、パラオ諸島を創作の地に選り制作。網羅的な調査にもとづく展覧会が近年開かれた。「美術家たちの『南洋群島』」展、町田市立国際版画美術館、2008年4月-6月、同展覧会は後に高知県、沖縄県を巡回)。畠山孝一の叔父。洋画家、版画

畠山三朗 II (はたけやま・さぶろう/1903-1933年)

岩手県生れ。1922年頃上京、衆議院議長の書生をしながら岡田三郎助に師事。28年第5回白日会展に出品。春台展に出品。29年この年から3年間、小笠原を皮切りに南陽諸島を放浪、途中熱病に倒れながらも帰国後、東京にアトリエを建てて間もなく死の宣告を受ける。31年第8回白日会展に出品、以後、10回展にも出品。33年没、享年30、31歳。(佐)洋画家、版画

畠山哲雄 (はたけやま・てつお/1926-1999年)

夕張市生れ。夕張で炭鉱夫として働く傍ら、画家として夕張の自然を描いた。日本のエネルギー資源が急速に石炭から石油へと変わり、炭鉱が次々と閉山していく中、畠山はあえてこの町に残り、薄れゆく炭鉱の町の面影を描きつづけました。1999年没、73歳。洋画家

畑 正吉 (はた・しょうきち/1882-1966年) ※

富山県生れ。1906年東京美術学校彫刻科卒、07年から農商務省海外練習生として滞欧留学3ケ年。帰国の11年文展入選し、第7回文展では「某人肖像」で褒状をうけ、帝展の初期までは毎回入選。13年東京美術学校教授、奉職したが、20年文部省から1カ年の欧米留学を許された。帰国後の22-41年東京高等工芸学校教授に転任。造幣局、賞勲局の嘱託となり、45年辞任するまで多くの記念メダル彫刻の製作にたずさわった。それらのうちでも殊に薄肉彫の長

技を存分に発揮し、佳作も多い、終始官展に作品を発表し、31年には帝国美術院の推薦となった。日本彫刻家連盟、能美会会員を経て、戦後は日本彫塑会会員として、同展及び日展に随意出品していた。特に晩年は能彫刻に力を注ぎ、53、55年能彫個展開催。彫刻団体、能彫会の有力な会員でもあった。学校教授時代の門下生に、寺畑助之丞、本郷新ら現在著名作家が多い。東京で没、84歳。 **我国彫刻界の耆宿、彫刻家、美教**

畠中光享 (はたなか・こうきょう/1947年～)

奈良県生れ。1970年大谷大学文学部史学科卒。京都市立芸術大学専攻科修了。71～81年パニリアル展(パニリアル美術協会)出品。73年山種美術館賞展に出品。77年シェル美術賞。78年東京セントラル美術館日本画大賞展大賞。2006年現在、無所属、京都造形芸術大学教授。 **日本画家、版画**

畑中 優 (はたなか・まさる/1950年～)

岐阜県生れ。新潟大学美術科卒、東京芸術大学大学院修了。1982年行動美術協会展/新人賞、/安田火災財団奨励賞、86年/行動美術賞、会員、98年行動美術協会展出品/文化庁買上。94年銀座大賞展/大賞、95年海の大賞展/銅賞、(97年大賞)、96年多摩秀作美術展/大賞、07年小磯良平大賞展/優秀賞。 **洋画家**

秦 テルオ (はた・てるお/1887～1945年)

広島市生れ。1904年京都市立美術工芸学校図案科卒。09年丙午画会展に出品。10年黒猫会を結成。15年東京日比谷美術館で個展。22年京都商業会議所で個展。京都商業会議所階上で個展。37年秦テルオ後援画会が結成。大阪そごう百貨店で個展。45年没、58歳。 **日本画家**

秦森康屯 (はたもり・こうとん/1923～1994年)

広島県生れ。1949年画家を志して上京、54年独立美術協会展入選、54年大阪に移り、56年関西独立賞第1席、及び25周年記念賞。58年「鉄鶏会結成、実験的な作品発表。59年西宮市長賞第1席。抽象～具象～展示、厚塗り筆致による独特の画風。1994年没、71歳。98年三原市で秦森康屯遺作展。2003年西宮大谷美術館で個展開催。 **洋画家**

働 正 (はたらき・ただし/1934～1996年)

熊本県生れ。1960年代前半、前衛美術家集団「九州派」にて活躍。65年より、大牟田市にて谷口利夫の「西部美術学園」児童美術教育を引き継ぐ。主な著書に『小さなポケット』『海にねむる龍』などがある。1996年没、62歳。 **美術家、九州派、美術教育**

八條弥吉 (はちじょう・やきち/1876～1937年)

大阪生れ。1895年山内愚遷に師事、洋画を学ぶ。1900年東京美術学校西洋画科卒、研究科に進む。10年文展で三等賞。22～23年中沢弘光、山本森之

助らと渡仏。25年上京して房総の漁村に住み制作。36年文部省美術展覧会に無鑑査出品。37年没、61歳。 **洋画家**

八條弥吉 II (はちじょう・やきち/1876～1937年)

大阪生れ。1894年頃、山内愚遷に師事。98年赤坂溜池の生巧館でフランス語を学ぶ。99年第4回白馬会展、同5、12回展に出品。1901年東京美術学校西洋画科選科卒、引き続き同校研究科に残り、コラン先生の「編物の図」の模写を命じられる。04年大阪毎日新聞の特派員として日露戦争に従軍。06年日露戦捷記念博覧会で褒状。10年第4回文展で三等賞。12年第1回光風会展に出品。22年～23年渡仏。24年大阪市美術協会第1回展に出品。25年上京。この頃から千葉県勝浦市大澤周辺に住み、波の研究に没頭していた。28年第9回帝展に出品。36年昭和十一年文展招待展に無鑑査出品。37年第1回新文展に無鑑査出品。以後2回展まで出品。同年11月4日千葉市で没、享年61、62歳。(佐) **洋画家**

蜂須賀国明 (はちすか・くにあき/1835～1888年)

三代目歌川豊国の門人で初代歌川国明の弟。本姓は平沢、俗称は斧二郎。一鳳齋、鳳齋と号す。後に蜂須賀家の養子となる。はじめは本所千歳町、後に横網町二丁目に住んだ。1847年から三代目豊国の門に入る。作画期は嘉永頃から没年までにかけて役者絵、相撲絵、風俗画を描いている。万延、文久ごろ製作の横浜絵は初代国明の作と区別がつき難い。明治になると蜂須賀国明と称して西南戦争の錦絵などを残している。1888年没、54歳。 **江戸時代末期から明治時代の浮世絵師**

服部喜三 (はっとり・きぞう/1993～1978年)

大阪生れ。1910年関西美術院で鹿子木孟郎に師事。13、16、17文展入選。19、26、30年帝展に入選。36年関西日仏学館で美術部の指導に当たる。アカデミー鹿子木下鴨家塾で後進を指導。43年京都市展で受賞。57年京都洋画協会理事長。68年渡欧。78年没、85歳。 **洋画家、美教**

服部賢司 (はっとり・けんじ/1945年～)

鳥取県生れ。1965年現代美術研究所で学ぶ。一貫したモノトーンによるミニマル的色彩表現。68年の3人展(村松画廊)、76年の「APPROACH 76展」(渋谷西武ギャラリー)、79年「今日の作家展」(帝国ホテルギャラリー・サンアルテ)、82年「発想展」(藤沢市民ギャラリー)、88年「現代作家10人展」(ギャラリー・ムーブ)個展。 **洋画家**

服部正一郎 (はっとり・しょういちろう/1907～1995年)

茨城生れ。龍ヶ崎中学校卒。1929年日本美術学校修了。安井曾太郎に師事。29年二科展入選。35年二科展特待。41年二科会会員。戦後は評議員、常務理事。67年二科展で日本芸術院賞。87年日本芸術院会員。取手市で没、87歳。 **洋画家**

服部不二彦 (はっとり・ふじひこ/1897～1929年)

東京生れ。1921年東京美術学校西洋画科卒。2
2、25年帝展入選。1929年没、32歳。洋画家

服部亮英 (はっとり・りょうえい/1887～1955年)

三重県生れ。1914年東京美術学校西洋画科卒。1
6～24年東京日々新聞社、東京朝日新聞社等に漫
画家として勤務。25年帝展入選。27年渡欧、サロン・
ドートンヌ入選。28年光風会会員。28～29年渡欧。
36年文展無鑑査。36～39年北京美術学校校長。東
京で没、68歳。洋画家、美教、漫画

服部和三郎 (はっとり・わさぶろう/1930年～)

兵庫県生れ。1950年内田巖、竹谷富士雄、藤田嗣
治に師事。55年新制作展 新作家賞。63年新制作
協会賞。64年会員推挙。82年日本画廊協会賞展奨
励賞。97年東京国際美術館にて服部和三郎自作展。
洋画家

初山 滋 (はつやま・しげる/1897～1973年)

東京生れ。1907年染物屋に奉公、狩野探令に師
事、染物下絵で才能。1910年日本橋・三越の新柄募
集で一等。1911年日本画家井川洗崖に師事、風俗
画を描く。27年日本童画家協会を結成。童話雑誌
『おとぎの世界』創刊より挿絵を描く。木版画の制作を
始め、日本版画協会展に出品。46年日本童画家会創
立。44年日本版画協会賞。1967年版画絵本『もず』
が国際アンデルセン賞・国内賞。東京で没、75歳。
童画、版画、装填

花井抱甕 (はなひ・ほうよう/1879～1928年)

三重県生れ。1898年京都市立美術工芸学校絵画
科卒。菊池芳文、竹内栖鳳に師事。1901年栖鳳門
下による水曜会に参加。09年豊島停雲、川畑春翠と
鼎画会を結成。10年平井樸仙、松宮芳年らと桜花会
を結成。16年文展に入選。20年帝展に入選。1928
年没、49歳。日本画家

花崎宏志 (はなさき・ひろし/1936年～)

大分県生れ。中津南高校で版画家・武田由平に学
ぶ。大分大学学芸学部卒業後、県内で美術教員として
教鞭をとりながら、1960年より大分県美術展、中津美
術協会展に作品を発表。65年より白日会展、日本版画
協会展に出品を始め、69年日本版画会新人賞、白日
会六光社賞。75白日会会員、78年日本版画協会会
員。98年日本版画会第40回記念展で文部大臣奨励
賞、99年より日本版画会審査員、運営にも尽力。版
画家、美教

花田一男 (はなだ・かずお/1904～1992年)

福岡県生れ。十二歳のときに直方に移り、直方を故
郷として育つ。1939年に上京し、芸術院会員の「平
櫛田中」氏に師事。39年院展入選。日彫受賞3回。日
展会員。、世間に広く知られる実力派の彫刻家として
名をはせました。藍綬褒章受章。1992年没、88歳。
彫刻家

Hannelone Baron (ハノロール・バロン/1926～1987年)

ドイツ生まれ。ナチスの迫害を受け1938年ニュー
ヨークに移住。1960年頃から水彩、スケッチ、版画を制
作。書き溜めた作品が明らかとなり注目される。ニュー
ヨーク近代美術館、サンフランシスコ近代美術館、
グッゲンハイム美術館、イスラエル博物館に収蔵。洋
画家

バーナード・リーチ (ばーなード・リーチ/1887～1979年)

香港生れ。21歳の時、ロンドン美術学校で高村光太
郎と交友。1909年に再来日。東京上野でエッチン
グ教室を開き、柳宗悦や「白樺」同人達との交流。11
年六代尾形乾山に入門。富本憲吉と陶芸の道を歩む。
17年我孫子の柳宗悦邸内に窯を築き、濱田庄司と出
会う。20年イギリスに帰国。濱田とコーンウォール州
に登り窯を築く。帰国後も何度も来日。多くの展覧会
に共同出品。スリップ・ウェアの焼成、硫化鉛の釉薬、
ガレナ釉を使う伝統を生かす。デッサン力に優れ、陶
器に絵付け。1979年没、92歳。陶芸家

英 一蝶 (はなぶさ・いちちょう/1652～1724年)

京都の人。英派の祖。初名は多賀朝湖。幕府の怒り
に触れて三宅島に流され、赦免後、英一蝶と改名。
初め狩野派の門に入ったが、のち風俗画に転じ、軽
妙洒脱な画風を確立。また、松尾芭蕉に師事し、俳諧
にも長じた。江戸前・中期の画家

花巻 碧 (はなまき・みどり/1947年～)

東京生れ。早稲田大学卒。浮田克躬氏に師事。サ
ロン・ドートンヌ会員、ル・サロン会員、日展会友。ミニ
チュア大賞展優賞、外遊。洋画家

埴 賢三 (はなわ・けんぞう/1916～1986年)

茨城県生れ。1949年二科展で岡田賞。50年二科
展で三十五周年記念賞。62年二科会会員。58～60
年渡米、渡欧、NYで個展。63年安井賞展出品。サー
カスやピエロ童画的夢ある画風。70年サロン・ドー
トンヌ特別招待出品。78年サロン・ドートンヌ会員。7
8年二科会常務理事。東京で没、70歳。洋画家

埴原久和代 (はにわら・くわよ/1879～1936年)

山梨県生れ。兄は元駐米大使埴原正直。1908年
女子美術学校西洋画科卒。太平洋画会の中村不折

に師事。12、13年ヒュウザン会展(のちフェウザン会)に出品。14～29年二科展、23年円鳥会などに参加。19年「朱葉会」の創立に参加。23年女性初の二科会友。31年甲斐美術協会(のち、山梨美術協会)を結成。36年没、57、58歳。洋画家

羽田 裕 (はねだ・ひろし/1939年～)

神奈川県生れ。1963年東京芸術大学卒、同大学大学院修了(～'74年勤務)。69年十騎会結成(以後毎年出品)春陽展研究賞。72年ユネスコ・ローマセンターの招請研究員として給費留学。80年高島屋で個展「イタリーの歴史と風土」・個展(東京・横浜・大阪・岐阜・岡山高島屋、山形屋、泰明画廊等)。89年郷土ゆかりの芸術家シリーズⅣ 羽田裕展(横須賀市主催)。洋画家

馬場 彬 (ばば・あきら/1932～2000年)

東京生れ。1955年東京芸術大学美術学部洋画科卒。56年サトウ画廊で個展。60年読売アンデパンダン展出品。60年神奈川県立近代美術館で開催、シェル美術賞展出品し3席、62年1席。60年集団αを結成。67年日本国際美術展出品。74年サンパウロで「コスモス《セリグラフによるイメージの実験》展」、77年モスクワ国際美術展出品。80年横浜市民ギャラリー「馬場彬展」を開催。84～86年ケルンに滞在。東京のMギャラリーで個展を開催して滞欧作を発表。88年池田20世紀美術館「馬場彬の世界展」。秋田市で没、67歳。洋画家

馬場 章 (ばば・あきら/1952年～)

北九州市生れ。1976年東京芸術大学大学院版画専攻修了。78年日動版画グランプリ展・賞候補。80年個展(コバヤシ画廊・銀座、83、85、86、88、91、94、96、99、2002年も)。83年ビエラ国際版画展(イタリア)。86年ブラッドフォード国際版画展(マンズクラブ版画賞(英))。90年個展「馬場章の銅版画展」(北九州市立美術館)。福岡市立美術館で個展「馬場章版画展」。2000年クラコフ国際版画トリエンナーレ(ポーランド)。版画家

馬場 栲男 (ばば・かしお/1927～1994年)

東京生れ。春陽会研究所で油画を学ぶ。63年春陽会展で研究賞。65年日本版画協会展で協会賞。66、71年国際ミニチュール展で受賞。67年日本版画協会会員のち理事。69年春陽会版画部門会員。82年東京造形大学教授。横浜市で没、66歳。版画家、美教

波々 伯部金洲 (ははかべ・きんしゅう/1862～1930年)

福井生れ。絵画を学んだ後、砂目描画石版の画家として活躍。明治から大正にかけて、三間印刷の画工として、三越呉服店の美人画ポスターを多数手がける。1930年没、68歳。石版画家

羽場金司 (はば・きんじ/1886～1916年)

弘前市生れ。旧制弘前中学校卒業後、1909年東京美術学校に入学。そこで藤島武二に学ぶ。13年卒業。弘前に帰り病魔と戦いながら絵を描き続ける。1916年没、29歳。洋画家

浜口 勇一 (はまぐち・ゆういち/1909～1985年)

1909年生れ。68年一水会展で奨励賞。一水会会員。熊野美術協会展に浜口勇一賞が設けられた。和歌山県美術連盟で活躍。1985年没、76歳。洋画家

浜口 陽三 (はまぐち・ようぞう/1909～2000年)

和歌山県生れ。1927年東京美術学校塑像科入学、30年中退、渡仏。途中2年間NYに滞在。39年までパリで油彩画と銅版画制作。53年再び渡仏、55年頃よりカラー・メゾチント制作。57年東京国際版画ビエンナーレで東京国立近代美術館賞。同年サンパウロ・ビエンナーレで日本人初の大賞。その後もリュブリアナ、クラコフの国際版画展ビエンナーレで受賞。世界の代表的銅版画作家の一人。96年に帰国。2000年没、91歳。版画家

濱田 観 (はまだ・かん/1898～1985年)

兵庫県生れ。神戸で大谷玉翠に学ぶ。1929年竹内栖鳳に入門。33年京都市立絵画専門学校入学、41年同研究科を修了。33年帝展入選。36年栖鳳門下で葱青社を結成。47、49年日展で特選。63年新日展で文部大臣賞。65年日本芸術院賞。戦後は日展を中心に活動した。自然を丁寧に観察した優しい色調の花鳥画を得意とした。74年京都府美術工芸功労者、75年京都市文化功労者、84年日本芸術院会員。1985年没、87歳。日本画家

浜田 九一郎 (はまだ・きゅういちろう/1909～1993年)

長崎県生れ。地元の師範学校を経て東京美術学校 図画師範科に学び、卒業後は旧満州国の新京(長春)で教職に就くが、戦時中、大分師範学校に赴任。戦後も大分大学の教壇に立ち、数多くの美術教師を育て上げた。この間、再興された県美術協会には発足時から参画し、のち同協会長も務めるなどして県内の美術振興に力を尽くした。1993年没、84歳。洋画家、美教

浜田 浄 (はまだ・きよし/1937年～)

高知県生れ。1961年多摩美術大学油画科卒。おおくぼ画廊、シロタ画廊、ユマニテ等で個展。77年マイアミ国際版画展ビエンナーレ買上げ賞。78年クラコフ国立美術館賞。81年日本現代美術館展で東京国立近代美術館賞。81年西武美術館版画大賞展で優秀賞。

版画家

浜田 清 (はまだ・きよし/1919～1995年)

高知県生れ。大阪工芸高等美術専門学校卒。新世紀美術協会委員。創造常任委員。大阪で没、76歳。

洋画家

浜田 清 (はまだ・きよし/1946年～)

1946年生れ。千葉大学教育学部美術科卒業。一陽会に出品。その後、北山泰斗に師事。「第25回一陽展」で一陽展賞、第26回展で安田火災美術財団奨励賞、第31回展で野間賞を受賞。「日仏現代美術展」、「日伯現代美術展」等のコンクール展で受賞。「第25回安井賞展」に初出品以降、入選6回。代表作は一連の『遠い日』シリーズ。千葉県在住。現在、一陽会運営委員、千葉県美術会常任理事、日本美術家連盟会員。**洋画家**

浜田三郎 (はまだ・さぶろう/1892～1973年)

函館市生れ。1918年東京美術学校彫刻科本科彫塑部卒。26年帝展入選。27年彫刻団体構造社会員。戦後、日展に出品、64年日展菊華賞、65年審査員、66年日展会員。44年より神奈川県湘南中学、50年より茅ヶ崎高校で教えた。代表作に「少女と猫」「ジャズ」「仮面」「藤村詩碑」。1973年没、80歳。**彫刻家、美術、版画**

濱田葆光 (はまだ・しげみつ/1886～1947年)

高知市生れ。1902年上京、審美学舎や不同舎に学ぶ。06年太平洋画会研究所に学ぶ。16年二科展で樗牛賞。奈良県に移住。18年二科会会友。21～23年渡仏。29年大阪美術研究所設立。32年二科会員。奈良風景、鹿を描いた。全関西洋画協会特別会員。奈良市で没、61歳。**洋画家、美術**

濱田昇児 (はまだ・しょうじ/1927年～)

大阪市生れ。父は日本画壇の重鎮、濱田観。父に日本画の基礎を学び、後に小野竹喬に私淑。1945年京都市立美術専門学校日本画科に進学、独立美術研究所にも通い須田国太郎にデッサンを学ぶ。49年京都市立美術専門学校卒業、研究科に進む。50年油絵が独立展入選、以後連続入選。52年の独立展から日本画一本。師・竹喬の影響もあって風景画一筋の道を歩む。65年日展で特選、白寿賞。**日本画家**

浜田庄司 (はまだ・しょうじ/1894～1978年)

神奈川県生れ。バーナード＝リーチに師事し、英国で研究。帰国後は益子焼の向上発展に尽力し、質朴で力強い作風を展開。また、柳宗悦らと民芸運動を推進した。文化勲章。**陶芸家、水彩、版画**

浜田 信 (はまだ・しん/1915～1973年)

大阪市生れ。1946年帝国美術学校本科西洋画科卒。50年二紀展で佳作賞。51年二紀会同人。57年二紀会会員。62年渡欧、チェコ文化省招待、個展開催。サロン・ドートンヌ出品、64年ル・サロンで銀賞、無鑑査。東京で没、58歳。**洋画家**

浜田台児 (はまだ・たいじ/1916～2010年)

鳥取県生れ。伊東深水、橋本明治に師事する。日展に出品を重ねる。鮮明な色彩による人物・花鳥画を得意とする。1975年日展文部大臣賞、80年日本芸術院賞。89年日本芸術院会員。日展顧問。画集に『浜田台児画集』(邦画会、1961年)がある。**日本画家**

浜田泰介 (はまだ・たいすけ/1932年～)

愛媛県生れ。1955年京都市立美術大学卒。関西総合展賞。57年大学院修了。58～61年連続4回、朝日新人展、毎日ペストリー展に選抜。61年からニューヨークなど海外や国内各地で個展開催。77年津南市文化特別賞。99年世界遺産・醍醐寺の壁画。2000年密教学芸賞。2011年伏見稲荷大社の障壁画完成(2011年)。**日本画家**

浜田知明 (はまだ・ちめい/1917年～)

熊本県生れ。1939年東京美術学校油画卒。51～54年「初年兵哀歌」シリーズが注目。56年ルガノ国際版画ビエンナーレで受賞。64～65年、渡欧。79年熊本県立美術館個展。オーストリア・アルベルティーナ国立美術館、グラーツ州立美術館で個展。80年神奈川県立近代美術館個展。89年仏政府芸術文化勲章(シュヴァリエ章)。93年大英博物館・日本館個展。96年小田急美術館、富山県立近代美術館、下関市立美術館、伊丹市立美術館で個展。**版画家、彫刻**

浜田浜雄 (はまだ・はまお/1915～1994年)

山形県生れ。画家になることを決意して上京、帝国美術学校入学。1936、37年二科展入選。シュルレアリスム(超現実主義)作品制作。主に詩人の瀧口修造を通してこの思想に触れ、表現に取り入れた。38年同人グループ「絵画」を結成、展覧会開催。画家サルバドール・ダリを髣髴とさせる。53年にはデザイナーや写真家と「グラフィック集団」を結成し、広告デザインなどで非常にクリエイティブな仕事に関わる。1994年没、79歳。2006年米沢市上杉博物館で回顧展開催。**洋画家**

浜田善秀 (はまだ・よしひで/1908～1975年)

愛媛県生れ。京都絵画専門学校卒。元独立美術協会会員。元美術文化協会会員。大阪で没、66歳。**洋画家**

浜地青松 (はまち・せいまつ、せいしょう/1885～1947年)
和歌山県生れ。1901年渡米、ボストン市美術学校卒、NY、パリで活動、20年帰国。19年新宮洋画研究所を開設。25～27年渡米欧、パリのサロンに2回入選。28年帝展で特選。29年帝展無鑑査。第一美術協会の結成に参加、会員、理事。その後新文展に出品。45年没、59歳。洋画家

浜地青松 II (はまち・せいしょう/1886～1947年)
和歌山県生れ。古座高等小学校卒。1901年渡米、サンノゼ・ハイスクールを経てボストン美術学校卒。20年帰国。25年再渡米、翌年フランスに渡り、サロン・ナショナルなどに出品。27年帰国。28年第9回帝展で特選。以後官展に出品を続け無鑑査となる。29年第一美術協会設立に参加し出品を続ける。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。44年戦時特別展に出品。47年和歌山県で没、享年61歳。(佐)洋画家

浜 哲雄 (はま・てつお/1887～1939年)
福岡市生れ。1915年東京美術学校予備科卒。17年渡米、コロンビア大学で美学美術史を専攻。のちに南米やヨーロッパを渡り、絵画の研鑽を積む。31年帰国。画壇的にはほとんど無名であったが、修猷館時代の児島善三郎をはじめとして画家志望の後輩たちに影響を与えた。青木繁の遺作展を開催。作家今東光との交流。アメリカでの竹久夢二との交流。「肉弾三勇士」を描いた画家。1939年没、52歳。洋画家、美教

浜西勝則 (はまし・かつのり/1949年～)
北海道生れ。1973年東海大学教養学部芸術学科卒。82年グレンヘン国際色彩版画トリエンナーレ・最高賞。83年カボ・フリオ国際版画ビエンナーレ・大賞(ブラジル)。87年中華民国国際版画ビエンナーレ・金賞。文化庁芸術家在外研修員(アメリカ・ペンシルバニア大学院)。89年カナダ交換芸術家として訪加。97年個展(ブラッドリー大学美術館・アメリカ)。98年個展(ジャパンインフォメーションセンター・シカゴ)。2001年CWAJ 現代版画展(東京アメリカンクラブ・神谷町)。版画家

浜 征彦 (はま・まさひこ/1938～2018年)
長野県生れ。1958年東京YMCAの夜学部で学ぶ。1968年渡仏。70年二科展50周年記念賞。71年二科展特選。銀座薔薇画廊にスカウトされ、薔薇画廊専属。72年二科展パリ賞、副賞として5年間のパリ留学の権利を与えられる。74年薔薇画廊で浜征彦・パリの詩と心展開催。76年留学中、フランス・サロン・ドー

トヌ賞。78年二科会会友。90年二科会会友賞、二科会長野県支部長就任。長野で没、80歳。洋画家

浜松小源太 (はままつ・こげんた/1911～1943年)
秋田県生れ。秋田師範学校卒業後教諭。上京。新造形美術協会展、エコール・ド・東京展、創紀美術協会展、独立美術協会展、美術文化協会展と昭和の前衛美術運動の中に身を置いた。1943年軍属としてビルマに渡り、当地で没、32歳。洋画家

濱谷次郎 (はまや・じろう/1912～1982年)
函館市生れ。函館中学卒業後、1937年帝国美術学校卒、主婦の友社のカメラマンとして勤務しながら39年から美術文化協会に出品。30年桐田頼三らと彩人社を結成し、東京から作品を出品。33年独立展入選。33年北海道独立美術作家協会の創立に参加。帝国美術学校のグループ展「JAN」に参加。1982年没、70歳。洋画家

早川幾忠 (はやかわ・いくただ/1897～1983年)
東京生れ。「アララギ」の島木赤彦らの指導を受け、歌壇にデビュー。1914年松倉米吉らと「行路詩社」を結成、28年「高嶺」を創刊し主宰。48年「高嶺」を二宮冬鳥にゆずる。50年京都に移った。短歌と同時に絵、書、篆刻もよくした。錦心流琵琶も免許皆伝で、多才な文人として知られた。国語問題協議理事。1983年没、86歳。歌人、画、書、篆刻

早川巍一郎 (はやかわ・ぎいちろう/1905～1978年)
鳥取県生れ。1929年東京美術学校彫刻科卒。藤川勇造に師事。25年二科展入選、以後同展に出品を続け、28年樽牛賞、32年二科会友。35年同会を退いて第三部会展に出品。41年新制作派協会会員。53～76年多摩美術大学教授、78年名誉教授。66～72年文部省大学設置審議会専門委員。1978年没、73歳。彫刻家、美教

早川義孝 (はやかわ・ぎこう/1936～2012年)
東京生れ。1954、55年日本学生油絵コンクールで文部大臣賞を受賞。武蔵野美術大学中退。62年新槐樹社展で内閣総理大臣賞、文部大臣賞、栄誉賞を受賞。新槐樹社名誉会長。2012年没、76歳。柏市ゆかりの作家。(出典 わ眼)洋画家

早川国彦 (はやかわ・くにひこ/1897～1967年)
岐阜県生れ。太平洋画会研究所に学び中村不折に師事。20年日本水彩画会会員。26年太平洋画会会員。32年岐阜洋画研究所設立。42年二科賞、二科会会員。中部水彩協会、岐阜水彩画会を設立。岐阜大学、中京女子短期大学、京都家政大学の教授を歴任。67年没、70歳。水彩画家、美教

早川重章 (はやかわ・しげあき/1924年～)
山梨県生れ。日本美術学校卒。1955～61年自由

美術協会会員。68年渡米ロスアンゼルスで10年間作家活動。帰国後は個展を積極的に開催。美術館や画廊が主催するテーマ展、グループ展への出品多い。一貫して抽象表現主義を追求。2004年神奈川県立近代美術館で個展開催。洋画家

早川朝洋 (はやかわ・ちょうよう/1886～1960年)

福岡県生れ。詳細不明 山崎朝雲に師事、木彫が多い、帝国美術院美術展に4回は出品。福岡県立美術館で福岡ゆかりの物故彫刻展で紹介展示、寄託作品。1960年没、74歳。彫刻家

早川二三郎 (はやかわ・ふみお/1934年～)

東京生れ。山梨市に疎開、在住。山梨大学学芸学部第一教育科美術専攻卒。在学中、桑原絵画研究所に通う。1955東光展入選。56年日展入選。卒業の年、東光会会友、翌年会員。以後東光展、日展、山梨美術協会展で発表。グループ展にも出品。2010年県文化功労者賞。洋画家、美教

早川ミキ (はやかわ・みき/1904～1953年)

北海道生れ。1911年渡米。カリフォルニア美術専門学校、美術工芸学校に学ぶ。29年サンフランシスコ芸術協会のグループ展に出品。サンフランシスコ美術協会展、ロスアンゼルス・カウンティ美術館で金門橋国際博覧会等に出品。53年没、49歳。洋画家

早川芳彦 (はやかわ・よしひこ/1899～1973年)

山梨県生れ。太平洋美術学校で洋画を、野田九浦に日本画を学ぶ。1934年太平洋画展入選、38年M.Y.K 賞、41年会友、43年会員。53～65年多々羅義雄らと光陽会を創設。戦後、日展委員。67年新興美術院に日本画を発表した。生前は練馬区石神井台にアトリエを構えた。東京で没、74歳。洋画家、日本画

林 功 (はやし・いさお/1946～2000年)

千葉県生れ。1969年東京藝術大学美術学部日本画科卒。第54回院展入選。71年院友、91年特待。71年東京藝術大学大学院保存修復技術専攻修了。*重要文化財・羅漢図(芸大蔵)を模写した卒業制作が大学買上げ。72年シェル美術賞展で1等賞。1974年、個展(彩壺堂分室、東京)。75年文化庁模写事業で国宝・天台高僧像(一乗寺)を模写。*以後、文化庁の国宝模写事業に携わる。77、80年個展(東京セントラル絵画館)。81年山種美術館賞展で優秀賞。84年横の会結成に参加。90年両洋の眼展。愛知県立芸術大学美術学部日本画講師、94年助教授。91年院展で奨励賞。2000年愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。2000年没、54歳。日本画家

林紀一郎 (はやし・きいちろう/1930～2016年)

鹿児島県生れ。1953年上智大学文学部英文科卒。1957～60年なびす画廊にて個展を開催。58年～60年モダンアート展に出品。60年代から美術評論、雑誌等に幅広く寄稿。85～95年新潟市美術館長。2009年まで同美術館顧問。92～2005年池田20世紀美術館館長を務め、在任中52回にのぼる企画展を開催した。2016年没、86歳。洋画家、評論家、美術館長

林香代子 (はやし・かよこ/1912～1981年)

神戸市生れ。神戸高等学校卒。三軌会評議員。1981年没、69歳。洋画家

林喜市郎 (はやし・きいちろう/1919～1999年)

千葉県生れ。1946年シベリア抑留。50年帰国、全国各地の民家を訪ね歩き制作。68年画商、寺西進三郎に見いださる。70年全国勤労者美術展都知事賞。75年日伯現代美術展入選、ブラジル展選抜。78、80年松坂屋名古屋本店、松坂屋大阪店、84年松坂屋上野店、97年松坂屋名古屋本店で個展。81年そごう東京・柏・千葉・札幌店個展他個展。大日本絵画より「信濃路春秋」「上州の民家」出版。86年池袋・東武百貨店にて個展。91年東急渋谷本店にて個展。1999年没、80歳。洋画家

林 敬二 (はやし・けいじ/1933年～)

横浜市生れ。1960年東京藝術大学油絵専攻科修了。61年独立美術協会賞。62年独立美術協会会員。64年渡伊(イタリア政府奨学留学生)ローマ美術学校に学ぶ。90年池田20世紀美術館で個展。96年安田火災東郷青児美術館大賞展大賞。2008年日本橋の他各地の高島屋で個展。女子美術大学顧問。洋画家

林 健司 (はやし・けんじ/1939～1995年)

1939年生れ。国際現代美術家協会会員。盛岡市で没、55歳。洋画家

林 皓幹 (はやし・こうかん/1894～1923年)

岡山市生れ。1910年岡山県立岡山中学校3年終了、11年卒業を待たずに上京。大日本絵画講習会日本画科、日本美術院日本画科を経て、1920年東京美術学校卒。日本画科教官であった松岡映丘の目指した新興大和絵が皓幹に大きな影響を与えた。卒業制作は高い評価を受ける。東京府立第五中学校の教師。1922年平和記念東京博覧会に出品。当時の近代日本画は大きな変革期を迎えており、皓幹も独自の芸術を確立しようと模索していたと思われる。岡山市で没、30歳。日本画家、美教

林 江子 (はやし・こうこ/1945～1980年)

岐阜県生れ。1967年女子美術大学洋画科卒。70～76年女流画家協会展に出品。76年花椿賞、同会会員。71～79年国展に出品。75年国画会賞。76年国画会会員。79年フマガギャラリーで個展。80年没、35歳。洋画家

林幸四郎 (はやし・こうしろう/1910～1990年)

長野県生れ。1930年に長野県師範学校本科を、31年に専攻科(図工)を卒業後、本郷洋画研究所でデッサンと油絵を学び、40年東京高等師範学校研究科(図画)卒。日本水彩画会会員。エッチング制作。春陽会会友。日本美術家連盟会員。信州美術会評議員。1990年没、80歳。美教、洋画、水彩画、版画

林貞子 (はやし・さだこ/1915～1973年)

兵庫県生れ。1955年一水会会員。女流作家協会会員。1973年没、58歳。洋画家

林重義 (はやし・しげよし/1896～1944年)

神戸市生れ。1916年京都市立絵画専門学校中退。関西美術院に学ぶ。23年二科展入選。26年二科賞。29年二科会会友。28～30年渡仏。30～37年独立美術協会創立会員。37年資生堂画廊で個展。38年文展無鑑査。42年国画会会員。44年没、47歳。洋画家、版画

林倭衛 (はやし・しづえ/1895～1945年)

長野県生れ。日本水彩画研究所に学ぶ。1917年二科展で樗牛賞。18年二科賞。20年二科会会友。21～26年渡欧。26年春陽会会員。30年有島生馬の知遇を得る。36年国画会に出品。37年改組文展審査員、42委員。年埼玉県で没、49歳。(出典 わ眼) 洋画家、水彩画

林倭衛 II (はやし・しづえ/1895～1945年)

長野県生れ。1911年日本水彩画会研究所夜間部に入る。13年サンカリズム研究会に参加。16年第3回二科展に初入選。17年第4回二科展で樗牛賞。18年第5回二科展で二科賞。19年第6回二科展に「出獄の日の〇氏」など出品し、撤退命令が出る。20年第1回黒猫会に出品。21年二科会友。渡仏。26年帰国。春陽会会員。27年春陽展に滞欧作が特別展示。28年再渡欧。29年帰国。34年春陽会脱退。日動画廊で個展。35年帝展松田改組後無鑑査指定。36年第11回国展に招待出品。帝展第二部新人展審査員。37年第1回新文展に出品、同展審査員。39年日動画廊で個展。41年にも同画廊で個展。45年1月26日没、享年49、50歳。(佐) 洋画家、水彩画

林十江 (はやし・じっこう/1778～1813年)

水戸生れ。水戸の酒造業升屋高野惣兵衛の子、のち伯父の林家の養子となった。名は長羽、通称を長

次郎、号は十江。画歴は不明ながら自由奔放で飄逸な水墨画の遺品が多い。立原杏所の最初の師として知られる。主要作品『うなぎ図』『木葉天狗図』。1813年没、35歳。江戸時代後期の南画家

林静一 (はやし・せいいち/1945年～)

満州生れ。中野区立第九中学校卒。デザインスクールへ進学。1962年東映動画に入社、テレビアニメ『狼少年ケン』(63年)などを担当。アニメ制作会社・ナック(現・ICHI)の設立に参加。日本テレビの番組『すばらしい世界旅行』のアニメーション部門担当。67年漫画雑誌『ガロ』に漫画処女作『アグマと息子と食えない魂』を発表。87年ポンピドゥー・センターにて開催の『前衛の日本: 実験映画展望 1955 - 1977』に、アニメーション作品を出品。94年横浜美術館での「戦後日本の前衛美術」にて、アニメーション作品『かげ』を上映。ヴェネツィア国際映画祭銅賞、クリオ映画祭特別賞、電通賞。ロッテのキャンディー『小梅』のキャラクター「小梅ちゃん」のイラストレーション。画家、実写映画の監督、アニメーション作家日本アニメーション協会会員。国際アニメーションフィルム協会会員。日本イラストレーション協会会員。ACFA 会員。アニメーター、漫画家、画家、イラストレーター

林素菊 (はやし・そぎく/1920年～)

東京生れ。水墨画家の相田黄平・森川翠水に師事。日中水墨画交流展台北市議長賞受賞。民国75年中華民国文化推展日本代表。日中水墨画交流展会員。1985年現水春秋展毎回受賞、特別記念賞、現水展賞。文部大臣賞杯。現代水墨画協会参与。NHK 水墨画講師。墨登会主宰。日本画家・現代水墨画家

林孝彦 (はやし・たかひこ/1961年～)

岐阜県生れ。1985年武蔵野美術大学油絵科卒、87年東京芸術大学大学院美術専攻科修了。2001年「韓日中現代版画展」韓国、ギャラリー東京ユマニテ、東京('04, '07, '08年)。03年「クラコフ・トリエンナーレ・国際版画交流展—日本・ポーランド」。04年 The Club at The Claremont、バークレー(アメリカ) Azuma Gallery、シアトル(アメリカ)。版画家

林武 (はやし・たけし/1896～1975年)

東京生れ。早稲田実業学校中退。日本美術学校中退。1921年二科展で樗牛賞。22年二科賞。26年「一九三〇年協会」会員。30年独立美術協会創立会員。34～35年渡欧。北荘画廊、百貨店で個展。52～63年東京芸術大学教授。59年日本芸術院賞。67年文化勲章。東京で没、78歳。洋画家、美教

林竹治郎 (はやし・たけじろう/1871～1941年)

宮城県生れ。仙台師範学校入学。1892年東京美術学校特別課程卒。98年北海道師範学校教諭、札幌第一中学校(現北海道札幌南高等学校)の教諭28年間。一中の退職後は藤高等女学校で14年間教えた。1905年第一回文部省美術展に「朝の祈り」が入選。ハンセン病患者のために生涯を尽くした医師林文雄の父。日本基督教会札幌北一条教会の長老として、新島善直や長崎次郎らと共に教会を支えた。1941年没、70歳。洋画家、美教

林竹治郎 II (はやし・たけじろう/1871～1941年)

宮城県生れ。1886年宮城県志津川高等小学校卒。92年東京美術学校特別の課程修了、宮城県尋常高等小学校嘱託。95年岡山県尋常師範学校助教諭。98年北海道師範学校教諭。1900年札幌中学校教諭(後の一中)07年第1回文展に初入選。18年「北海道開道50年記念博覧会」で銀牌19年この頃から古平禅源寺五百羅漢像を手掛ける。25年北海道美術協会結成創立会員。以後14回展まで出品を続ける。32年中学校図画教員会長。39年北海道水彩画会第1回展に出品。40年朝鮮、沖繩旅行。41年3月15日没、享年69歳。(佐)洋画家、美教

林田重正 (はやしだ・しげまさ/1918～1997年)

長崎県生れ。1942年美術工藝学院純粋美術科卒。42年紀伊国屋画廊個展。47年自由美術家協会会員。68年文芸春秋画廊で個展。企業の社内誌、美術部で指導。東京で没、78歳。洋画家

林唯一 (はやし・ただいち/1895～1972年)

香川県生れ。関西商工卒。松原三五郎に洋画を学ぶ。大正末から少女雑誌、「婦人世界」に挿絵、新聞小説でも活躍。代表作に牧逸馬「この太陽」、吉屋信子「女の友情」。1972年没、77歳。著作「爆下に描く」、画集「郷土の風俗」。挿絵画家、版画

林忠正 (はやし・ただまさ/1853～1906年)

富山県高岡市生れ。大学南行(東京大学の前身)に学ぶ。1878年起立工商会社社員として渡仏、パリ万博の仕事に携わる。84年パリに美術商を開業、浮世絵など日本・東洋美術品を扱う。パリを中心にゴッフルや印象派の画家たちと広く交友、当時盛行したジャポニスムに、日本美術紹介者として重要な役割を果たした。1900年パリ万博参加に際し臨時博覧会事務官長となる。02年商店を閉じ、03年にかけて売り立てを行く。06年帰国。東京で没。52歳。2019年国立西洋美術館で「林忠正—ジャポニスムを支えたパリの

美術商」が開催。国賊と一時期噂されたが復活した。
明治期の美術商

林鶴雄 (はやし・つるお/1907～1990年)

兵庫県生れ。兵庫県立龍野中学校卒。1936年上京、藤田嗣治の知遇。36～39年二科展に出品。安井曾太郎に師事し、39年から一水会に出品。41年新文展で特選。46年一水会会員。57年一水会会員優賞。63～83年渡仏、マルセイユ、パリで個展。東京で没、82歳。洋画家

林鶴雄 II (はやし・つるお/1907～1990年)

兵庫県生れ。兵庫県立龍野中学校卒。1935年第5回独立展に出品。36年上京、第23回二科展に出品、以後、25回まで出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。41年第4回新文展で特選。46年一水会会員。57年第19回一水会展で会員優賞。63年一水会退会し、渡欧。83年帰国。以後、無所属、個展中心に活躍。90年2月24日没、享年82歳。(佐)洋画家

林俊行 (はやし・としゆき/1906～1988年)

大分県生れ。1957年春陽会展で春陽会賞。59年春陽会会員。1988年没、82歳。洋画家

林朝路 (はやし・ともじ/1939年～)

京都府生れ。祖父は林玉嶺(南画家)、父は林富太郎(新槐樹社委員・洋画家)。1957年京展に出品、64年「ロバの会」に学ぶ、76年新自然協会創立会員、84年アメリカ、コルテスファインアートギャラリーにて個展開催、90年以降全国各地にて百貨店、画廊での個展開催。フランス在住。洋画家

林是 (はやし・なおし/1906～1974年)

東京生れ。1932年東京美術学校彫刻科本科塑造部卒。33年日本美術院賞、院友。美校塑造部在学中の27年から一年先輩の同窓ら8名で彫刻グループ「沈爾留」を結成、毎年グループ展を開催。37年日本美術院を退き、日本彫刻家協会の創立に参加、会員。46年二科会彫刻部の会員、48年二科会退会。50年行動美術協会創立会員。彫刻部の基礎づくりと発展に尽力した。東京で没、68歳。彫刻家

林明善 (はやし・めいぜん/1899～1938年)

名古屋生れ。智山大学卒。川端画学校洋画科、同舟舎洋画研究所に学ぶ。片多徳郎に師事。1926・27年白日会展入選。27年帝展入選。以後、帝展、文展監査展出品。28年国画会展、30年聖徳太子奉賛美術展出品。29年第一美術協会出品、32年無鑑査、

33年会員。36年日本版画協会展出品。1938年没、39歳。洋画家、版画

林 洋子 (はやし・ようこ/1965年～)

京都府生れ。1989年東京大学文学部美術史学科卒、91年同大学院修士課程修了、東京都現代美術館学芸員。パリ第1大学博士課程修了、博士号取得。2001年京都造形芸術大学助教授、07年准教授。15年国際日本文化研究センター客員准教授。08年『藤田嗣治―作品をひらく』でサントリー学芸賞、09年渋沢クロード賞、ルイ・ヴィトンジャパン特別賞、日本比較文学会賞。著書、『藤田嗣治 作品をひらく 旅・手仕事・日本』(名古屋大学出版会、2008年)、『藤田嗣治 手しごとの家』(集英社新書ヴィジュアル版、2009年)、『藤田嗣治 本のしごと』(集英社新書ヴィジュアル版、2011年)、『藤田嗣治 手紙の森へ』(集英社新書ヴィジュアル版、2018年)日本の美術史学者。文化庁 芸術文化調査官。専門は近現代。美術史家、美術評論、美教

林 義雄 (はやし・よしお/1905～2010年)

東京生れ。グラフィック・デザイナーの福田繁雄は、義理の息子(娘の夫)。画家の福田美蘭は孫。1924年中央美術展に入選。蔦谷龍岬に日本画を学ぶ。61年に武井武雄、黒崎義らとともに日本童画家協会を設立。日本美術著作権連合の理事。2010年没、105歳。童画家

林林之助 (はやし・りんのすけ/1917～2008年)

日本時代に日本画を台湾に広めた台湾人画家林林之助が台中にいた。膠彩画の父と呼ばれ台中に記念館が残っている。第二次世界大戦後、林之助進入臺中師範學校(今國立臺中教育大學)任教、並編纂美術。2008年没、91歳。台湾画家、日本画家、美教

早瀬龍江 (はやせ・たつえ/1905～1991年)

北海道生れ。28年女子英学塾(津田塾大学英文科)卒。川端画学校、36年独立美術研究所で学ぶ。37年福沢一郎の研究所でシュルレアリスム絵画を知る。39年美術文化協会に参加。40年美術文化賞。48年美術文化協会会員。49年白木絵画研究所で指導。58～59年渡米。91年没、86歳。洋画家

早出守雄 (はやで・もりお/1918～1971年)

長野県生れ。生涯を通して郷里の岡谷市に住み、画家と教師、農業の生活。長野県展審査員、信州美術会諏訪支部長をつとめ長野県下の美術界に尽力しました。現在、長野県展に「早出賞」としてその功績が顕彰されている。1998年ギャラリー82で個展。水彩画家

速水御舟 (はやみ・ぎよしゅう/1894～1935年)

東京生れ。松本楓湖に師事し、巽画会、紅児会で活躍、のち今村紫紅らと赤曜会を組織して新日本画運動を志向した。再興院展に出品し、1917年同人。30年ローマの日本美術展のため渡欧、その後花鳥画を多く制作。大和絵や文人画の影響を受けた後、宗元風の花鳥画形式の中に深い静寂に満ちた世界を構築しようとした。昭和期の美術品で最初の重要文化財に認定された。格調高い名品を残した。1935年没、40歳。日本画家

原 右門 (はら・うもん/1932～1989年)

長野県生れ。1955年日本大学芸術学部美術科卒。70年 展を創立。1989年没、57歳。洋画家

原 勝四郎 (はら・かつしろう/1886～1964年)

和歌山県生れ。東京美術学校予備科入学、本科に進学するが中退。1914年白馬会溜池研究所に学ぶ。17～21年渡仏。21年二科展入選。40年二科展で特待、岡田賞。41年会友。53年二紀展で同人努力賞。59年同人優賞。63年田辺市図書館で個展。和歌山県で没、78歳。洋画家、版画

原 勝郎 (はら・かつろう/1889～1966年)

千葉県大網白里町生れ。葵橋洋画研究所に学ぶ。1918年ハワイに渡り、20年渡米、22年渡欧。24年以降帰国する。39年までサロン・ドートンヌ展に出品。42年日動画廊で個展。49年新樹会会員。50年木内克と北荘画廊で二人展。東京で没、77歳。(出典 わ眼)洋画家

原口典之 (はらぐち・のりゆき/1946～2020年)

神奈川県生れ。1970年日本大学芸術学部美術学科卒。1977年、ドイツ・カッセルの美術展「ドクメンタ6」に初めて日本人作家として選ばれ、出展した作品「オイルプール」(廃油を満たした巨大な鉄のプール)は「美術界に衝撃を与えた」と評される。作品「オイルプール」は、展覧会終了後はイランのテヘラン現代美術館に展示。続いてパリ市立近代美術館でも「第10回パリ青年ビエンナーレ」に参加し、1978年デュッセルドルフで個展。2001年ミュンヘンのレンバッハハウスにおける個展「NORIYUKI HARAGUCHI」、07年ハンブルグのクストハーレにおけるマレーヴィチへのオマージュ展「Das Schwarze Quadrat. Hommage en Malewitsch」など、大規模な個展で海外での評価が高い。09年横浜のBankART1929のStudio NYKで国内では初となる新作を含む大規模な回顧展「Noriyuki Haraguchi: Society and Matter (原口典之 社会と物質)」を開催。2020年没、74歳。現代美術家、もの派

原 在中 (はら・ざいちゅう/1750～1837年)

京都生れ。石田幽汀、のち円山応挙にまなんだ。明画、土佐派などを研究し、原派をおこした。有職(ゆうそく)にくわしく、寛政の内裏造営のとき応挙らと障壁画をえがく。作品に相国(しょうこく)寺の「補陀落図」など。1837年没、88歳。江戸時代中期-後期の画家

原 三溪 (はら・さんけい/1868～1939年)

岐阜県生れ。本名・富太郎。東京専門学校(現・早稲田大学)で政治と法律を学ぶ。生糸業を営む横浜の実業家、原善三郎の孫娘・屋寿と結婚し、家業の発展に努めた。25歳ころから美術品の購入を始め、生涯で5000点強のコレクションを築く。国宝・重要文化財は31点。自宅のある横浜・本牧の「三溪園」には芸術家らが集い、古建築を移築した庭園は市民に無料開放した。現代作家養成のため再興日本美術院の画家達を援助した。1939年没、72歳。コレクター、茶人、書画、パトロン

原 精一 (はら・せいいち/1908～1986年)

神奈川県生れ。1923年萬鉄五郎に師事。川端画学校に学ぶ。24年円鳥会展入選。25年春陽会展入選。36年春陽会賞。41年従軍画家。岡田賞、春陽会会員。47年読売美術賞。48年国画会会員。57～58年渡欧。75年女子美術大学教授。82年神奈川県立近代美術館回顧展。東京で没、78歳。洋画家、美教

原 大介 (はら・だいすけ/1948年～)

神戸市生れ。1972年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。1990年原の山アトリエ(絵画教室)を神戸の自宅、アトリエに開設。個展開催、椿近代画廊、みゆき画廊、ギャラリーゴトウ、ギャラリーしらみず等、ギャラリー及美、2003年原大介作品展(中国、廣州美術學院記念館)、グループ展多数。洋画家

原田 治 (はらだ・おさむ/1946～2016年)

東京生れ。川端実(実)に師事。1969年多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。70年『an・an』の創刊号でイラストレーターとしての活動を開始。75年“オサムグッズ”を開発、オリジナルのスタイルを確立。79年ペーター佐藤、安西水丸、新谷雅弘等とパレットクラブを結成。97年築地にパレットクラブ・スクールを設立。2016年没、70歳。イラストレーター

原田和周 (はらだ・かずひろ・わしゅう/1895～1936年)

静岡県生れ。1914年日本美術院洋画部の研究員、数回院展出品、17年同院々友。この頃原田恭平と称す。22年以降春陽会展第1回より毎回出品し、聚文と号したが、33年和周に改めた。1936年没、42歳。36年度春陽会展に油絵10点が陳列され、更に同年7月銀座日動画廊で遺作展開催。洋画家

原田恭平 (はらだ・きょうへい・原田和周 (はらだ・かずひろ/1895～1936年)

静岡県生れ。1914年日本美術院洋画部の研究員、数回院展出品、17年同院々友。この頃原田恭平と称す。22年以降春陽会展第1回より毎回出品し、聚文と号したが、33年和周に改めた。1936年没、42歳。36年度春陽会展に油絵10点が陳列され、更に同年7月銀座日動画廊で遺作展開催。2016年、我孫子市白樺文学館で原田恭平展。21年10月我孫子の島田久兵衛別荘に移住し、23年3月からは志賀直哉邸の留守居役として居住。絵画を山本鼎、短歌を窪田空穂に師事。日本美術院洋画部、春陽会に所属。洋画家、歌人

原 在中 (はら・ざいちゅう/1750～1837年)

京都生れ。石田幽汀、のち円山応挙にまなんだ。明画、土佐派などを研究し、原派をおこした。有職(ゆうそく)にくわしく、寛政の内裏造営のとき応挙らと障壁画をえがく。作品に相国(しょうこく)寺の「補陀落図」など。1837年没、88歳。江戸時代中期～後期の画家

原田新八郎 (はらだ・しんぱちろう/1916～1989年)

福岡県生れ。1939年東京美術学校彫刻科本課卒。38年新文展入選。構造社にも参加して斎藤素巖に師事。42年東京府立青年学校教諭。56、57年日展で特選、60年新日展で菊華賞、63年日展会員。53年福岡教育大学講師、62年同大助教授、71年同大教授。76年福岡教育大学附属中学校校長。80年私立近畿大学で教鞭。85年福岡市文化賞。ブロンズ像を得意とし、労働にいそしむ人の姿など、人生に真摯に向かう人体像を多く制作した。福岡市で没、72歳。彫刻家

原田武夫 (はらだ・たけお/1907～1974年)

岐阜県生れ。1943年春陽会展で春陽会賞。53年春陽会会員。1974年没、67歳。洋画家

原 健 (はら・たけし/1942年～)

名古屋市生れ。1969年東京芸術大学大学院修了、72年東京国際版画ビエンナーレ・受賞。75～76年文化庁芸術家在外研修員として英国・米国に留学。鮮やかな色彩で、リトグラフのグラデーション技法を駆使した作品。71年パリ・ビエンナーレ展はじめ、各国際展で活躍する。96年世田谷美術10周年記念美術展。版画家

原田虎猪 (はらだ・とらい/1902～1937年)

長野県生れ。1926年東京美術学校卒、第7回帝展に初入選、以後、8、9回展連続入選。37年没、享年35歳。(佐)洋画家

2年没、56歳。洋画家、美教

原田直次郎 (はらだ・なおじろう/1863～1899年)

東京生れ。1870年大阪開成学校に入学。81年東京外国語学校卒。83年天絵学舎に入門し高橋源吉らに学ぶ。84年渡独、ミュンヘン美術アカデミーに入学。兄の友人ガブリエル・フォン・マックスのアトリエで学ぶ。86年森鷗外を識る。87年フランス国立美術学校に入学。帰国。89年鐘美館を開設。明治美術会創立に参加。同第1回展に出品。同会評議員となる。90年第3回国勧業博覧会で妙技三等賞。95年第4回国勧業博覧会で妙技三等賞。99年12月26日没、享年36歳。(佐)洋画家、美教

原田直康 (はらだ・なおやす/1903～1973年)

岡山県生れ。1928年東京美術学校西洋画科卒。太平洋画会展に出品。37年二科会展に出品。38年戦前は前衛的団体、九室会の結成に参加。独特な色調に特徴。53年二科会展で特待。63年二科会会員。板橋区立美術館収蔵。1973年没、70歳。洋画家

原田 宏 (はらだ・ひろし/1942年～)

埼玉県生れ。1966年武蔵野美術大学実技専修科卒(山口長男に師事)。69年渡仏、パリに住む。71年オパベ画廊の依頼により版画制作。79年モンマルトルにアトリエ。89年ジャック・バレーール画廊(パリ)、ゼン画廊(ブリュッセル)で個展。2003年カラセッタ現代美術館(サルジニア島)で個展。06年マリノ・マリーノ美術館(伊)“6人の日本人アーティスト”展に出品。洋画家

原田文明 (はらだ・ぶんめい/1951年～)

山口県生れ。1970年山口県立岩国工業高校卒。1980年代前半「行為と物と場所」を意識した空間造形と既成の具象・抽象概念とは異なる「具体絵画」の世界を探求。「アートムーヴ2003記号岩国」表現の成り立ち「アートドキュメント2004錦帯橋プロジェクト」「キッズパワープロジェクト2005大人のことも・子どもの大人」「フォーラム2006(岩国)ジャン・サスポータス&齊藤徹 DUO パフォーマンス」「アートムーヴ2007(岩国)具象の未来へ」「マドモアゼル・シネマ2007旅するダンス不思議な場所」を開催。ドロー、インスタ

原田 勝 (はらだ・まさる/1936～1992年)

甲府市生れ。日本大学芸術学部美術学科中退、国画会研究所に入り、多摩美術大学卒業後、美術教師として県内の中学校や高等学校勤務。制作を続ける。1963年に独立展に入選。85年病に倒れ、病との葛藤のなか自由の利かなくなった手で描き続ける。199

原田和周 (はらだ・かずひろ/1895～1936年)

静岡県生れ。1914年日本美術院洋画部の研究員、数回院展出品、17年同院々友。この頃原田恭平と称す。22年以降春陽会展第1回より毎回出品し、聚文と号したが、33年和周に改めた。1936年没、42歳。36年度春陽会展に油絵10点が陳列され、更に同年7月銀座日動画廊で遺作展開催。洋画家

原田 睦 (はらだ・むつ/1897～1984年)

青森県生れ。1917年女子美術学校(現女子美術大学)卒。異画会に出品し、松岡映丘から賞賛を受ける。24歳で洋画家の原田恭平と結婚。山本鼎に師事し油彩画を学ぶ。国画会会員。女流画家協会会員。1984年没、87歳。洋画家

原南嶺斎 (はら・なんれいさい/1771～1836年)

明和8年生まれ。諱は治堅。別号に南嶺、南嶺堂などがある。河村若芝系の画人で河村姓を名乗ったこともある。唐絵の師は山本若麟あたりだと思われる。自ら畵画師と称していたほど油彩画も得意とした。天保7年、66歳で死去した。江戸絵師、長崎派

原 弘 (はら・ひろむ/1903～1986年)

長野県生れ。1921年東京府立工芸学校卒。24年村山知義らの三科公募展に出品。25年「Die Neue Typographie」を翻訳自费出版。バウハウスやロシア構成主義に興味を抱き、グラフィック・デザインにおけるエレメントの構成を日本に紹介して日本のモダン・デザインを主導。30年花王石鹼新製品パッケージ図案指名コンペで採用。33年写真家名取洋之助が設立した日本工房に参加。37年パリ万博、39年ニューヨーク万博の写真大壁画を担当。41年東方社に参加し、宣伝雑誌「FRONT」の図案、構成に従事。48年武蔵野美術大学で教鞭。日本宣伝美術会中央委員、日本デザインセンター取締役。東京オリンピックのグラフィック計画に参加、ライブチヒ書籍美術賞、53年『世界の現代建築』の装幀で文部大臣装幀美術賞。東京で没、82歳。デザイナー、デザイン

原 撫松 (はら・ぶしょう/1866～1912年)

岡山市生れ。1881年京都府画学校に入学、小山三造、田村宗立に師事。肖像画を研究。84年京都府画学校を首席卒。86年独学で肖像画家を目指す。1904～07年肖像画研究のため、渡英、ロンドンのナショナル・ギャラリー等でレンブラント等模写、07年渡米後帰国。東京で没、47歳。洋画家

家、美教

原 鵬雲 (はら・ほううん/1835～1879年)

徳島県生れ。通称は市助、のちに介一、字は子竜。藩の銃卒で徳島富田に住む。守住貫魚について住吉派を学んだ。1861年幕府が欧州へ修好使臣を派遣するにあたり随行して、英、仏、和、独、葡などを歴遊。63年帰国。74年より広島師範学校の図画教師。1879年没、45歳。日本画家、美教

腹巻丹生 (はらまき・こう/1877～1951年)

佐賀県生れ。1903年東京美術学校日本画科首席卒。佐賀高等女学校教諭、熊本県鹿本中学、佐賀龍谷中学、成美女学校、有田工業学校の教諭を歴任した。29年神埼高等女学校教諭を最後に退職。晩年は千歳村の自宅「七合庵」の画室で制作に専念した。教え子に古賀忠雄。1951年没、74歳。日本画家、美教

原 誠 (はら・まこと/1929～2012年)

福岡県生れ。新制高校傳習館在学中は、多賀谷伊徳を訪ねる。第9回美術文化協会展(福沢一郎・北脇昇らで結成)出品入選。以降二科・自由美術・アンデパンダン等に発表。河原温らと「黄色人種」展を開催。瀧口修造推選でタケミヤ画廊個展。82年「時間のけんきゅう」の挿絵でサンケイ児童出版文化賞。文芸誌の表紙絵やカットをひきうけた。2012年没、83歳。洋画家、挿絵

原 雅彦 (はら・まさゆき/1956年～)

大阪生れ。1979年多摩美術大学卒。個展(飯田画廊)同'80'81'82'84'87'90'93。82年安井賞候補展入選 同'85。83年個展(大阪梅田大丸)。86年個展(心齋橋大丸)'96。94年現代油彩画の写実展出品。95年洋画の展望展出品(福井県立美術館)、個展(飯田美術)。97年 T.I.A.F '97 出品、個展(飯田美術)。洋画家

原 光子 (はら・みつこ/1931～2002年)

東京生れ。都立南多摩高校を経て1954年女子美術大学芸術学部洋画科卒。55～2001年女流画家協会展に出品し、58年会員、プールヴー賞、努力賞、甲斐仁代賞、73年委員。54～2001年独立展出品、72年独立賞、73年会員。54年女子美術大学芸術学部助手、60年年女子美術大学芸術学部専任講師、75年助教授、84年教授、97年名誉教授。65年女子美術大学海外研修旅行として世界各国に取材旅行。84年国際形象展招待出品。95年「原光子—風の方向—」展(たましん歴史・美術館) 個展開催、96年小山敬三美術賞。88年紺綬褒章。東京で没、70歳。洋画

原 安佑 (はら・やすすけ/1917～1982年)

岡山県生れ。1936年二科展に入選。このころより内田巖に師事。38年新制作派協会展に入選。1940年多摩帝国美術学校に図案科卒、卒業制作が杉浦非水賞。46年松戸市に住む、新制作展入選。元新制作協会会員。日本美術会会員。64年渡欧取材旅行。1982年没、64歳。洋画家

原 安佑 II (はら・やすたけ/1917～1982年)

倉敷市生れ。1940年多摩帝国美術学校図案科卒。杉浦非水に学ぶ。卒業制作が非水賞。57年頃から岩の絵を描く。64年訪欧、70～74年毎年渡欧。69年グアム、サイパン、パラオ取材。1982年没、64歳。洋画家

針生 鎮郎 (はりう・しずお/1931～1998年)

東京生れ。1957年東京藝術大学油画科卒。58年独立美術協会賞、59年独立優秀賞、会員。60年グループ新表現出品。安井賞展、秀作美術展に出品。90年池田20世紀美術館で個展。1998年没、67歳。洋画家

張替 正次 (はりかえ・しょうじ/1914～2003年)

東京生れ。鳥海青児に師事。1940年太平洋美術研究所に学ぶ。47年国展に入選。49年林武、小林和作、須田国太郎に指導を受ける。47年新興美術展、読売アンデパンダン展に出品。新しき村美術展会員。47年国展入選、59年国画会委員、64年国画会賞、66年会員。80、2002年紺綬褒章。2003年没、88歳。洋画家、水彩、版画

張替 真宏 (はりかえ・まさひろ/1933年～)

東京生れ。1957年東京芸術大学油画科卒、61年専攻科修了。59、66年新制作展で新制作賞。64～65年仏政府給費留学、パリ国立美術学校。73年新制作協会会員。93年東京国際美術館で個展。2001年パルテノン多摩で回顧展。洋画家

針生 一郎 (はりゅう・いちろう/1925～2010年)

仙台市生れ。1948年東北大学文学部卒。49年東京大学美学科特別研究生54年修了。48年花田清輝、野間宏らの「夜の会」、安部公房らの「世紀の会」、雑誌『世代』の同人。50年岡本太郎らの「アヴァンギャルド芸術研究会」に参加。52年美学会創立に参加、学会誌『美学』の編集。53年新日本文学会へ入会。『新日本文学』の編集委員、議長。53年『美術批評』

誌執筆が、現代美術評論家出発。69年刊行「大衆のなかから形なき前衛」。67年ヴェネツィア・ビエンナーレ、77、79年サンパウロ・ビエンナーレのコミッショナー。アジア・アフリカ作家会議の委員。67年ヨーゼフ・ボイスとの交流は「運動としての芸術」への思いを強くした。70年代半ばからは「前衛」の理念の崩壊とともに、個々の作家の仕事を同時代人に正確にうけとらせる作家論に力をそそぎ（引用「自筆年譜『機關』17号針生一郎特集より）、今井俊満、岡本太郎、香月泰男、桂ゆきなど多くの美術家の展覧会図録や作品集へ寄稿した。80年代から、「退役批評家」と自嘲的に語り、「原稿執筆は喫茶店の梯子」もしなくなると語っていた。2000年の光州ビエンナーレで「芸術と人権」特別展示キュレーター、02年アートスポット「芸術キャバレー」設立。ドキュメンタリー映画『日本心中 針生一郎・日本を丸ごと抱え込んでしまった男』（大浦信行監督、2001年）、出演映画に「17歳の風景—少年は何を見たのか」（若松孝二監督、2005年）。68～73年多摩美術大学教授、74～96年和光大学教授、98～2000年岡山県立大学大学院教授。金津創作の森館長、原爆の丸木美術館館長、美術評論家連盟会長。川崎市で没、84歳。（引用 東文研）**美術文芸評論家、美教**

春口光義（はるぐち・みつよし/1933年～）

熊本市生れ。1951年熊本済々黌高等学校卒。56年京都市立美術大学西洋画科卒。熊本県立天草高等学校美術教諭。62年シェル美術賞3等賞。世界一周の旅に出る。69年パリのアトリエの海老原喜之助を訪ねる。70～73年帰国と共に九州産業大学芸術学部教員。76年西独ハノーバーに11ヶ月間滞在。この間リントルのバート工房でブロンズ制作、ウィーンで版画制作。版画集“GESICHTER”（シルクスクリーン7枚組）を発刊。79年現代の裸婦展招待出品（日動サロン）。明日への具象展招待出品（高島屋）。具象現代展招待出品（松坂屋）。熊本短期大学教養科教員。80年熊本県美術家連盟副会長就任。99年熊本県美術家連盟会長就任。熊本学園大学社会福祉学部教授退職、名誉教授。**洋画家、版画**

春田心齊（はるた・しんさい/1923～2014年）

鹿児島県生まれ。「二科展」出品作の評価により、1963年文部省推薦を得て渡仏する。以降現在までパリ在住。サロン・リアリテヌーヴェル招待、ドートンヌ等会員。2001年サン・タモン・モンロン市記念大会堂の開館に際し、選ばれて、彫刻家レイ・デルブレと2ヶ月間「2人展」が開催された。ディスカール・DESTAN元大統領や元フランスアカデミー総裁夫人等有力

者の支持。作品は縦線にこだわるところから、フランスではバトニズム（棒主義）の創始者と呼ばれるが、本質はその色の深遠さにあることは云うまでも無い。2014年没、90歳。**洋画家**

春田美樹（はるた・みき/1924～1995年）

1924年生れ。1946年東京美術学校工芸科漆工部中退。日劇ミュージックホールで演出担当、旧帝国劇場で舞台『モルガンお雪』に越路吹雪や森繁久弥と出演、日劇ミュージックホールでは深沢七郎、ジプシーローズらと出演する芸能人であった。女優の絵を描いていたが、交通事故に遭い転スペイン・アンダルシア地方のロンダに移り住み十数年暮らした。のち東郷青児に師事。二科会展で特選。東京で没、71歳。**洋画家**

春村ただを（はるむら・ただお/1901～1977年）

千葉県生れ。1920年関西学院高等学部商科に進む。22年日本創作版画協会展に入選。24年頃「きつつき版画工房」を主催。26年ロサンゼルス国際版画展に出品。28年春陽会で入選。29年川西英・北村今三・福井市郎・菅藤霞仙と創作版画グループ「三紅会」を結成。31年個人版画集『春』を刊行。32年日本版画協会会員。40年の国画会展で入選。38年頃右手に大怪我を負い、以来制作から遠ざかる。千葉市で没、76歳。**版画家**

春山武松（はるやま・たけまつ/1885～1962年）

1910年第一高等学校卒業、東京帝国大学文学部哲学科に学び、美術を専攻。14年年卒。18年迄大学院に在籍したが、18年東京朝日新聞社客員として入社、19年大阪朝日新聞社社員に転じ学芸部美術担当となり、其後は関西に定住して、26年美術研究の為印度、爪哇へ特派。この間「宗達と光琳」「光悦と乾山」の著書があり、18～44年朝日新聞に美術批評。40年朝日新聞社を停年退職し、その後は客員。戦後の著書は、「法隆寺の壁画」（22年）、「蛍光灯下の法隆寺」（23年）「日本上代絵画史」（24年）、「平安朝絵画史」（26年）「日本中世絵画史」（28年）。芦屋市で没、77歳。**美術評論家**

バロン吉元（バロン・よしもと/生誕年不詳～）

満州生れ。鹿児島県立指宿高等学校卒。武蔵野美術大学西洋画科中退。1967年創刊された『漫画アクション』（双葉社）において活躍し、代表作である大河漫画『柔侠伝』シリーズは70年に始まり10年間にわたり連載。『少年サンデー』にて、『力童くん』を連載。渡米。85年帰国後は『龍まんじ』の雅号で絵画制作

活動を開始する。92年二科展奨励賞受賞。97年現創展クサカベ賞、アーチ大賞展大賞、東京展優秀賞。2000年NYのソーホーにて、2001年には京都造形芸術大学芸術館にてそれぞれ個展開催。文化庁指名により、第一回文化庁文化交流使としてスウェーデンに赴き、日本の漫画文化を伝える為、様々なレクチャー・イベントを開催。2017年にはバロン吉元としての活動50周年を記念した画集『バロン吉元 画俠伝』がリイド社より発売、京都・高台寺において「バロン吉元 画俠展」が開催され、境内・北書院での原画展の他、本堂・方丈では高台寺へ奉納された「襖絵劇画」が公開された。日本漫画家協会理事。大阪芸術大学キャラクター造形学科元教授。劇画ブームの全盛期を築いた劇画家の一人である。漫画家、画家

伴清一郎 (ばん・せいいちろう/1950年～)

滋賀県生れ。1973年京都精華短期大学中退。81年京都美術展新人賞。88年個展(渋谷西武'90)。96年「藪内佐斗司・伴清一郎展」(新生堂)。2001年個展(日本橋三越)。洋画家

萬代比佐志 (ばんだい・ひさし/1897～1961年)

岡山県生れ。1917年大澤鉦一郎らと「愛美社」を結成。21年愛知県立工業学校図案科卒。第3回帝展入選。34年この頃まで油彩画を精力的に描く。大阪で肖像画店。46年名古屋市ディスプレイ会社に勤める。61年没、63歳。洋画家

半田圭治 (はんだ・けいじ/1916～1982年)

埼玉県生れ。太平洋画学校に学ぶ。津田清楓、平賀亀祐に師事。元示現会会員。東京で没、66歳。洋画家

半田 強 (はんだ・つよし/1948年～)

山梨県生れ。独学で油彩画を学ぶ。1970年国展に入選。75年渡欧。1979年新宿小田急で個展。82年国画会会員。84年山梨県新人選抜展で県立美術館大賞受賞。92年昭和会展出品。素の表情をした人物、群像表現は迫力を持つ。個展中心に発表。洋画家

坂東壮一 (ばんどう・そういち/1937年～)

香川県生れ。1962年香川大学卒。63年日本版画協会賞。65年春陽会賞。66年日本版画協会・山本鼎賞、東京国際版画ビエンナーレ。68年クラコウ国際版画ビエンナーレ。75年版画集『貝夢苑』(シロタ画廊)刊行。77年版画集『薔薇の秘法』(シロタ画廊)刊

行。80年版画集『夢の畏』(シロタ画廊)刊行。96年版画集『庭園の闇』(ギャラリーヴィヴアン)刊行。版画家

坂東敏雄 (ばんどう・としお/1885～1973年)

徳島県生れ。大阪で織田東禹に師事、1914年上京、川端画学校洋画部に学ぶ。18年第12回文展に初入選。19年第1回帝展、20年第2回帝展に出品。22年上山二郎と渡仏。渡仏直後からサロン・ドートンヌに入選、サロン・デ・テュイルリー、サロン・デ・ザンデパンダンなどに出品。24年シェロン画廊と契約し、パリなどで個展開催。39年仏人女性と結婚。渡航後一度も帰国することなく73年没、享年88歳。坂東はフランス画壇で評価を確立した数少ない日本人画家である。佐)洋画家、版画

半藤政衛 (はんとう・まさえ/1924年～)

新潟県生れ。祖父逸我、父逸溪は木彫家。1935年日本美術協会入選。45年宮本重良に師事。53年日本美術院院友。59年新潟美術展奨励賞。65年々会友。彫刻家

ひ

稗田一穂 (ひえだ・かずほ/1920年～)

和歌山県生れ。山本丘人に師事。創造美術、新制作協会、創画会を中心に活躍。1972～88年母校東京芸大の教授。63年MOA美術館岡田茂吉賞大賞。幻想性と詩情性をあわせもつ作品を発表している。91年「月影の道」で芸術院恩賜賞。91年文化功労者。作品に「霧を渡る蝶」など。日本画家

比嘉景常 (ひが・けいじょう/1892～1941年)

沖縄県生れ。東京高等師範学校を卒業後、沖縄県立第二中学校美術教師。西銘生楽が結成した樹緑会を引き継ぎ、戦後の沖縄美術を担う多くの人材を育てた。沖縄美術協会会長。王国時代の絵師の調査を行ない、新聞、雑誌に論考を発表。尚家の書庫にも出入り「琉球画人伝」の原稿を作成したが、刊行されることはなく、空襲で焼失。1941年没、49歳。美術教育者

日影 眩 (ひかげ・げん/生誕年不詳～)

兵庫県生れ。1967年法政大学文学部哲学科卒。72～87年新聞雑誌にイラストレーションを発表、80年代初めアーティストに転身。真下から見あげる構図と、記号的スタイルで、写真週刊誌「フォーカス」が、「元祖ローアングル」として取り上げるなど話題となる。東京で絵画個展を続け、グループ展にも繰り返し発表。俯瞰図の作家として知られた。94年米国に移

住、2004年永住権。NYで作品制作、発表の傍ら、月刊「ギャラリー」誌に「日影 眩の360° のニューヨーク」を94～2006年まで12年間連載。09年東邦画廊(東京・京橋)。池田20世紀美術館(静岡)で日影眩展開催。イラスト

樋笠数慶 (ひかさ・すうけい/1916～1986年)

高松市生れ。高松第一中学校卒、郷倉千靱に師事。41年院展で入選。56、60年院展で奨励賞。57、61年院展で日本美術院賞。58年日本美術院次賞。61年日本美術院同人。72年内閣総理大臣賞、83年文部大臣賞。日本美術院評議員。東京で没、70歳。
日本画家

比嘉盛清 (ひが・せいせい/1868～1939年)

那覇市生れ。佐渡山安豊に師事し、沖縄の風俗画を得意とした。1908年に第1回の展覧会が行なわれた丹青協会の設立に参加、風俗画家として多くの作品を残した。現存する作品に、双幅の「琉球婚礼之図」「関帝王」「達磨図」「石臼修理の老人」「琉球男女之図」がある。1939年没、71歳。日本画家、沖縄絵師、風俗画家

東島 毅 (ひがしじま・つよし/1960年～)

佐賀県生れ。1986年筑波大学大学院芸術学研究科美術(絵画)専攻修了。88年に渡英し、ロンドンの王立美術学校(Royal College of Art)で学ぶ。ニュー・ペインティングに関心をもつ。89年渡米、シュナーベルのスタジオに勤務、後、独自の抽象絵画を目指していった。96年VOCA賞。97年帰国岡山市に在住。
洋画家

東山魁夷 (ひがしやま・かゐり/1908～1999年)

横浜市生れ。結城素明に師事。1929年東京美術学校在学中、帝展入選。卒業後ドイツに留学。40年日本画家川崎小虎の娘と結婚。47年日展特選。以降、風景を題材に独自の表現を追求した。国民的日本画家と称された。瀬戸大橋の色を提案。65年日本美術院会員、日展理事。69年文化勲章授章、文化功労者。84年日展顧問。99年従三位、勲一等瑞宝章。1999年没、91歳。日本画家

疋田敬蔵 (ひきた・けいぞう/1851～没年不詳)

1851年生れ。72～76年横山松三郎に洋画を学ぶ。工部美術学校に入りフォンタネージに師事。81年内国勸業博覧会に出品。84～90年京都府画学校西洋画家教師。のちに石版画に移り、石版画集を制作。明治美術会会員 没年不詳。洋画家、版画、美教

樋口一郎 (ひぐち・いちろう/1908～1971年)

倉敷市生れ。1927年太平洋画会研究所に学ぶ。33年帝展に入選。文展、日展に出品。41年創元会創立に参加、同会会員、委員。49年日展委嘱。55年～1年半渡仏。東京で没、63歳。洋画家

樋口加六 (ひぐち・かろく/1904～1979年)

宮崎県生れ。1923年頃太平洋画会研究所 川端画学校に学び、林武に師事。27年青山学院英文科中退。29、30年二科展入選。31年独立展に出品。37年独立協会賞。44年岡田賞。46年独立美術協会会員。62～63年渡欧。65年独立展でG氏賞。東京で没、75歳。洋画家

樋口治平 (ひぐち・じへい/1922～1994年)

福岡県生れ。1960年安井賞に出品。66年創元展で創元会賞、文部大臣奨励賞。後、無所属。個展開催。71年新鋭選抜展、創元展で文部大臣賞。無所属。1994年没、72歳。洋画家

樋口富麻呂 (ひぐち・とみまろ/1898～1981年)

大阪生れ。1935年京都絵専卒。北野恒富・西山翠嶂・小松均に師事する。美人画・仏画を能くする。帝展・文展・院展に入選する。京都で没、83歳。日本画家、版画

樋口 洋 (ひぐち・ひろし/1942年～)

神奈川県生れ。1967年示現会展初入選。榎原健三に師事。73年示現会会員。75年日展初入選。87年日展特選、88年日展無鑑査/文化庁選抜展出品(～94年)、96年日展審査員(2000年)。97年日展会員、2004年日展評議員。12年内閣総理大臣賞。示現会常務理事、日展評議員、日本美術家連盟会員。
洋画家

彦坂尚嘉 (ひこさか・なおよし/1946年～)

東京生れ。70年多摩美術大学絵画科を中退。69年宮本隆司、石内都、刀根康尚、堀浩哉らと美術家共闘会議(美共闘)結成。69年現象学研究会を結成。1960年代美術の総括「年表/現代美術の50年」編纂。72年第一次美共闘レポリューション委員会を組織、美術館・画廊を使わない美術展を組織。75年美共闘資料集「反復・新興芸術の位相」刊行。99年グローバル・コンセプトチュアリズム展(ウイーンズ美術館、NY)に出品。2017年切断芸術運動展(東京都美術館)をキュレーション。2009～13年立教大学大学院特任教授。2005年兵庫国際絵画コンペティション

で優秀賞。現代アーティスト、詩人、ノイズ音楽家、芸術分析家

久野修男 (ひさの・のぶお/1917～1983年)

福島県生れ。太平洋美術学校で油画を学ぶ。40～44年二科展に出品。48年二紀展で褒状。50年二紀会同人。56年二紀展で同人優賞。57年二紀会委員。のち二紀会評議員。76年外遊。80年鍋井賞。77年二紀会福島支部長。福岡県で没、66歳。洋画家

土方定一 (ひじかた・ていいち/1904～1980年)

大垣市生れ。1922年水戸高等学校文科乙類入学、在学中同人雑誌「歩行者」「彼等自身」を発刊、草野心平の詩誌「銅鑼」の同人。27年東京帝国大学文学部美学美術史学科入学、大塚保治、大西克礼教授に師事。30年卒業後大学院へ進み、30～31年訪独。32年、「ヘーゲルの美学—唯物論美学への一寄与」を刊行。34年明治文学談話会に参加、機関誌「明治文化研究」の編集。35年、詩誌「歷程」の同人。「アトリエ」誌上に美術展評を書き、西洋美術並びに日本の近・現代美術に関する論考、批評を精力的に発表。38年内閣興亜院嘱託、41年大東亜省嘱託、華北綜合調査研究所文化局副局長に就任し北京へ赴く。同年「近代日本洋画史」、「岸田劉生」を出版。45年中国から引揚げ、49年千葉工業大学教授。50年、「世界美術全集」の編集委員。51年千葉工業大学を辞し、51年開館の神奈川県立近代美術館副館長。54年、美術評論家連盟結成会長。61年柳原義達、向井良吉らと宇部市彫刻運営委員会をつくり、16名の作家に呼びかけ同市常盤公園でわが国初の野外彫刻展を開催。63年「ブリューゲル」を刊行、同書で毎日出版文化賞。67年には「ドイツ・ルネサンスの画家たち」を刊行、68年同書で芸術選奨文部大臣賞。65年から神奈川県立近代美術館館長。70年全国美術館会議会長、全国公私立美術館の活動全般にわたり指導的役割。以後新設された北海道、群馬、熊本、三重などの美術館建設に尽力。72年多年の美術評論活動に対し紫綬褒賞。73年美術館、展覧会の企画活動に対し菊池寛賞。75年神奈川文化賞。78年勲三等瑞宝章。海外の作品を紹介する企画展覧会の用務で外国へ赴き、その芸術文化に関する国際親善の功績により、ノルウェー、ベルギー、フランス、イタリア、ポーランドからそれぞれ勲章。日本国際美術展、現代日本美術展各種の展覧会の審査。文化財専門審議会専門委員(67年、絵画彫刻部会)、群馬県立近代美術館顧問(70年)、国立西洋美術館評議員(71年)、東京国立近代美術館評議員(77年)。76年からは半世紀にわたる膨大な著述を集成した「土方定一著作集」(全1

2巻、78年完結)を刊行した。鎌倉市で没、75歳。(引用 東文研)美術館長、美術評論家、美術史家、美教

菱川師宣 (ひしかわ・もろのぶ/1618～1694年)

千葉県生れ。1661～73年江戸で絵師として活動。後年自ら「大和絵師」と称していた。土佐系の町絵師の画様を基調とし、漢画系の諸派や中国版画も吸収、先行する江戸版挿絵本にも大いに学んで菱川様といわれる新様式を工夫。確認される最初の署名本は墨摺絵本『武家百人一首』(1672年)。寛闊にして優美、洗練された描線と彩色、確固適切な構図による時様風俗描写は、世に称賛されて浮世絵の聖手名人の名をほしいままにした。100種以上の絵本・挿絵本、50種以上の枕絵本を残し、江戸名所、古物語の組物、枕絵の組物も制作した。肉筆作品も画卷、屏風、掛軸など相当数の作品が確認されている。また、絵図師・遠近道印と組んで制作した『東海道分間絵図』は江戸時代前期を代表する道中図として知られている。今日、浮世絵版画の祖として、また浮世絵派の原様式を創成した絵師として高く評価されている。1694年没、76歳。『見返り美人図』『風俗図巻』等の肉筆画も有名。江戸時代、浮世絵派草創期を代表する絵師

土方久功 (ひじかた・ひさかつ/1900～1977年)

東京生れの彫刻家。詩人、民俗学者としても有名。1924年東京美術学校卒。二科展、院展に石膏彫刻を出品。29年バラオに渡り各島の調査研究(南洋庁)。44年帰国後は、南洋に取材したテーマで個性的な木彫レリーフを制作。東京で没、77歳。(出典 わ眼)彫刻家

菱田春草 (ひしだ・しゅんそう/1874～1911年)

長野県生れ。1895年東京美術学校卒。帝国博物館嘱託として京都、高野山の古社寺を巡って模写に従事。96年日本絵画協会絵画共進会で銅牌。同年東京美術学校絵画科教員。98年東京美術学校騒動の際には岡倉天心に殉じて免職、日本美術院設立に参加し正会員。「朦朧体」と呼ばれる筆線を用いない没骨描法を用い、横山大観らとともに日本画の革新に邁進した。代表作《落葉》(1909年)、《黒き猫》(1910年)他2点が重要文化財に指定されている。1911年没、37歳。日本画家

菱田春夫 (ひしだ・はるお/1902～1987年)

東京生れ。菱田春草の長男。1919年横山大観に師事して日本画を学び、のち日本美術院研究会員。25年日本美術院の事務を委嘱され、42～52年財団

法人岡倉天心偉績顕彰会の設立に伴い、事務も兼任。以後、日本美術院の運営の任にあたり、58～79年日本美術院が財団法人となるに際し主事。61年日本美術院評議員、79年同理事。斎藤隆三を継いで日本美術院運営の大任にあたった。76年『菱田春草』(大日本絵画巧芸美術)の編集、51年「父春草の思い出」(『ゆうびん』、数々の春草の図書、展覧会図録の序文など)を書いている。春草の作品の鑑定家としても知られた。東京で没、84歳。 **日本美術院理事・前事務局長**

菱沼美仙 (ひしぬま・びせん/1888～1978年)

仙台市生れ。1902年白馬会洋画研究所に入所。17年仙台に「仙台洋画研究所」を設立、デッサン彩画を教えた。門下生に渋谷栄太郎、青山健治、藤原勉、佐藤謙、青山勤、星康次、富永太郎、首藤清喜らがいる。23年仙台を去り上京したが、戦後帰郷した。1978年没、90歳。 **洋画家、美術教育**

日高 薊 (ひだか・しとみ/1931～2004年)

鹿児島県生れ。1952年鹿児島大学教育学部終了。62年二科展入選、以後連続入選。71年渡欧。76年ル・サロン金賞、ル・サロン会員。77年パリ国際絵画芸術祭ベルギー王妃賞、グランプリ銀賞。78年パリ国際展特別賞。80年パリ国際展グランプリ金賞。81年ベルギー国際展にてヨーロッパ芸術文化賞。83年ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール会員。85年パリ市より文化功労賞。2004年没、73歳。 **洋画家**

妣田圭子 (ひだ・けいこ/1912～2011年)

大阪生れ。1930年大阪府立清水谷高等女学校卒。49年得度。和紙を切り台紙に貼って作り上げる日本画『草絵』を創始。NHK 学園も含め各地で教室を持ち、世界でも草絵を教え個展開催。78年アトリエ山梨県に構え、82年定住。86年豊原地区に芸術村を建設。この活動を県や町も積極的に支援され、87年「財団法人妣田豊原塾」も設立。1990年サントリー地域文化賞(サントリー文化財団)。2004年「文化庁長官表彰」。98年上野の森美術館で『妣田草絵塾展』を開催。2011年没、99歳。 **日本画「草絵」の創始者、美教**

飛田周山 (ひだ・しゅうざん/とびた・しゅうざん/1877～1945年)

茨城県生れ。1896年久保田米僊に入門。上洛し竹内栖鳳に師事。1900年日本美術院研究所に入り、橋本雅邦に学ぶ。03年岡倉天心を茨城県五浦に案内し、その別荘購入に尽力、のちの日本美術院五

浦研究所設立のきっかけをつくる。06～41年文部省の囑託として国定教科書の挿絵も担当。17年文展で特選。19年帝展で特選。『小學国語読本』巻1の「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の挿絵画家として知られる。1945年没、68歳、 **日本画家**

櫃田伸也 (ひつだ・のぶや/1941年～)

東京生れ。1964年東京藝術大学美術学部油画専攻卒、大橋賞、66年同大学院修了、同校非常勤助手。65～68年新制作展で新作家賞。72年同协会会员。96～2001年愛知県立芸術大学美術学部絵画科教授。79年文化庁芸術家在外研究員、渡仏。87年安井賞。2001年東京藝術大学美術学部絵画科教授。 **洋画家、美教**

秀島由己男 (ひでしま・ゆきお/1934年～)

熊本県生れ。南天子画廊で個展。メゾチントでモノクロークの世界表現。1995年大川美術館で秀島由己男-魂の叫び-展。1999年神奈川県立美術館で秀島由己男展。2000年熊本県立美術館で魂の詩-秀島由己男展開催。NHK美の朝で「闇の中で叫ぶ」放映。 **版画家**

尾藤 豊 (びとう・ゆたか/1926～1998年)

東京生れ。1947年東京美術学校建築科卒。同年前衛美術会展参加。「ルポジュータージュ絵画」の先駆け。52年桂川寛や勅使河原宏らと「青年美術家連合」結成。50～60年代ニッポン展や日本アンデパンダン展出品。「フォーム」、「革命的芸術家戦線」結成。批評的な芸術運動を展開。70年「齧展」や個展を中心に活動を続けた。東京で没、72歳。 **前衛、洋画家**

人見 彌 (ひとみ・わたる/1887～1937年)

名古屋市長生れ。1911年東京美術学校西洋画科卒。17年ころ帰郷。名古屋市に「人見洋画研究所」を設立。22年東海美術協会評議員。22年名古屋高等工業学校講師。37年没、50歳。 **洋画家、美教**

日名子実三 (ひなこ・じつぞう/1893～1945年)

大分県生れ。1918年東京美術学校彫塑科卒。朝倉文夫に師事し、東台彫塑会の新人として囑望。29年外遊。28年年斎藤素巖等と構造社を創設、其の出品作に於て自ら応用彫塑への活路をも示範し、更に同志と共に帝展改組に当り第三部会を組織。爾来、40年第三部会改称の国風彫塑会々員。神奈川県で没、52歳、 **彫刻家**

日向 裕 (ひなた・ゆたか/1911～1974年)

長野県生れ。1928年東京美術学校油画科卒、田辺至、南薫造に師事。43年国画会入選、45年奨励賞、48年会員。53年日本風景画代表作品展に出品。56年渡仏し、グラン・ショミエール研究所に学ぶ。57年梅原龍三郎とピカソを訪ねた。58年現代日本美術展、59年日本国際美術展に出品。69年ギリシャ、トルコ取材旅行。長野県で没、62歳。洋画家

日野耕之祐（ひの・こうのすけ/1925～2013年）

福岡市生れ。1948年日本美術学校洋画科卒。林武に師事。時事新報、産経新聞で美術記社。58年光風会展プールブルー賞、63年会員。62年具象研究会を発足、機関誌『具象』を発刊。62年日展入選し、67、70年特選。76年日洋展発足運営委員。上野の森美術館大賞展審査員。89年高松宮殿下記念世界文化賞絵画部門選考委員。ヘンリー・ムーア大賞展、高村光太郎賞展、ロダン大賞展の審査委員。94年彫刻の森美術館で個展開催。98年美術評論家・洋画家の活動に文化庁長官表彰を受けた。2013年没、88歳。洋画家

日原 晃（ひはら・あきら/1910～1997年）

津山市生れ。小林喜一郎に学び、1944年日本大学芸術学科卒。53年日展特選、朝倉賞、日展参与、審査員。62年2年間渡欧、フランスの画家ポール・アイズピリと親交を結ぶ。重厚な色調で、日本海と山陰の港町の風景を描き続けた。後進の指導にも熱心で県北の画壇の指導的役割を果たした。1997年没、87歳。洋画家

日比野克彦（ひびの・かつひこ/1958年～）

岐阜市生れ。1984年東京芸術大学美術研究科大学院(デザイン専攻)修了。82年日本グラフィック展グランプリ。83年ADC賞最高賞。80年代のグラフィック界で注目。イラスト、デザイン、舞台美術、パフォーマンス等活動。94年平塚市美術館で個展開催。94年日本文化デザイン会議94福岡のシンボルマーク、シンボルオブジェ制作。イラスト、現代美術家、パフォー

日比野勇次郎（ひびの/ゆうじろう/生没年不詳）

名古屋市長生れ。京都に出て小山三造に師事、洋画を学ぶ。1892年守住勇魚、小山三造らと京都祇園有楽館にて油絵展。93年田村宗立、小山三造、伊藤快彦らと京都倶楽部で連合展。1903年関西美術展に出品。後、広島陸軍地方幼年学校教官。洋画家

日比久子（ひび・ひさこ/1907～1991年）

福井県生れ。1926年～29年サンフランシスコのカリフォルニア美術専門学校に学ぶ。34～37年カリフォルニア・フェア、39年金門橋国際博覧会に出品。54年カリフォルニア日系人画家協会会長。91年没、84歳。洋画家

日比松三郎（ひび・まつさぶろう/1886～1947年）

1906年渡米。日米新聞に政治漫画。19～39年カリフォルニア美術専門学校で学び、指導にあたる。35年イースト・ウエスト・ソサエティの創立に参加。第2次世界大戦中はトバス収容所で美術学校を創立、指導にあたる。47年没、61歳。洋画家、美教

兵頭和男（ひょうどう・かずお/1920～2012年）

横浜市生れ。1942年独立展入選。一時、帝国美術学校在籍。画業は独学。47年独立展会友推挙。50年田近憲三氏と交友。84、86、88、2000年日本橋三越で個展。92年東京セントラル絵画館で回顧展。2001年横浜文化賞。12年没、92歳。(出典 わ眼) 洋画家

平井顕斎（ひらい・けんさい/1802～1856年）

静岡県生れ。はじめ掛川の村松笠斎(りっさい)にまなび、江戸で谷文晁に、のち渡辺華山入門。山水画を得意とし、福田半香(はんこう)、椿椿山(つばき・ちんざん)らと親交をむすんだ。1856年没、55歳。江戸時代後期の画家

平井光典（ひらい・こうてん/1918～1995年）

福岡県生れ。九州医学専門学校卒。医業の傍ら、絵に親しむ。1953年独立展入選し、63年独立賞、74年会員、独立美術協会九州支部長。74年選抜展賞、県美術協会賞(会員展)、独立美術協会賞(審査員)。福岡県美術協会でも活躍。1995年没、77歳。著作も多い。洋画家

平井武雄（ひらい・たけお/1882～1943年）

北海道生れ。1908年東京美術学校洋画科卒。08年渡米、NYで5年間修行、古名画を模写。帰国後、13年日本水彩画会の創立に参加。23年には罹災会員救済の為丸山晚霞と支那、仏印、ビルマ、印度で展覧会開催。26～29年女子美術専門学校講師。28年昭和美術界を創立。水彩画を得意とした。43年没、61歳。水彩画家

平井為成（ひらい・ためなり/1890～1979年）

高松市生れ。1907年東京美術学校入学。在学中に同期生の萬鉄五郎、山下鉄之輔らとともに「アブサ

ント会」を結成、卒業後は岸田劉生らと合流し、フウザン会を結成した。青森県八戸中学を経て松山中学に在職。1922年帝展に出品。27年構造社に参加。28年欧吾社洋画研究所会長。晩年は香川に帰郷して指導者として美術教育に専念した。1979年没、89歳。
洋画家、美教

平岡権八郎 (ひらおか・ごんぱちろう/1883~1953年)

東京生れ。竹内栖鳳、のち黒田清輝に師事。1910年文展で三等賞。17年文展で特選。23年文展無鑑査。24年光風会会員。37年滞欧。料亭花月楼を経営。東京で没、59歳。
洋画家

平賀亀祐 (ひらが・かめすけ/1889~1971年)

三重県生れ。1906年渡米。14年サンフランシスコ美術学校卒。16年ロスに移る。25年渡仏、アカデミ・ジュリアンに学ぶ。パリに定住。ル・サロンに出品、受賞。54年ル・サロン会員。55年50年ぶりに帰国。ブリジストン美術館で個展。松方コレクション返還に尽力。パリで没、82歳。
洋画家

平賀 敬 (ひらが・けい/1936~2000年)

東京生れ。1958年立教大学経済学部卒。1963年シェル美術展三席受賞。64年国展で新人賞受賞。国際青年美術家展大賞受賞(パリ留学賞)。65年渡仏。83年人人展出品、会員。「現代の絵師・平賀敬のヴァンギャルド戯作画展」平塚市美術館。箱根町で没、64歳。
洋画家

平賀源内 (ひらが・げんない/1728~1780年)

1728年生れ。讃岐高松藩出身。江戸で田村藍水に学ぶ。藍水と日本初の物産会をひらく。火流布(かかんぶ)(石綿耐火布)、寒暖計、エレキテル(摩擦起電器)を製作、鋳山を開発。戯作などでも才能を発揮。人を殺し入牢中、1780年没、52歳。本姓は白石。編著に「物類品隠(ひんしつ)」、著作に滑稽本「風流志道軒伝」、浄瑠璃「神霊矢口渡」など。江戸時代中期の本草家、戯作(げさく)者。布地油彩の「西洋婦人図」が残されている。
洋画家

平川清蔵 (ひらかわ・せいぞう/1897~1964年)

広島県生れ。1920年日本創作版画協会展に木版画入選。木口木版を得意とした。28年日本創作版画協会会員。31~39年日本版画協会創立会員。35年小野忠重らと新興美術家協会創立会員。37年ごろ玉村方久斗らの新興美術家協会の版画部門で活躍した。作品に「牛と男」などがある。1964年没、67歳。
版画家

平川敏夫 (ひらかわ・としお/1924~2006年)

愛知県生れ。1940年京都の着尺図案塾に住み込みで入門。47我妻碧宇主宰の新日本画研究会に学ぶ。48年中村正義も参加。50年豊橋美術展で豊橋市民賞。賞。中村正義の勧めで創造美術展入選。51年創造美術協会と新制作派協会が合併し、新制作協会日本画部となり、以後出品を重ねる。54、58、62

新制作協会展で新作家賞、63年会員。74年新制作協会日本画部会員が退会し、創画会を結成。78年京都芸術短期大学客員教授83年愛知県教育委員会文化功労者。
日本画家

開 光市 (ひらき・こういち/1958年~)

石川県生れ。1984年金沢美術工芸大学大学院修了。90、91年国展国画賞(94年会友優作賞)、のち会員。95年安井賞展出品、油絵大賞展佳作賞。98年昭和会展優秀賞。コンテンポラリージャパニーズアート展(ポーランド、スロベニア)、日本現代作家作品(中国)出品。2000、03年日動画廊で個展(東京・名古屋)。01年安田火災美術財団選抜奨励展安田美術賞。現在、金沢学院大学美術文化学部准教授。
洋画家、美教

平木正次 (ひらき・まさじ/1859~1943年)

江戸生れ。1873年五姓田芳柳に師事。78年玄々堂印刷所で石版画を学ぶ。80年文部省教育博物館に勤務。後、帝国大学理科、東京高等師範の助手。77、81年内国勸業博覧会に出品。82年工芸品共進会に出品。90年明治美術会委員。80年より教育博物館勤務、帝国大学理科、東京高等師範の助手。1943年没、85歳。
版画家、博物館

平櫛田中 (ひらくし・でんちゆう/1872~1979年)

岡山県生れ。1897年上京、高村光雲に学ぶ。1907年日本彫刻会を結成。同会展の出品作で岡倉天心にみとめられた。日本美術院再興につくす。44年東京美術学校教授。彩色木彫作品が多い。62年文化勲章。東京で没、107歳。作品に「転生(てんしょう)」「鏡獅子(かがみじし)」。彫刻家

平澤喜之助 (ひらさわ・きのすけ/1919~1994年)

長野県生れ。1938年帝国美術学校中退。一水会展、双台社展に入選。代々木絵画研究所講師。中川紀元に師事。小泉清のフォーヴと出会う。朝井閑右衛門の知遇を得る。56年代々木絵画研究所講師。64年大調和会参加、94年まで運営委員。新樹会出品。「新しき村」美術展へ出品。1994年没、75歳。
洋画家

平澤熊一 (ひらさわ・くまいち/1908~1989年)

長岡市生れ。1927年現;工学院大卒。27~33年川端画学校に学ぶ。ここで柿手春三、井上長三郎と交友。33~37年台湾で絵画の修行、制作。38年独立美術協会展入選。43年美術文化展で奨励賞。50年宇都宮にアトリエを構え、以後、自由美術展に出品。55年自由美術協会会員。1989年没、81歳。2012年練馬区立美術館で個展。15年栃木県立美術館で個展開催。
洋画家、水彩

平澤重信 (ひらさわ・じゅうしん/1948年~)

長崎市生れ。68年自由美術展出品。71年日本大学獣医学部卒。81年シェル美術賞展に出品。84年日本国際美術展に出品(以降3回出品)。85年安井

賞展に出品。90年自由美術展にて鬚光賞。2005年朝日新聞の挿絵を描く。11年武蔵野美術大学油画学科非常勤講師。洋画家、美教

平沢大暲(貞通) (ひらさわ・たいしょう/1892~1987年)

東京生れ。日本水彩画会研究所に学ぶ。1919年帝展入選。二科会、光風会展、帝展、新文展に出品。27年日本テンペラ画会を結成。のち同会会長。帝銀事件死刑囚。獄中で絵筆を持ち、1300点描いた。東京で没、95歳。洋画家、水彩

平沢屏山 (ひらさわ・びょうざん(へいざん)/1822~1876年)

岩手県生れ。本名は国太郎、または助作。屏山は号。アイヌの生活をモチーフに数々の作品を描き、アイヌ絵を代表する絵師とされている。作品が海外で発見されている。函館で没、54歳。江戸時代末期から明治にかけての絵師

平瀬礼太 (ひらせ・れいた/1966年~)

千葉県生れ。1990年京都大学文学部美学美術史学科卒。日本の美術史家。姫路市立美術館学芸員。著書、『銅像受難の近代』吉川弘文館 2011、『彫刻と戦争の近代』吉川弘文館 歴史文化ライブラリー 2013、『肖像文化考』春秋社 2014、編纂『米倉寿仁、飯田操朗・世界の崩壊感覚』編本の友社 コレクション・日本シュルレアリスム 1999。美術史家・学芸員・戦争期の美術の研究者

平田峻三 (ひらた・しゅんぞう/1912~1999年)

奈良県生れ。帝国美術学校西洋画科卒。高島達四郎に師事。奈良県内の山中中学校教諭などを経て、五條高女の図画教諭になった。退職後は橿原市に戻り奈良芸術短大教授となる。1957年大阪日動画廊で個展。60年第37回春陽会展で準会員。65年第42回春陽会展で会員。99年没、享年87歳。(佐)洋画家、美教

平田千秋 (ひらた・せんしゅう/1882~1934年)

山口県生れ。上京し、葵橋洋画研究所で黒田清輝、久米桂一郎に師事。1910年第13回白馬会展に出品。12年第1回光風会展に出品。14年第8回文展に出品、以後11、12回展に出品。19年第1回帝展に出品、以後も11回展まで出品。31年洋画小品展を資生堂ギャラリーで開く。34年没、享年52歳。同年9月平田千秋遺作展を青樹社画堂で開催。(佐)洋画家

平田弘史 (ひらた・ひろし/1937年~)

東京生れ。大阪の設備会社「近畿設備」で作業員。中学校の先輩であった漫画家宮地正弘の勧めで大阪の貸本出版社日の丸文庫に原稿を持ち込む。195

8年、短編漫画誌『魔像』第5集に掲載の「愛憎必殺剣」で漫画家デビュー。以降『魔像』の看板漫画家として時代劇を中心に、骨太な劇画を書き続ける。65年上京し、白土三平の仲介で加治一生名義で発表した「愛」で『ガロ』に初登場。以降活躍の場を雑誌連載に移し、劇画ブームに乗って人気が出る。2013年、全業績により日本漫画家協会賞文部科学大臣賞受賞。漫画家

平塚運一 (ひらつか・うんいち/1895~1997年)

松江市生れ。1913年松江商業学校中退、15年伊上凡骨に版画師事。21年児童自由画、農民美術育成運動参加。26年国画会絵画部入選、30年国画会会員。31年国画会版画部創設で中心的役割。28~40年日本全国で版画講習会を開催。35~44年東京美術学校で木版画を教える。62年渡米し創作版画普及。77年勲三等瑞宝章。89年松江市名誉市民。著書に『版画の技法』『創作版画の作り方』出版。東京で没、102歳。版画家、美教

平通武男 (ひらどおり・たけお/1907~1991年)

大阪生れ。1926年天理中学校卒、川端画学校終了。熊岡絵画道場で熊岡美彦に師事。32年東光会展入選。35年東光賞。37年東光会会員。33、34年帝展入選。47年日展特選。58年日展会員、参与。61年渡仏。63~73年岡山大学教授。80年東光会副理事長。86年梅田近代美術館で個展。大阪で没、83歳。洋画家、美教

平通武男 II (ひらどおり・たけお/1907~1991年)

大阪生れ。1926年天理中学校卒。新燈社展で朝日新聞社賞。30年上京し、川端画学校に学ぶ、本郷洋画研究所に入所。33年第1回東光会展でK氏奨励賞。第14回帝展初入選。35年第3回東光会展で東光賞。37年第5回東光会展で会員。47年第3回日展で特選。58年日展会員、のち参与。63年~73年岡山大学教授。80年東光会副理事長。86年大阪、梅田近代美術館で画業60年展。91年3月28日、大阪で没、享年83歳。(佐)洋画家、美教

平野杏子 (ひらの・きょうこ/1930年~)

神奈川県生れ。大久保作次郎、三岸節子に師事。1954年より平塚市にアトリエ。初期は具象的な風景や静物に才能を見せながら、次第に仏教に傾倒し、抽象的な作風の大作を発表するようになる。サロン・ド・メ展への招待出品。旺玄会展に出品。76年、2003年画集制作。07年平塚市美術館で個展。洋画家、造形作家、版画

平野四郎 (ひらの・しろう/1904~1983年)

青森県生れ。1920年青森師範学校に入学。同校の図画教師・水谷英一に画才を見出された。24年同

校卒業後、七戸で教壇に立った。30年上京し川端画学校や小西正太郎塾で学ぶ。小学校で教諭。39年大潮展入選、46年会員。75年蒼樹会の結成に参加し、評論家協会賞。79年同展で文部大臣賞。1983年没、79歳。洋画家、美教

平野富山 (ひらの・ふざん/1911～1989年)

静岡県生まれ。清水市立江尻高等小学校卒、1928年に彫刻家を志して上京、池野哲仙に師事する。41年より斎藤素巖に師事。48年日展出品以後は一貫して日展に出品を続けた。56年、59年特選。63年日展会員、82年同評議員、日展審査員。62年太平洋展で文部大臣賞を受け、同年会員。85年静岡駿府博物館で「平野富山彩色木彫回顧展」が開催。東京で没、78歳。彫刻家

平野政吉 (ひらの・まさきち/1895～1989年)

秋田市生まれ。米穀商から広大な田畑を所有する大地主となった初代政吉を祖父に、家業を継ぐ一方金融業をもとにした「平野商会」を設立した二代政吉を父。秋田中学に入学するが中退。20歳頃から飛行機に興味を持ち、日本帝国飛行協会の小栗常太郎の主宰する小栗飛行学校に5年間ほど学ぶなど、新奇なものに逸早く傾倒。一時、画家を志すなど美術にも興味を持ち、1929年洋画家藤田嗣治の帰国展を見、34年の二科展で藤田の知遇を得、その作品に強くひかれ蒐集を始める。同12年には藤田を秋田に招き大壁画「秋田の行事」の制作を依頼するなど、藤田嗣治のコレクターとして知られるようになる。38年私立美術館設立に着手するが、第二次世界大戦下の資材不足のため頓坐し、67年財団法人平野政吉美術館を開館してその館長となった。藤田嗣治のコレクションのほか、郷里に関連する秋田蘭画を中心とした初期洋風画、西洋絵画など幅広く蒐集、公開を行ない、豪胆放逸な人柄とともに広く世に知られた。秋田市で没、93歳。コレクター、平野政吉美術館館長

平野 遼 (ひらの・りょう/1927～1992年)

大分県生まれ。絵は独学。1949年上京、新制作展初入選。51年自由美術協会展初入選。58年自由美術協会会員。64年主体美術協会創立会員。78年以降、海外取材。86年池田20世紀美術館。87年北九州市立美術館で回顧展開催。北九州市で没、65歳。洋画家

平原美夫 (ひらはら・よしお/1911～1975年)

宮崎県生まれ。1930年宮崎県師範学校卒。教職に就いたが、有田四郎の勧めで上京、新写実派研究所

で学んだ。東京の王子中学校で教師をしながら制作に励み、36年文展入選、38年一水会展入選。39年旧制県立延岡中学校美術教師。高鍋高校時代は野球部の指導、54年に甲子園出場に導いた。1975年没、64歳。洋画家、美教

平福百穂 (ひらふく・ひやくすい/1877～1933年)

秋田県生まれ。幼少より父穂庵に画技を学び、のち川端玉章に師事する。東美校卒。結城素明ら同志と无声会・金鈴社を創立、のちには帝展審査員を務めた。「アララギ」派の歌人としても知られる。1933年没、57歳。日本画家

平馬立彦 (ひらま・ひらま・たてひこ/1922～1999年)

ソウル市生まれ。青山学院中等部、早稲田第二高等学校卒、1942年東京美術学校油絵科入学、47年卒、49年研究科修了。50～51年渡米留学生としてArt Institute of Chicagoに学ぶ。56～58年アラバマ州率大学美術学部助教授。60年帰国、東京画廊、文芸春秋画廊、大阪フォルム画廊で個展。64年東京クラフトデザイン研究所の基礎造詣、デッサンの講師として後進育成。スターダンサーズ・バレエ団など、バレエの衣装、舞台美術を手がける。1999年没、77歳。洋画家

平松 譲 (ひらまつ・ゆずる/1914～2013年)

東京生まれ。豊島師範(現・東京学芸大)卒。日展、白日会展に出品。1950年日展で特選、85年文部大臣賞。白日会展中沢賞、内閣総理大臣賞、92年芸術院賞。元日展顧問。95年芸術院会員。2013年没、99歳。洋画家

平松礼二 (ひらまつ・れいじ(1941年～))

東京生まれ。愛知県立旭丘高等学校美術科卒。愛知大学卒。1977年創画展 創画会賞。第3回春季創画展 春季展賞。1980年東京セントラル美術館日本画大賞展 優秀賞。89年 山種美術館賞展 大賞。現在、無所属。(財)美術文化振興協会評議員。元多摩美術大学教授。了徳寺大学学長を歴任。自然の強さと優しさを分極させ繊細に描いている。多くの詩画集、画集などを出版。89年山種美術館賞展大賞。日本画家、美教

平山郁夫 (ひらやま・いくお/1930～2009年)

広島県生まれ。東美校卒業後、前田青邨に師事。日本美術院賞を再度受け同人となり、現在理事・評議員として活躍している。シルクロードを描いた一連の近作によって新潮社芸術大賞を受賞。また、敦煌壁画

の保存修復を手掛ける。平成元年東京芸大学長に就任。文化功労者。文化勲章受章。2009年没、79歳。
日本画家

平山隆子 (ひらやま・たかこ/1943年～)

1966年女子美術大学洋画科卒、福沢一郎に師事。卒業後、テレビCMのプランナー、ディレクターの仕事に従事、CM作品の受賞はACC賞秀作賞2回、カンヌ国際CMコンクール受賞、アメリカ・クリオ賞など。2001年主宰絵画教室グループ展(町田市立国際版画美術館)、隔年に開催。**洋画家**

鱒崎英朋 (ひれざき・えいほう/1881～1968年)

東京生れ。右田年英、川端玉章に学ぶ。1901年錦木清方らと烏合会を結成。美人画、相撲絵を得意とし、広津柳浪「河内屋」、柳川春葉「生さぬ仲」など新聞や雑誌、単行本の挿絵をかいた。1968年没、87歳。**明治-昭和時代前期の挿絵画家、日本画家、版画、浮世絵**

晝間 弘 (ひるま・ひろし/1916～1984年)

東京生れ。東京美術学校彫刻科木彫部で北村西望に師事。1939年新文展入選。40年同校卒、研究科に進む。卒業制作で正木記念賞、40年東方彫塑院展で彫塑院賞。47年日展で特選、58年日展会員。70年日本芸術院賞。80年日本芸術院会員。76～79年筑波大学教授。堅固な写実性と清明穏和な表現をその特徴としている。**彫刻家、美教**

広島晃甫・新太郎・滉人 (ひろしま・こうほ/1889～1951年)

徳島市生れ。香川県立工芸学校(現香川県立高松工芸高等学校)、東京美術学校日本画科(現東京藝術大学)卒業。東京で没、62歳。**日本画家、版画家**

廣瀬勝平 (ひろせ・かつへい/1877～1920年)

兵庫県生れ。上京して山本芳翠の画塾「生巧館」で学ぶ。1903年東京美術学校西洋画科卒。大阪毎日新聞社(挿絵担当)入社。13年文展で褒状。18年光風会会員。19年渡欧。20年イタリア・ナポリで没、42歳。21年遺作展が大阪三越で開催。**洋画家**

広瀬 功 (ひろせ・こう/1921～2006年)

横浜市生れ。1946年東京美校油絵科卒。卒業後、安井曾太郎に師事。50年日展で特選。63年日展菊華賞、日展審査員。82年日展内閣総理大臣賞、文部大臣賞受賞。一水会常任理事。85年日本芸術院賞。86年小山敬三賞受賞。日展理事。2004年没、84歳。**洋画家**

広瀬操吉 (ひろせ・そうきち/1895～1968年)

兵庫県生れ。姫路師範卒。関西芸術院、本郷洋画研究所に学ぶ。はじめ千家元麿の「詩」同人となり、1921年からその後継誌「詩の家」の編集に従事した。牧歌的な詩風で詩集「雲雀」「空色の国」のほか美術評論書がある。「三笠画廊」を経営。「日本初期洋画研究所」設立。明治美術の傑作コレクション(ヤンマー創

業者山岡孫吉)に貢献。1968年没、73歳。**洋画家、詩人、美術評論**

広瀬臺山 (ひろせ・たいざん/1751～1813年)

大阪生れ。北部・美作の津山藩士の子として大坂屋敷で生まれる。池大雅の有力門人で大坂文人画壇の重鎮であった福原五岳に就いて画法を学ぶ。1775年津山へ帰る。81年江戸定府を命ぜられた。1811年津山に戻り。江戸を離れる際には、増山雪斎・谷文晁・大窪詩佛・僧雲室等が送別の書画を贈っていることが、現存作品より知られる。臺山は、『八種画譜』や『芥子園画伝』といった中国の画譜の方法論を学び、細密な筆致で謹厳な印象を受ける格調高い作例が多い。岡山県で没、63歳。**江戸時代中期後期の文人画家**

廣瀬不可止 (ひろせ・ふかし/1903～1983年)

福岡県生れ。福岡中学中退。上京ヲリレロ玩具制作所で人形を制作。博多人形に入門。独自で彫刻を学ぶ。1933年二科展入選、会友、会員。二科西人社創立に参加。戦前の築港博覧会や福岡美術会、戦後の西部美術展に出品。さらに同15年の県美術協会創設、同24年の同協会再興にも創立会員として尽力し、のち副会長も務めた。戦前の具象彫刻から、戦後は抽象に転じ、独自の表現を追求した。1983年没、80歳。**彫刻家**

広田多津 (ひろた・たつ/1904～1990年)

京都市生れ。家事を手伝いながら独学で絵を始めた。1919年頃三木翠山に書生として日本画の手ほどきを受け、23年頃から甲斐莊楠音に学ぶ。24年竹内栖鳳に入門し、竹杖会で研鑽を積む。35年西山翠嶂に入門。36年文展鑑査展に入選。39、42年新文展で特選。46年日展で特選。48年向井久万、上村松篁、秋野不矩、沢宏毅、橋本明治、福田豊四郎、吉岡堅二ら、京都・東京両系の画家による創造美術の結成に参加、創立会員。同会は、51年新制作派協会と合流して新制作協会日本画部、会員として以後同展に連年出品。55年新制作展に出品作で上村松園賞。74年新制作協会日本画部が独立、創画会を結成して以降、創立会員。69年東京の彩壺堂、75、81年東京セントラル絵画館で個展。77年京都日本画専門学校校長。78年京都府と京都市の文化功労賞。京都で没、86歳。**日本画家、美教**

廣田雅久 (ひろた・まさひさ/1927年～)

大阪市生れ。1950年同志社大学文学部文化学科卒。63～70年春陽展、油彩連続出品、大阪市賞・読売新聞社賞・大阪市教委賞。71年春陽展・新人賞、77年春陽会会員推挙、95年春陽会10人のメッセージ展(京阪百貨店・守口)。70～75年全関西美術展・佳作賞(全関西美術展賞三席(版画最高賞)3回、現在招待作家)。82年ミニプリント国際版画展(スペイン)。85年中華民国国際版画ビエンナーレ(台北、87年も)。86年現代版画の表現と技法(練馬区立美術

館)。87年ノーベル賞顕彰財団(スウェーデン)より制作依頼。洋画家、版画家

広田 稔 (ひろた・みのる/1959年～)

広島県生れ。1985年東京藝術大学大学院修士課程修了。91年白日会展出品佳作賞、93年富田賞・会員推挙、95年安田火災美術財団奨励賞、96年文部大臣奨励賞、2004年内閣総理大臣賞、白日会常任委員。99年絵画教室「ATELIER21」共宰。定期的に個展開催。広田稔画集刊行(求龍堂)。洋画家

ヒロ トミザワ (ひろ・とみざわ/生年不詳～)

1969年千葉大学工業短期大学部・工業意匠科卒。2001、3、4、5年銀座・中山画廊にて個展。02年銀座・渋谷画廊での「水彩家族展」。04、06、08、10年文春画廊で個展。07年みゆき画廊にて個展。09、10年京橋・四季彩舎にて個展。11年しらみず美術にて個展。洋画家、水彩

広野殷生 (ひろの・しげお/1919～1972年)

静岡県生れ。1950年中部国画家賞。渡米、コロンビア大学留学。49年春陽会賞。54～56年渡欧。57年銀座松坂屋で個展。63年春陽会会員。72年没、52歳。洋画家

広幡 憲 (ひろはた・けん/1911～1948年)

秋田県生れ。日本大学中退。プロレタリア美術研究所に学ぶ。藤田嗣治の助手を務める。1937年二科展に初入選。39年絶対象派協会の結成に参加。九室会に参加。46年二科会特待。同年、自由美術家協会に出品。立川市で没、37歳。(出典 わ眼)洋画家

広本季與丸 (ひろもと・きよまる/1908～1975年)

愛知県生れ。関西美術院で学ぶ。太平洋美術学校卒。1934年帝展に初入選。太平洋展で相馬賞。創元会運営委員。65年日展無鑑査。73年渡仏。温厚な人物画、静物画に特徴がある。75年没、67歳。(出典 わ眼)洋画家

廣本 進 (ひろもと・すすむ/1897～1991年)

愛知県生れ。山元春挙門の川村曼舟の内弟子となり、その関係から1918年春挙の画塾早苗会に入塾。師曼舟は、春挙没後、早苗会を主宰。32年京都市立絵画専門学校研究科を卒。28年帝展で特選。29年パリで行なわれた巴里日本美術展に選抜。63年新興美術院の京都支部設立に伴い、理事として同院に参加。以後同院に出品し、75年第25回展が文部大臣奨励賞、91年内閣総理大臣賞。90年新興美術院理事長。80年比叡山延暦寺東塔院の大壁画「安楽行品」2面、83年大津市坂本町の日吉大社全景。86年京都市芸術文化協会賞。京都で没、94歳。日本画家

廣本 了 (ひろもと・りょう/1899～1980年)

神奈川県生れ。1924年東京美術学校卒。25年帝展初入選、以後、帝展・新文展に出品。41年白日会会員。1980年没、81歳。洋画家

日和崎尊夫 (ひわさき・たかお/1941～1992年)

高知市生れ。1963年武蔵野美術大学卒。畦地梅太郎に板目木版を学び、翌年から木口木版を独学。66年日本版画協会新人賞、67年同協会賞、会員。69年フィレンツェ国際版画ビエンナーレで金賞。74年文部省芸術家在外研修員渡欧。78年バルセロナ開催「現代日本の10人の版画家」展出品。91年山口源大賞。木口木版画家による「鑿の会」に参加。代表作に「KARPA」シリーズ、「海淵の薔薇」「五億の風の詩」等。画集「博物譜」「星と舟の唄」「ピエロの見た夢」「薔薇刑」「フレシマ」「緑の導火線」。小口木版の第一人者。高知市で没、50歳。版画家

日和佐 廣 (ひわさ・ひろし/1950年～)

愛媛県生れ。1973～78年新宿美術研究所に学び、麻生三郎、山口長男の指導を受ける。1987年あかね画廊個展。1999年「汎美展」出品。2005年すどう美術館「新宿7人展」出品。同年、京橋・東邦画廊個展。2010年ギャラリー無寸草「山根コレクション・7人展」出品。洋画家